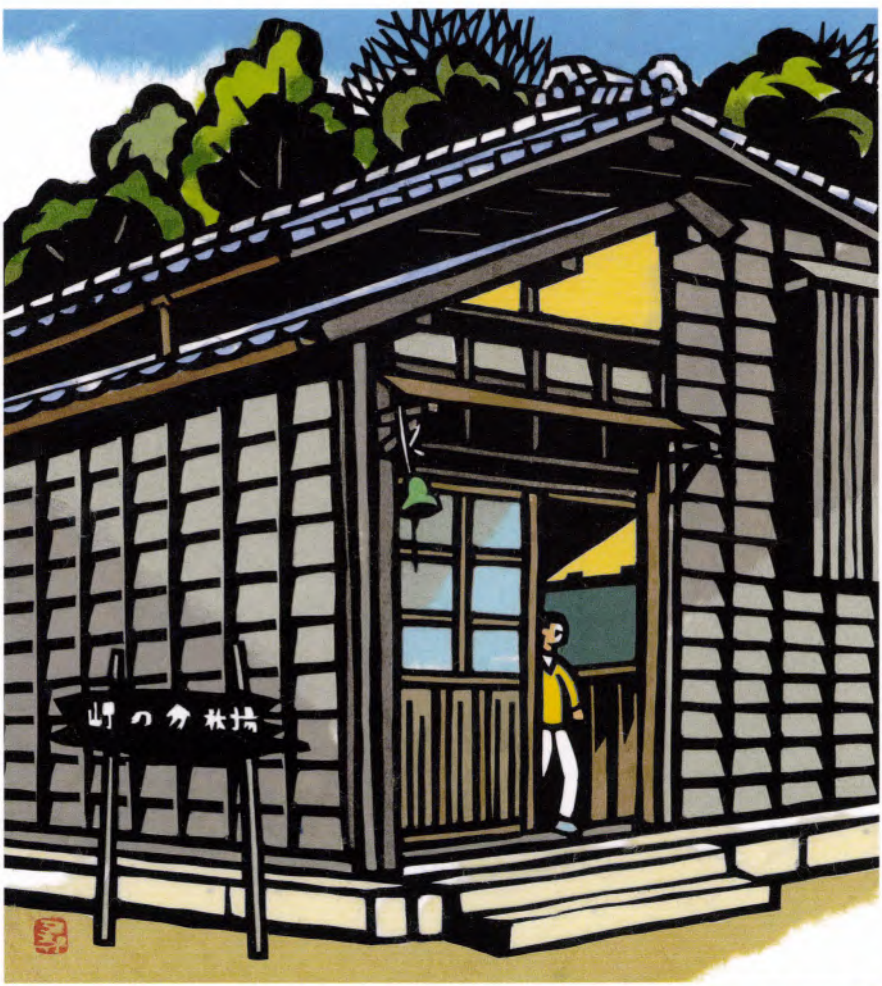
川柳塔

創刊大正十三年　通巻一一〇五号



日川協加盟

特集　平成を振り返る

No.1105

六月号

第二十五回 川柳塔まつり

とき　九月二十八日（土）

ところ　ホテル・アウィーナ大阪

◎詳細は5月号125頁をご覧下さい。恒例によって同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親会を開催します。同人総会以外はどなたでも参加できますので、ふるってご参加ください。

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。巻末の綴じ込み**残暑見舞広告原稿台紙**に原稿を貼付（又は記入）してお申込下さい。よろしくお願い致します。

★個　人　①1/9頁　一口　二〇〇〇円
②1/6頁　一口　三〇〇〇円

★団　体
①1/3頁　六〇〇〇円　③2/3頁　一二〇〇〇円
②1/2頁　九〇〇〇円　④一頁　一八〇〇〇円

▼原稿締切　六月二十日

川柳塔社

【悪天候による本社句会のお報せ】

句会当日午前9時の時点で、大阪市に次の「特別警報」のいずれかが発令されている場合、句会は中止いたします。

大雨特別警報
大雪特別警報
暴風特別警報
暴風雪特別警報

なお、中止の場合、事務局より各自への連絡は致しません。

ご不明の場合は、気象台のホームページやテレビ、ラジオ、電話（177）でご確認ください。また左記の大阪管区気象台にお問い合せください。

大阪管区気象台
06－6949－6304

公開収録

小島蘭幸

川柳の楽しさをアピールするチャンスだとお引き受けしたNHKひるまえ川柳も、早いもので5年目を迎えました。令和元年5月4日、NHK広島放送局一階のシクラメンステージで初めての公開収録が行われました。午前8時に会場に行くと、書道パフォーマンスをされる五日市高校書道部女子生徒の皆さんが入念な準備をされていました。

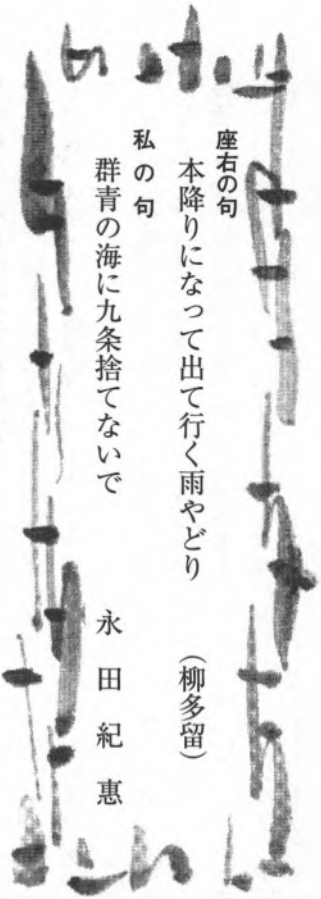
スタッフに案内されてミーティングルームへ、MCの杉浦アナと簡単な打ち合わせをして、ゲストの女子レスリング選手、浜口京子さんと打ち合わせ、その後、ステージで簡単なリハーサルを行いました。

私は収録の時間まで、客席近くで柳友を待つことにしました。島根、山口、広島から出席された多くの皆さまと一時を楽しく過ごすことが出来ました。「バスで片道二時間かけて来ました」「職場の上司と相談して勤務を変更しました」「初めての公開収録楽しみです」等々、嬉しいお言葉をいただくことが出来ました。

午前11時、第1部収録スタート、お題は「花」、ゲストの浜口京子さんは、最近俳句をはじめられたそうで、自作の川柳も一句披露されました。私が選んだ入選句にも間髪を容れず感想を述べられました。客席リポートの坂本アナの明るさも相俟って収録はトントンと進み、いよいよ特選句の発表です。特選句は冒頭で紹介した書道部の生徒さんのパフォーマンスです。一枚の大きな白紙に、まるでダンスをするように大筆で書かれていきます。チームワークも見事でした。

午前11時45分、第2部収録スタート、お題は「父」。ゲストの浜口京子さんの父親は「気合いだ気合いだ」で有名です。入選句は「花」と同じく10句を披講、選評させていただきました。京子さんも、厳しくて優しい父を素直に詠んでおられました。特選句の書道パフォーマンスは、メンバーが交替していました。

見どころいっぱいの、ひるまえ川柳は、5月に二回に分けて、中国地方で放送されます。



座右の句

本降りになって出て行く雨やどり　（柳多留）

私の句

群青の海に九条捨てないで　永田紀恵

川柳塔　六月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「小豆島・岬の分教場」

■巻頭言　公開収録……小島蘭幸…(1)
川柳、平成とともに……水野黒兎…(2)
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…(4)
川柳塔の川柳讃歌⑬……木津川計…(40)
橘高薫風句抄……(41)
自選集……(42)
句集の森……(45)
温故知新……(45)
水煙抄……西出楓楽選…(46)
英語 de Senryu ⑨⓪……吉村侑久代…(65)
誹風柳多留一二篇研究　72……(66)
愛染帖……新家完司選…(68)
檸檬抄「柱」……川端一歩・山岡冨美子共選…(72)

川柳、平成とともに

水野黒兎

故郷を出てから六十年、その約半分が平成時代であったことになる。平成の最初の十年は会社員生活で東京、タイ国そして大阪での勤務であった。僅か一年のタイ駐在の時、国内では地下鉄サリン事件と阪神淡路大地震という平成の大事件が起こった。大地震を身近に経験しなかったが、平成三十年に大阪府北部を震源とする震度6の地震に遭遇した。

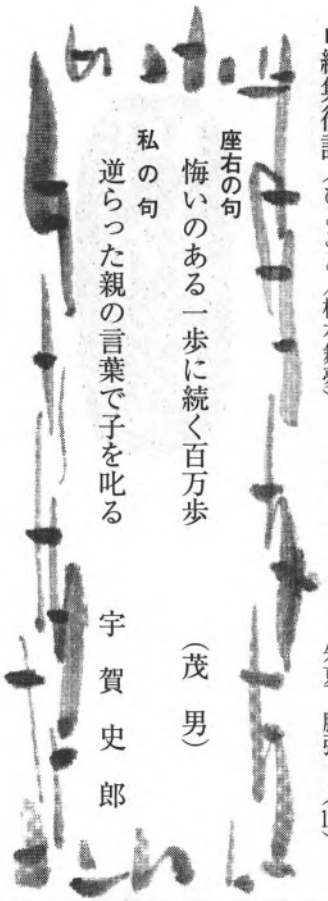
想い出を瓦礫に変えた震度6

会社員生活終了の二年ほど前の平成十年、朝日新聞大阪版の「朝日なにわ柳壇」に投稿を始めたのが川柳との関わりであった。平成十三年に兼題「穴」で

ドーナツの穴は天使の食べた跡

を当時の選者橘高薫風先生に第一席で採って戴き、以来川柳から離れることは不可能になった。その日の新聞の切り抜きを見ると、古今堂蕉子、鴨谷瑠美子、丹

一路集（「大きい」……小沢　淳選……(76)
（「トンネル」……島田千鶴子選……(77)
初歩教室「ペット」……居谷真理子……(78)
川柳塔鑑賞……早川朔行……(80)
水煙抄鑑賞……倉益一瑤……(82)
■追悼文（さようなら升成　好さん）……奥　時雄……(83)
『麻生路郎読本』余滴(52)……乗原道夫……(84)
同人特集　平成を振り返る……(86)
せんりゅう飛行船(102)……新家完司……(94)
川柳塔WEB句会「ラジオ」……なかはられいこ・川上大輪共選……(95)
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世……(96)
五月本社句会……(98)
句会燦燦……板垣孝志……(102)
各地柳壇（佳句地十選／柿花和夫・政岡日枝子）……(103)
六月各地句会案内……(116)
柳界展望……(118)
■編集後記（ひとこと／榎本舞夢）……朱夏・勝弘……(120)



座右の句
悔いのある一歩に続く百万歩　（茂　男）

私の句
逆らった親の言葉で子を叱る　宇賀史郎

後屋肇など川柳塔の先輩たちの名前も載っているが、当時はそんな大先輩などとは知らない全くの初心者であった。

その後、薫風先生の紹介で地元豊中市のほたる川柳同好会の会員にしていただき、やがて塔の同人になり川柳の奥深さを知ることになった。

消費税3％は平成元年、5％は平成九年、8％が平成二十六年にそれぞれ導入され近いうちに10％が予定されている。思えば平成は消費税というパンドラの箱を開けた時代だったと言えよう。欧州諸国などの消費税率に比べればまだ低く今後も上昇するかもしれぬが、有意義な使途であればやむを得ない傾向かもしれない。時代と共に消費税は上がったが私の川柳は未熟なままである。

平成時代には東日本大震災、それに伴う原発事故などもあった。また凶悪な事件や、不幸な自然災害も多かった。

夕日いま弔鐘と聞く平成史

仕事一筋、会社人間であった私が川柳と出合い川柳の魅力を知り、川柳は生活の重要な柱となっている。今後も師の教えを忘れず研鑽を積みたいと思っている。

米子市　吉田陽子

こぶし満開コーヒーカップ買いました
メルアドを開けては閉じるのも春か
黄草若草トランポリンを踏むごとく
病棟の窓へ熱演する桜
紋黄蝶ひらり元号入れ代わる
雑学が占める私の知恵袋

大阪市　平井美智子

歯の抜けた鬼が啜っているお粥
じわじわと紐に還ってゆくリボン
午後五時の靴は淋しい方を向く
ハルカスに登れば君が見えますか
鳩尾の涙がこぼれでる卯月
深呼吸二回　私を立て直す

男鹿市　伊藤のぶよし

葉桜になってキリリと生きる貌
ナマハゲの会話やっぱり秋田弁
はみ出したって群れたって雑魚である

小島蘭幸選

割り勘になれて安堵の此岸です
耳奥はいつも夏です蝉しぐれ
蹟きもいいさ　まだまだ立てるから

倉吉市　牧野芳光

コトコトと春を煮つめているところ
虫食いの肩書だけで生きている
美しいものには裏が見たくなる
絶滅危惧種ベランダの愛煙家
肝心なことは本心出さぬこと
事業承継僕の足元まで迫る

桜井市　安土理恵

銀色のあご髭ちょっと触っていいですか
世間体もうどうだっていいでしょう
風になったと風の便りに聞きました
嬉しくて少しさみしい孫二十歳
白紙のページ迷ったあとが透けている
小さい幸せオムレツふわっと焼けました

寝屋川市　森　茜

弥栄に令和薫れる万葉集
ほがらほがら小鳥囀るはなの下
柱にも杖にも孫の髭面は
青菜の芽そろい恵みの雨となる
郷愁にふるえるスメタナの旋律
ドクダミの白ひっそりと十字切る

和歌山市　古久保　和　子

二十四時間余る日ばかり多くなる
堂堂と年齢詐称して闊歩
ニンゲンを外野席から覗く趣味
専門書の棚に頭痛の種がある
何ごとも纏め上手にする輪ゴム
七分咲き辺りで腹は決めてある

大阪市　谷　口　　義

久し振りに聖徳太子を思い出し
締切日爪を切ったり磨いたり
混じり気のない昭和のおばあさん
知らん間に死んでいたというのが理想
ほどほどとそこそこでＸＹＺ
しゃっくりが出るのも歳のせいですか

寝屋川市　伊　達　郁　夫

娘が嫁ぐ少し乱れていいですか
嘘ひとつ大人の童話幕が開く
折り曲げたページに深い意味がある
小遣で飲める屋台を知っている
満月を教えてくれた水溜り
あなたとなら迷ってみたい森がある

大阪市　近　藤　　正

増税前値上げラッシュの必需品
原発禍コントロールはされてない
アスリート白血病にくじけるな
桜並木駆け抜けてゆくランドセル
新鋭のステルスだから消えました
九条は自衛隊員守ります

河内長野市　山　岡　冨美子

高齢という日溜りをゆるゆると
ぶらんこの揺れに任せる花の午後
知の探査ブラックホールまで伸びる
知の劣化自分が怖くなってくる
ご近所の花の回廊ミモザの黄
気は急くが脚はペースを崩さない

藤井寺市　鴨　谷　瑠美子

さくら散るはるかはるかに亡父います
桜ひらひら散って話題に困らない
春爛漫船も港も古くなる
ときめきを忘れた耳にイヤリング
記念樹が暦のような役もする
結論としてはやさしいのだ無口

米子市　成田雨奇

診察日胸に下着のローテーション
敷居の前でまだ足が上げられる
美容室話題は四方五六軒
恋心さらさらないと言えなくて
横着もん球根ばかり植えている
一日の区切りをつける晩酌だ

河内長野市　村上直樹

新入生のピッコロのごと聴く初音
草笛を吹けば故郷が弥する
ほどほどにできない性質で五合酒
崩れてなるか息吹き返す都構想
論吉から栄一お金貯まるかな
花よ咲け稔れ豊かにいざ令和

四条畷市　吉岡修

勝ち負けの話はタブー子の受験
たいていは妻のプランでつつがない
石一つ投げて波紋を待ってみる
マイコンの不調頼りの孫を呼ぶ
オーケストラバックに演歌うたいたい
ワンコインで楽しむ程度のビール党

奈良市　辻内げんえい

お出かけに花粉情報まずチェック
古稀の妻あきれるほどに翔んでいる
サバ缶の売り切れの訳ニュースから
改元　五輪　万博までも二度見れる
はらはらとさせた息子に部下がいる
みんな留守のびのびしてる孫とボク

大阪市　川端一歩

何もない時間が欲しいふと思う
耳二つ右も左も聞けという
頭より身体を使うことが好き
骨になるいや土だろういうて酒
本棚がいっぱい断捨離は苦手
徒然草読んで傷心慰める

三田市　堀正和

平成はいい元号で戦なし
日の丸を掲げて家を覗かれる
職業欄空白のまま二十年
髭剃りをし乍ら今日の予定立て
孫達が来る日らしいなカツカレー
桜湯へ今日は酔ってもいいらしい

大阪市　内田志津子

恩返し出来ないままに母は逝き
0.1縮める君の玉の汗
約束の通りに新芽どっと出る
良い人になってイライラ溜めている
振り返るやんちゃした日の濃い化粧
君らしくせよの言葉が胃に落ちる

熊本市　杉野羅天

山の草気高く咲いて人遠し
電話一時間　日本は平和です
ジーンズ履いて僕はもうアメリカン
肥後モッコス最後の一つ残したり
成れるなら草原に咲く夕すげに

沖縄県　森山文切

笑顔でいると決めて南の島へ
欠点も愛して向日葵は枯れた
絶対に諦めないという小指
寂しさか鏡の前にあるポエム
疑心暗鬼に高まっていく湿度

北九州市　小松紀子

子の五〇回忌悲しみ秘めて来た
桜吹雪のいさぎよさに憧れる
あれこれと友と語らう気がなごむ
軽いくつ軽いバッグ老い楽し
上げ膳に据え膳旅のありがたさ

唐津市　坂本蜂朗

父や兄の足跡のない道を往く
生きているまた巡り合う珍味美酒
大事業終えた誇りが杖になる
蕗蕨九尺二間の楽隠居
初恋の潮の香残す散歩道

唐津市　山口高明

大国の依怙に楯つく北のドン
百二歳献体証明持ってはる
改元をしても変わらぬ嫦天下
死にたいと他人捲き込む不埒もの
埋めたての補償待つ人居る辺野古

札幌市　小沢淳

節目節目の恩ある人を忘れない
山頂の一滴大河を目指すだけ
一歩また一歩高みへ登る欲
長老と呼ばれ人事に遠くなる
場を読めぬ大臣肩の荷を下ろす

札幌市　三浦強一

久しぶりインクの匂う友の文
昭和一桁万年筆が手に馴染み
米寿まだ晩成へ向く長寿国
友の名が迷子になった脳回路
令和へと人並に夢膨らます

弘前市　稲見則彦

平成より昭和を長く生きた僕
地方選十八歳はどう動く
涙には喜怒哀楽の跡がある
岩木山（おやま）から春の恵みが届く夕
さてここで暑さ対策どうするか

弘前市　今　愁女

卯月朝弘前城へウォーキング
膨らんでくるサクラの花芽の清清し
本丸からはお岩木山と対面す
地方では土地も家屋も余剰なり
健常者は食生活にありと言ふ

弘前市　髙橋洋子

苦労した母の直感よく当たる
母達者一言多い電話口
質素でも清潔感にある品位
平成の時代がめぐる走馬灯
我が身には何も変わらぬ新元号

塩竈市　木田比呂朗

自惚れを断捨離できず梅雨に入る
ガラケーを遅れてますと笑う孫
カード化の波に諭吉も肩すぼめ
代金はカード払いと事も無げ
ポイントが撒き餌のように消費税

さいたま市　星野育子

握手より指切りしたい選挙戦
新紙幣タンス預金解消か
無理するな言いつつも又させる無理
無人の本堂でクルクルとルンバ
ご先祖が育てた杉で花粉症

上尾市　中村伸子

新しい元号聞いている病室
新元号先ずはこの手で書いてみる
世界の天気そうロンドンは雨なのね
新札の顔に会えるか自信なし
退院後公園にまだ桜待つ

朝霞市　前田洋子

友の味の釘煮今年も届けられ
ケキョケキョケキョデビューしたのか鶯よ
焼酎の良さは好みの濃さと量
南国に失恋の歌そぐわない
雨音にまぶたがゆるむ昼下り

千葉市　海老池洋

はんなりと心も春に衣更え
補聴器の力も借りて地獄耳
人生百年後期高齢まだひよこ
人間の年輪だろうしみとしわ
自画像に福耳つけてみたくなる

東京都　川本真理子

ここからが余生早めに線を引く
長い坂上った先で老母が待つ
根拠なく繰り返してる大丈夫
一番の解決策は退路断つ
それぞれの明後日を見て老いに入る

東京都　まえで　とよこ

マンション一室たけのこ茹でる湯気にむせ
春の雲はやばや逝った友のかげ
思い出の箱は満杯その月日
五月まじか目にも耳にも淑き「令和」
首相談話　しーんとききます「和の心」

八王子市　川　名　洋　子

笑ってはいるが心に閂を
一緒だと寂しくないと箸二膳
桜のトンネル心優しくなる
新芽吹き寂しくはない冬木立
おにぎりを頬張り春の風の中

横浜市　菊　地　政　勝

家計簿は合ってお金のない財布
年輪に見えて居ります顔の皺
老眼に断捨離される文庫本
草むしりこんな平和が庭にある
薔薇開花脇見運転要注意

富山市　島　ひかる

会者定離なみだ在ったり無かったり
失意の日街を見下ろす丘に立ち
満天の星と対話がまだ続く
此の世へ一人終りゆくのも只一人
ふる里の野山へわっと出る新芽

可児市　板　山　まみ子

冬空に大きな富士が見え拍手
出世する人もいるだろ入社式
職ひいて地域デビューの通学路
ハヤブサの快挙に拍手してビール
満開の桜に雪でまたビール

犬山市　金　子　美千代

誇らしく令和と同じ誕生日
おじいさんとおばあさんの同期会
焼き餅もやかず夢にも出ぬ亡夫
もういない人のおのろけ許されよ
うらうらと春は油断をしてしまう

犬山市　関　本　かつ子

無に近い利子でも銀行が頼り
ヴィヴァルディもきっと大好きだった春
輝いて生き生き話す過去のこと
目薬が上手く注せないままで古希
入社式社長も同じ菜っ葉服

愛知県　早　川　遡　行

咳の妻に何んにもしてやれず
階段の上り下りにも泣く妻よ
だんだんと小さくなっていく妻よ
眠られぬ夜が続くなり妻の咳
一日を妻に任せたスケジュール

鈴鹿市　小河柳女

がまん返上貫き通すわが思い
十八年の介護思いは通じたか
一粒の真珠となって養母は逝く
介護疲労喘息が顔を出す
病と共に柱時計も止まりました

和歌山市　上田紀子

所詮ひとり咲いた花さえいつか散る
駆け抜けた平成耐えていた昭和
物分かり良くて切れ味鈍くなる
螺子巻いて緩めて家族との絆
何もかも許して肩の荷を下ろす

和歌山市　喜田准一

お互いの知恵が働く話し合い
人の世はその時その場の加減算
夢に出たあの日あの時あの語り
結ばれて別れて次の恋が待つ
爽やかな朝だ昇給知らされて

和歌山市　坂部紀久子

薬玉が割れて始まる町起こし
亡夫と見た桜元気かとゆれている
争いを沈める力持つ桜
一日の隙間テレビが埋めていく
意志に背いた腰をさすって立ち上がる

和歌山市　武本碧

行間にたっぷり夢を詰めておく
心に響く訥訥の語り口
常識の枠を少うし逸れてみる
カルチャーショック受けて只今仮眠中
ごめんねと素直に言えず背で言う

和歌山市　土屋起世子

ぴんぴんと生きる朝食欠かさずに
生きてゆく七つ道具にあるスマホ
家族から免許返納褒められる
やっと腑に落ちて亡母へ感謝状
三世帯丸い家長の聞き上手

和歌山市　福井菜摘

姿見で朝の翼を整える
まだ若いつもりを笑うもの忘れ
笑うから仮面がちょっとずれてくる
気負わずに生きるわたしの道しるべ
頑張れば神も加勢をしてくれる

和歌山市　堀冨美子

互角だとスタート線で言い聞かす
熱燗で夫迎える彼岸入り
甲子園遺影も郷土の意地を視る
見渡せば老いのポジション幸を知る
恙無し今年も春を謳歌する

和歌山市　松原寿子

ゆるい陽が心の闇をあたためる
坂道のアップダウンも慣れたもの
カレンダー赤丸にして飛び回る
雑草も負けずに花と競い合う
存在感問うてどうなる女の譜

岩出市　藤原ほのか

入学は始まり勝負はこれからだ
でがらしも味わい深くいぶしぎん
茶の香り胸にひびいて落ち着ける
エラーでも明日につながる一球だ
買物のついでに夢をかっている

海南市　小谷小雪

一言が錆ついた窓開けさせる
ひとりワイン乾杯の声小さめに
ここからは肩の荷軽くしませんか
なんやかやあって馴染んだ人と居る
つやつやのタケノコを待つ山椒の芽

海南市　堂上泰女

選ばれて心から湧くエネルギー
彼岸より大事にしたい生き仏
大人しいようで抱いているマグマ
紫木蓮咲いて青春甦る
強靱に生きてウイルス遠ざける

紀の川市　楠原富香

ダイヤより輝くボランティアの汗
冷蔵庫主婦の味方と胸を張る
復活を支えてくれた千羽鶴
完璧な顔に立ち入る透きがない
生卵あれば何とかなる食事

紀の川市　山東日出男

縁結び神も時々ミスをする
マシュマロを頬ばり春風に遊ぶ
晩ご飯メインディッシュは目玉焼き
寝過ごしてしまいそうウォーターベッド
改元に十連休のおまけ付き

橋本市　石田隆彦

生活の音を奏でる電子機器
訥々の訛りほっこり地方旅
おとなしく一年過ごすみくじ凶
無農薬付加価値上げる自家野菜
価値のある店はコンビニと百均

京都市　清水英旺

春風に乗って老友の便り来る
縮こまる寒の戻りの花見客
両陛下ねぎらう御所の糸桜
馬鹿にされながらスマホの教え乞う
令和の世に期待すること五指余る

京都市　藤井文代

健康志向ばかりのテレビサプリ漬け
ユーモアひとつポケットに入れ飲み会に
大差で負け知っているのに夫婦喧嘩
言葉よりポーズの返事柔らかい
知らん振り立派な人もするのかな

京都市　桝本宏子

ひらがなで唄ってほしい愛の歌
もっともっと上を目指せる若さある
いたずらも起承転結あるドラマ
家事省き遊ぶ時間に知恵つかう
力仕事介護はロボに近未来

長岡京市　山田葉子

痛いとこ突かれて意地を張っている
お返しの出来ないままでエピローグ
旅に出て折れた心を立て直す
後期には少女に返り宝塚
独り子の肩にずしりと介護の日

八幡市　今井万紗子

ひたすらに夫と歩く遍路道
あなたの顔じっと見たくてメガネ拭く
溜息はよそう幸せ逃げていく
春風が白いページを繰っていく
運は天にのんびりいくか花野まで

大阪市　磯島福貴子

年相応シミシワみんな愛おしい
昭和平成そして令和を生きる幸
豆ごはん筍ごはん春の馳走
五輪まで何とかしたい英会話
同窓会一瞬にして若き日に

大阪市　井丸昌紀

沈む前ひと際熱くなる夕日
歯車がおんなじ向きに回り出し
宴の後靴が片方残ったが
大切にしていた酒を開けた夜
川柳ですかそれとも俳句ですか

大阪市　岩﨑玲子

迎えたくなかった喜寿がおもしろい
老いふたり揃って声が大きなり
杖手すり今となってはパートナー
鉛筆が書く時なぜかやさしくて
老いて尚活き活きできる場所探し

大阪市　宇都満知子

四月号表紙も春が咲いていた
風の旋律心地良く舞う桜
花びら舞っておむすびにくっついた
気温も老いも行きつ戻りつ慣れていく
ぽろぽろり涙腺が子供に帰る

大阪市　江島谷　勝弘

来年も来れますように花の下
アンパンとビールに勝つことができぬ
座るにもよいしょと言うている私
定退後一度も胃痛ありません
あのカップル深刻そうで喋らない

大阪市　榎本　日の出

五七五長寿社会を作り出す
真夜中に怒鳴ったらしい知らんこと
悩まずに諭吉が埋めるすきま風
認知症なのかご飯をよく食べる
分相応楽も苦もあり受け止める

大阪市　榎本　舞夢

元号が変わる新たな夢を追う
ああでもないこうでも無いと日を重ね
でんぐり返し今も出来ます元気です
何気なく言った言葉が仇になり
旅立ちも決まっていたらいいのにな

大阪市　大川　桃花

ふと迷い選んだ道で蝶に会う
妃殿下と同じ時代を生きる幸
ピンクのコート着こなしているおばあさん
アスファルト割って菫にあるガッツ
宣伝より口コミ頼るおばあちゃん

大阪市　大治　重信

頑固似て父とは違う年をとり
次の世は知らぬ事だと蜆汁
思惑とは予定が違う老いがくる
壊れたる我が家を見つめ仮住い
老人を回転とびらが中に入れ

大阪市　奥村　五月

それならと私も言うと妻の愚痴
窓ぎわでやっと分かった社の空気
好きな酒酔うほど飲めぬ歳になり
ありがとう僕を支えた妻が逝く
愛すれば痒い所へ手が届く

大阪市　小野　雅美

さくらさくら父に生き甲斐くれました
踏み締めた花びら私かも知れぬ
努力した成果奇跡と呼ばないで
幸運を引き寄せる人出来ぬ人
割り算のいつも余りになる私

大阪市　笠嶋　恵美

針を持つ元気もないよ大変だ
参道で瑞気感じた帰り道
聞くことの功徳を知ったうれしい日
黄蝶が窓をたたいて遊びましょ
イチローの「自分のはかり」しかと聴く

大阪市　金川宣子

10連休孫が来るのでストレッチ
諍いもごめんひとつで矛おさめ
どうしてもチョキが出来ない足の指
すらすらと持って回った嘘をつく
滑り止めもひとつ受けてサクラ咲く

大阪市　熊代菜月

仲良しが皆んな私を置いて逝く
わがままを言える貴方はもう居ない
デーに来てあんた誰かとまた聞かれ
エンピツを十本けずり五七五
通りぬけ今年も行けた嬉しさよ

大阪市　古今堂蕉子

わくわくが二乗三乗されて春
反対も同意も出来ぬ話来る
自分の非認めぬ薔薇のような人
四月五日さくら満開子の誕生日
批評する目は一流の立見席

大阪市　坂裕之

失敗の元は自分の中に居た
見なければよかった彼の作り顔
足元に転がっていた道しるべ
何処にでも監視カメラのある平和
ひと言で悩み吹っ飛ぶ友が居る

大阪市　髙杉力

昨日今日明日もどこかで呑んでいる
吠えているうちは元気とあしらわれ
同病が何人かいた同窓会
全消去二度とは逢わぬ人だから
破かれたページ青春日記帳

大阪市　髙杉千歩

会う人に元気貰うと握手され
読めない字迷句生まれる九十三
バイキング見て廻り満腹九十三
歳の順ならとうにあの世で逢うている
運のよい人悪い人戦争平和新世紀

大阪市　田中廣子

両陛下ダイヤモンド婚お目出度い
五輪相更迭劇は情けない
幼子の芝居上手に皆和む
勇気湧く平成最後の甲子園
世の乱れ一つ世直し頼みます

大阪市　田中ゆみ子

自分だけは自分の味方花の種
掃除洗濯毎日同じことをする
桜散るみんな忘れる諦める
私がひとり残った花いちもんめ
未だ解けぬ謎あり夫婦しています

大阪市　津村志華子

天寿とやゆらりゆらりと生きて行こ
御即位を寿ぐ青い青い空
雑談を延々友よ陽が沈む
目ぐすりを三種差しても春がすみ
三食をレンジの世話になるくらし

大阪市　寺井弘子

シミシワも味方に入れて春帽子
押入れに昭和平成束ね置く
ワンテンポ遅れて踊りつづけてる
病む友と歩幅合わせる一歩二歩
花冷えの雨にしっとり濡れた文

大阪市　寺本実

延命は無用と言ってから長い
払う気がないのに財布ださんとき
はじめから切り取り線がついていた
災害の後で論じる予防策
結論は既に印刷済みですが

大阪市　中井萌

揉め事は嫌い御飯が不味くなる
不真面目は困る真面目はつまらない
浄土では母と姑が孫談議
見返りは求めぬ孫にかける金
穏やかだ年を取るのも悪くない

大阪市　原田すみ子

踏まれてもたんぽぽの黄は増すようだ
独り身の兄の合鍵重過ぎる
病院で測る血圧高くなる
健康法水と歩きは揺るがない
改元も首相は顔を出してくる

大阪市　平賀国和

万葉のこころを運ぶ令和かな
令和のこころ届けて欲しい沖縄へ
熱狂の影で値上げの春となる
故郷の山よ少年老いました
願わくば逝くまで僕も活火山

大阪市　藤田武人

人間がにんげんらしくなる布団
写真からふと蘇る友の声
杖ついて杖が指図をする巨匠
ルンルンを寒の戻りが凹ませる
涙腺の緩さが武器になる乙女

大阪市　山本加お里

ありがたい今日も元気で桜見る
元気かと確認し合う友がいる
我が顔を鏡にうつしあんた誰
父母の恩返せず今日も墓まいり
急にきた芝居じゃないよ歩けない

川柳が素敵な仲間連れて来る
好奇心まだまだあってジム通い
オーイお茶呼ぶ人もなく日が暮れる
アニメから熱い友情教えられ
アホやなあ言って笑えるいい仲間

大阪市　若本安代

十連休していいのか日本
意義薄い祝日ばかり増えてくる
だらけてるうちに年号変わりおり
連休が済んだらひそと小旅行
祝日は盆と正月だけで良い

堺市　奥時雄

平成が奏でた平和未完成
株分けた隣家の花がよく育つ
何気なく覗いた檻に僕が居た
泳ぐのは苦手ゆっくり流れます
言い勝ってなおストレスが増えました

堺市　柿花和夫

五月一日令和元年米を研ぐ
万葉はタイムカプセル夢日記
朝顔を植えて令和を楽しもう
世界一令和日本が住みやすい
ベランダに出す鉢部屋に入れる鉢

堺市　加島由一

満開の桜を映す水鏡
行楽気分桜並木のバス通り
赤い夕陽にすてきな笑顔両陛下
期日前でも思い立ったら出掛けます
八十路行く昭和平成令和へと

堺市　源田八千代

咲き誇る桜に元気貰ってる
そのうちに昭和が忘れられる筈
どっこいしょあと何年と指を繰り
どんな子に孫の成長夢見てる
時代劇滅って父さん早寝する

堺市　齋藤さくら

嵩上げのまちはできたが人疎ら
仮設より復興住宅の孤独
汚染区域に取り残されているお墓
子ら巣立ち淋しくなったニュータウン
売り家の幟が目立つニュータウン

堺市　坂上淳司

ウグイスとお話できるランドセル
弊衣破帽でもまごころを持つ野性
パーツごとに見れば格好よい私
無呼吸にはっと目覚める午前二時
春眠のままであの世と思う老い

堺市　澤井敏治

堺市　遠山唯教

令和には勇気を出して立ち向かう
欠点をさらすと恐いものはない
余生なお楽しいことをやり直す
重い荷が笑顔ひとつで軽くなり
春雷に身を震わしている桜

堺市　内藤憲彦

お土産のゆるキャラ達がいま家族
反面教師今の政治家見て育つ
娘から妻そっくりに叱られる
寡黙だが負けず嫌いは父ゆずり
大波小波やっと歩幅が合う夫婦

堺市　矢倉五月

スマホデビューしたと盛んに来るライン
生きてればいろいろあるねで閉める女子会
ライン読む打つ読む打つで小半日
お遍路に出たいらしいなうちのミケ
無職とは書きたくはない主婦の意地

貝塚市　石田ひろ子

プランターの花路地裏のおもてなし
春うらまず黙祷のクラス会
ストレスをなんば花月へ置いて来る
押し切った手前頑張るしか無いか
今日生きる命やさしく労って

河内長野市　大島ともこ

メタボの夫へ子供茶碗のプレゼント
関節のサインぽちぽち梅雨入りか
女子会を大盛り上げの夫のグチ
子育てに苦労した子が杖となる
音痴だから口笛上手く吹けません

河内長野市　梶原弘光

ヤンママはゲームに夢中生返事
ストライクゾーン広げる夜目遠目
売家のチラシ我が家の値打ち知る
上げ膳据え膳は無理な深海魚
カラオケ祭りまめに婆さんエスコート

河内長野市　木見谷孝代

大往生とそう簡単に言わないで
十三年絵手紙届け喜ばれ
励ましたつもりが力もらってた
一生を言い訳せずに終わりたい
一切を捨てて旅立つ時が来る

河内長野市　黒岩靖博

スーパーに菜の花並び春が来る
将来は看護師さんと虹の夢
孫巣立つ後十年は生きてやる
留学生学びに来たがバイト漬け
目立たぬようにビルの谷間で生きる幸

河内長野市　辻村ヒロ

ナツメロで少女気分を温める
あのねのね孫の内緒はあのねのね
残り火を持ち続けてるまだ傘寿
ジャジャジャーン後期高齢扉開く
鈍いぞと撲ってみる好奇心

河内長野市　藤塚克三

エゴに走ると心のレンズすぐ曇る
頑固な俺に柔軟体操妻勧め
自立する覚悟を決めてからの空
図星つく妻の追求咳ばらい
老犬も俺のテンポで散歩する

河内長野市　森田旅人

雲の峰眺め安らぐ包まれる
まさかまさか私が嫉妬するなんて
割り切れぬ余り　たまっていくマグマ
お行儀のいい顔をして嘘と知れ
大阪弁適当なこと言うによし

河内長野市　山室光弘

ルーキーがグランド駆けるさわやかさ
平成を閉じて安堵の両陛下
もみじの手頑固親爺をとろけさす
天変地異変わらず咲かす春の枝
新元号決まり心もギアチェンジ

岸和田市　岩佐ダン吉

本当に自由に詠んでおりますか
鏡には肩凝る男ひとりいる
面白い僕に味方をすると言う
今にみろ僕の出番がきっとくる
振り返るかすかに道になっている

岸和田市　宮野みつ江

目出たいよ令和初日が誕生日
恋猫の声荒々しくも悩ましく
余所目には変な人だと見えている
猫好きと宣伝してる猫の柄
喜寿の春ちょっと恋してみようかな

岸和田市　雪本珠子

弱音などうっかり吐けぬ位置にいる
ちょっとした心遣いが欲しいだけ
すぐ傍にあった幸せ今気付く
紆余曲折あった人生花開く
雲までが幸せそうに見えてくる

吹田市　木下敏子

ゆっくりと歩いています春の道
花の下ふたりの頃を想い出す
調子良く今朝も歩けた歩数計
ストレッチまだまだ生きる足鍛え
年号が令和に決まり筆を持つ

吹田市　野下之男

早いねえ四選のもううわさ
アメリカが分裂するてほんとかな
薬用酒そばに待たせて句作りだ
鯨さん前見て泳ぐくせつけて
古切手美しいのとにらめっこ

高槻市　指宿千枝子

浅草の雷門をくぐる旅
外国の人も参拝浅草寺
川柳の句碑に出会えた龍宝寺
遠く来て時の流れるままに居る
寒かった心に四月燦燦と

高槻市　片山かずお

花の春ときどき冬が紛れ込む
コツコツと春のヒールはよく弾む
お眠りと電車が揺れる昼下がり
ひょいと置くから思い出せない置いた場所
仲直り意地と面子が邪魔をする

高槻市　島田千鶴子

いかなごが届くと我が家春となる
春の菜は少し苦味があっていい
反抗期耳はそっぽを向いている
廃駅に残るポストに花の雨
万葉集じっくり読んでみましょうか

高槻市　初代正彦

新札になるならご免キャッシュレス
ルンルンの軽い約束してしまう
息抜きへ偶にゆらりと有馬の湯
また消えた回覧板の名がふたり
噂してたお方の急逝息を呑む

高槻市　杉本義昭

新元号理想は高く果てしなく
座禅終え五欲がどっと溢れ出る
道草をした人生で友が増え
満開の桜に酔っている平和
ピンチにも弱いがチャンスにも弱い

高槻市　富田美義

歳取れば愚痴る力も日々に萎え
抜擢を微力ながらと言う自慢
女には直ぐフニャフニャの力瘤
鬼の手は意外と柔く温かい
杉花粉に生きる力を鍛えられ

高槻市　富田保子

貴方とは持ちつ持たれつ愛し合う
気配りの歌手の握手は持ち帰る
踏み破る音を楽しむ霜柱
茶柱が立っただけでも喜べる
掃除しにいつか私も入る墓

膝頭よく覚えてる過去のミス
乱れ脈老いに優しいコードレス
百歳の眩しい笑顔見て習う
日向ぼこ過去も未来も後回し
あんたの方がお年寄りだと譲られる

高槻市　原　洋志

ますますの頑固元気の証拠かも
おしゃれには定年制がありません
台風禍のブルーシートも朽ち出して
残業はしない主義です悪しからず
野良猫に餌をやったらファミリーに

高槻市　松岡篤

恩師逝く皆な集まりクラス会
スマホ無くても何も不自由感じない
段差無いのにあわてふためきぐにゃとなる
ひたすらに慕った彼も好好爺
全没で心がぐにゃとなる句会

高槻市　安田忠子

我が町は春爛漫となり桜塚
花冷えに母が残したチャンチャンコ
ふる里を持ってる人の大らかさ
お散歩に誘ってくれるスニーカー
黒々と祖母のぼたもち甘かった

豊中市　池田純子

僕の耳イヤな話はカットする
店構えみすぼらしいが星三つ
増税に食卓の皿一つ減る
妻無言じわじわ僕を追い詰める
初恋の思い出僕の宝物

豊中市　上出修

崩し字に透ける気丈なお人柄
明かるい国へ新元号と新紙幣
広告が多い街ほど出る活気
吐く息まで同じリズムの二重奏
大丈夫と見える男が夢の夢

豊中市　藤井則彦

生きているだけで感謝の寒椿
平成の最後にお会い出来た幸
又来年もお会い出来ますよう桜
心地好い惰眠たのしむ春の午後
秋に植えたチューリップ咲くありがとう

豊中市　松尾美智代

野に山に歌の湧き出る暖かさ
色褪せた写真に褪せぬ里ごころ
ビル街も耳をすませば鳥の声
料理とは肉じゃがのこと妻の留守
可愛いさがペアーで揺れるサクランボ

豊中市　水野黒兎

富田林市　片岡智恵子

平成の終り桜と雪のコラボ
生きてひとり天の滴を我がものに
末席の口火流れは変わらない
卒業ソング世代を映し出す鏡
いくさの日々を生き静かに令和迎え

富田林市　関よしみ

一本は孤独貫く花手毬
逢うて来た余韻にひたる桜の香
温温の和音を響く里の春
夜桜に妖しい夢を見てた媼
躓いて拾った棒が指示をする

富田林市　中村恵

この山を古い翼で飛び越える
じゃんけんで涙見せたら勝ちました
息継ぎのコツは誰にも教えない
悪知恵に三人寄って敵わない
世渡りが下手な女の網渡り

富田林市　山野寿之

メルヘンの世界へ誘う昼の酒
再検査無罪放免美味い酒
建て替えて昭和の町が消えていく
平坦な道を選んで蹴躓く
愚痴るのは君聞き役はいつも僕

寝屋川市　籠島恵子

これも夢さくら横目に言いきかす
暑さ寒さいたわり合っている同志
あぁこの人も自分のために酒を選る
椿いろいろ咲く順番を心得る
いただいたブローチバッグにも出番

寝屋川市　冨山ルイ子

携帯は私の部屋であくびする
ポケットで携帯鳴るがわからない
スマホにかえる覚えられるかナ
まなうらに桜しっかり焼き付ける
生きていて今年も桜眺められ

寝屋川市　平松かすみ

無収入知ってアポ電など来ない
みんな留守うっかり二度寝してしまい
記念樹の桜も僕もよく育ち
思い出の桜咲きます脳回路
楽しみは令和何年まで寿命

羽曳野市　安芸田泰子

咲き初めた桜戸惑う春の雪
平成が桜吹雪に送られる
催促をされると耳が遠くなる
底のない器に溜めている我欲
行き届き過ぎたサービス気が疲れ

羽曳野市　宇都宮　ちづる

最終章それなりに満ち日々生きる
姑の遠慮があって恙無し
出雲からお守り要るか娘がメール
三百段山門前で気合い入れ
ハルカスもスカイツリーも苦手です

羽曳野市　徳山　みつこ

七色の羽根つけ帰り来た噂
病床の友の便りは今日の幸
血管に悪玉繁茂知らなんだ
鬱抜けてパッと若葉が眩しすぎ
暴言多発がやっと火消壺へ

羽曳野市　中川　ひろ介

五線符の春の女神が弾き語り
風雪に耐えた桜が凛と咲く
朝掘りの竹の子御飯なつかしい
母を脱ぎ妻を脱ぎ捨て花衣
雑草に負けずハーブが増えている

羽曳野市　藤原　大子

適量に慣れて秤に縁がない
春の風散歩の時間長くする
私はわたし何度も胸に言い聞かす
正直で喜怒哀楽がすぐ声に
チコちゃんへ傘寿もボーッと駄目ですか

羽曳野市　三好　専平

万博もオリンピックもテレビ席
万病のままのびやかに卒寿くる
依存症になるほどもらう薬漬け
カジノより保育所ほしいお母さん
受け入れてみたが言葉が通じない

羽曳野市　吉村　久仁雄

もがき続けてふと人生が軽くなる
死ぬ覚悟半分できてしかと生き
どん底に落ちて初めて信を得る
歳とってますます人が好きになる
ますます意固地性善説は譲らない

東大阪市　北村　賢子

菜の花の黄ピンクの桜青い空
ベランダに毎日私待つ金魚
涙ぐみ見る娘と昔見た桜
一人きりの食卓とっときの食器
終活はまだ出来ませんおしゃれする

東大阪市　佐々木　満作

大盛況令和のグッズデビューする
百均で50品目買うセレブ
生きる知恵母のレシピを嫁が継ぐ
ぐにゃぐにゃの線画は孫のデビュー作
さくら咲く胸キュンとなるランドセル

枚方市　丹後屋　肇

集中心我が懐は隙だらけ
桜鯛釣竿のまま見せつける
慎太郎刈り我がこなまいきな頃のこと
妻の回忌重ねて涙腺脆くなる
取っ組み合いの喧嘩もあった四畳半

枚方市　二宮山久

ライバルの闘志に勇気もらう今
感動を今も忘れず五七五
ペアルック嬉し恥ずかし老夫婦
生きて行く知恵拾っている雑学書
気まぐれを武器に人生軽く生き

枚方市　二宮紫鳳

白椿父を偲んで凛と咲く
スマホ手に合格告げる孫見上げ
合格の孫の笑顔に春の膳
春風に動き始めた万歩計
老い二人ナビも手探りへそ曲がり

枚方市　藤村亜成

今日を脱ぎ明日に着替える日誌書く
裁判に敗け真実が嘘になる
便り出すといつも電話でくる返事
じたばたとやっと丸虫起きて這う
あの世から何をしてるか観られてる

枚方市　山口弘委智

指折りて句に惜春の風情足す
饒舌もついには黙る花見事
新元号不戦の誓いバトン受け
日本の四季の彩り更衣
失敗を重ねて人は甘さ増す

藤井寺市　太田扶美代

一緒に見る夕陽一際美しい
一滴の毒をもらって立ち直る
相槌を打ってくれない人と居る
ドキドキを切り取っておく貼っておく
自惚れと自信こんがらがってきた

藤井寺市　鈴木いさお

花の下私も春の風になる
よく流行る銭湯だ老人ばかりだが
損ばかりしていい人と呼ばれてる
名も知らぬ草に我慢を教えられ
本物より本物らしい贋物

藤井寺市　髙田美代子

ホップステップジャンプ漸く春に
人名地名やっぱりルビは必要に
血圧計と体重計に叱られた
不便さを知らないままの街育ち
夕暮れて蝙蝠が翔ぶ中之島

藤井寺市　吉田喜代子

古木にもああと目覚めた小さき芽
桜咲く歩ける距離なら集う友
日に四度お食事よりも多い薬
傷癒えても空白続く日記帳
逝くも良しこちらで座禅これもよし

松原市　森松まつお

天職かと思う男の仕事ぶり
新元号老眼鏡を買い替える
コロッケの旨い飲み屋へ月二回
出口調査一度ぐらいは出会いたい
体調が悪い影まで凹んでる

箕面市　大浦初音

マドンナも美人も末はおばあちゃん
句作りも遊びごころをプラスして
〆切に追われて起きる朝の夢
素っピンはマスクに帽子サングラス
口惜しさを力に変えて前を向く

箕面市　酒井紀華

菜の花に抱かれて思う黄泉の国
ウィンドーのめがね美人に嫉妬する
青いバラ咲かせるはずの定年後
夕映えにゆっくり沈む寺の鐘
泳ぎ方変えれば人間楽になる

箕面市　出口セツ子

健康が大事と仕事やめさせる
経済の一助に浪費する夫
終活が近づいて来る誕生日
子の電話プレゼント来る誕生日
すばらしいことだ元気で生きている

箕面市　中山春代

わくわくと明日のかばんを整える
髪の毛に止まるはなびら樹木葬
はなびらの足湯にどうぞ無人駅
風光るはだしになってお弁当
飴ちゃんのおこぼれが来る木のベンチ

箕面市　広島巴子

土筆とり出掛けて見れば早スギナ
大阪城プレ万博の花見客
浮かれ気分冷やせと雨が本降りに
花冷えに惑わされつつ衣替え
もどりたいセーラー服の青い春

八尾市　内海幸生

初対面先ず補聴器の話から
テープでは届かぬ妻の忌の読経
花筏亡妻が乗っていませんか
辛かっただろうに桜健気だよ
我儘な人ら地球も怒るわさ

八尾市　宮崎シマ子

席譲られた小さな恩を反芻し
みちのくの残り火起す春の雪
あっけらかんの嫁は可愛い片えくぼ
築五十年よう持ちました兎小屋
二流なら余裕を持って走れます

八尾市　村上ミツ子

あの時と違うきもちの桜咲く
なんでやろ好きも嫌いも女偏
適当がいいと肯定する手ぬき
今暫し名残を惜しむ平成と
どう生きる令和の時代老いの道

八尾市　山根妙子

長い列耳まで柔いパン屋さん
新しい犬友と逢う春の道
書教室まずは令和の書きくらべ
入選句足取り軽く通り抜け
紅手毬令和へ繋ぐ花となり

大阪府　米澤俶子

令和の世にもリセットしたい平和
燃え尽きて私のいろで散るつもり
好奇心あってもついて来ぬ体
平成を包むやがてを待つ袱紗
百歳の壁破るなど絵空事

神戸市　上田和宏

妻が敬語使う魂胆なんだろう
夫婦です使いこなしてこなされて
ただ今お帰り家族安らぐ合言葉
ほどほどの貧乏性で恙無い
振り出しに戻ればいいと虹が出る

神戸市　奥澤洋次郎

昭和へは巻き戻さないでね令和
この世に足跡ひとつ残したい
勝ち負けの人生ゲーム下りる古稀
心配せいでも死ぬ時くれば死ぬ
花満開幽遠な青い空

神戸市　冨永恭子

おひさまの力はすごいなあ花よ
青菜色になりはしないか私の血
わきまえて居らねばならぬ段の上
間違いを諭してくれるぬくい声
手料理を褒めて外食させぬ夫

神戸市　能勢利子

一人暮しギブアップして老母が来る
丈夫な歯が長寿の秘訣だと言われ
時時は寝るのも食べるのも忘れ
杖よりも手をつなぐのが好きみたい
満百でオリンピックは見られそう

神戸市　細川花門

一本の縄で半日汽車ぽっぽ
放り上げる下駄に明日の天気聞く
おはじきの弾ける音はクリスタル
赤のまんま祝いの膳のおままごと
井戸水のバケツに真桑瓜三つ

神戸市　山口光久

思い切り笑える今に感謝する
柱にはなれぬが努力してみよう
トンネルを抜けると不安消えていた
尺取虫許せないのが大雑把
原点を忘れはしゃいでいる愚か

神戸市　山口美穂

知らぬ間に虎を応援してました
愚図なわたしに喝をくださいお亡父さん
お地蔵さまも眠たそうです花曇り
雛さまとお喋り名残り惜しみつつ
葱坊主あなたの頑張り知ってます

神戸市　山﨑武彦

人生を語る主治医だ信じよう
ひたむきに自分を探す鈴の音
とき時は湯通ししたい奴と居る
早いなあもう阪神にすき間風
万歳が紙一枚で舞い戻る

明石市　糀谷和郎

返り見ればよくも歩いた九十九折り
今日の愚痴しかと受けてるコップ酒
新聞の正味期限はただひと日
いつだって和む話に寄る笑顔
茶柱が立ってやる気を加勢する

尼崎市　加川靖鬼

ニョキニョキと地球に生えたノッポビル
遊覧船から愛でる桜の通り抜け
紅手毬平成飾る通り抜け
バンクシーかも知れぬ見事な壁のシミ
対象外配るティッシュをとばされる

尼崎市　永田紀恵

卒婚と言葉を変えた別れ方
波風は立てぬ窓際族の席
婿入りと育メンめざす生き上手
寒い日は便座のお湯にホッとする
単独では役割りのない薬指

尼崎市　藤井宏造

人のからだに邪魔なもの何もない
一人でも二人でもいいセミダブル
誕生日孫から電話あっただけ
幸せのはずの自由にある孤独
菜の花の海　天国にちがいない

十年を言葉忘れるほど独り
小さくとも雨風当たる墓がよい
独り住む弱者はいたり笑ったり
春休み孫が泊まると言うてくれ
遠い日をじっと見つめている夕陽

尼崎市　山田耕治

朝刊で録画予約をする日課
断りはメールですると決めている
定年後妻さえよいしょしてくれず
生きている証しにくぎ煮配る祖母
大袈裟に国旗に礼をする議員

川西市　大坪一徳

即位の日ゴールデンウィーク輝けり
春眠を破って今朝はゴミ当番
ホーホケキョ見事に鳴けて入学す
三通も延命拒否と書きました
病院の帰ってきての疲れかな

川西市　山口不動

生まれは昭和平成令和かっこよく
エージング薬より効く日日努力
子や孫から話題と品が切れ目なし
足腰の鍛えを兼ねてフラダンス
男性の素顔に勝てぬおんな達

三田市　足立つな子

五歳にも二歳にもあるその矜持
花束と思い出ばなし母の日に
寄り添えば少しわかってきましたね
淋しさを素直に言える歳となり
サプリなら助けてくれるはずですが

三田市　上田ひとみ

令和の文字に非核非戦を捧げん
三寒四温平成の桜に雪
平成を名残り惜しんで見る桜
陽炎の夫とふたりさくらの園
就活の背広もなじむ孫の夢

三田市　尾崎一子

初孫が増やして呉れた笑い皺
クラス会記憶の糸を手繰り寄せ
望郷の一途な思い仮設から
プライドが現在位置をつい忘れ
まつりごと腹が立つので呆けられぬ

三田市　北野哲男

冬将軍咲いたサクラに悪さする
独りならゴタゴタも無く平和です
表札に名前は有るがいま仏
プレミアが付くまで諭吉溜めておく
ブラックホール地獄の底に見えてくる

三田市　多田雅尚

過疎の村人が恋しい無人駅
ため息をこっそりついている介護
ほどほどをつい越えさせるバイキング
仏滅になった私の誕生日
くしゃみしてボタン飛ばしている肥満

三田市　谷口修平

逃げ込んだ殻で唱える平和論
パンパンと手拍子が鳴る余命表
我慢限界叫びたがっている命
恋は詩人寄り道ばかり多くなる
鈍行に乗りかえてみるフルムーン

三田市　野口真桜子

遠い耳思わぬ方に飛ぶ話
プライドが高いと人が近寄らぬ
脱税を企むほどの金欲しい
叱られて反論できぬ訳がある
無免許のままで娘を嫁がせる

三田市　福田好文

湯豆腐が浮いて僕にもやっと春
気の所為か一年生が少ないね
真っ直ぐに前を向かないランドセル
友見舞う手には柳誌と親爺ギャグ
勝負事写真判定いつも負け

三田市　村田博

迷惑をかけぬ暮しの食養生
猫舌も喜ぶぬくいおみそ汁
仲良しの弾む笑顔に気が晴れる
手を引かれ墓参済ませた安堵感
常備薬目薬添えて旅カバン

高砂市　松尾柳右子

認知症効いた気がせぬ予防薬
旅バンフもう海外は写真だけ
揚げ足や失言攻めの野党ぼけ
昭和ホップ平成ステップ次ジャンプ
二度と来ぬ今日を無策に取り逃がし

宝塚市　丸山孔一

見栄ひとつ捨てて笑顔の両隣
今が旬年重ねても今が旬
幸せな音する今日の煮込み鍋
他人には夫婦の溝を見せず老い
雑学のなかで人間臭くなる

丹波篠山市　北澤稠民

上品をよそおい今日はしゃべらない
青春にこの財あればいま富豪
胃袋やＤＮＡが指図する
このお札いささかの血を吸っている
酒飲んで今日は正義の志士やった

丹波篠山市　酒井健二

西宮市　秋元てる

日向ぼこ笑顔の仲間また一人
新元号大臣も子も読める字に
字下手だが天才者にも多く居る
ＣＭが派手だと買わぬ臍曲り
つらいのを他人に見せなかったのは昔

西宮市　亀岡哲子

長電話ポツリ途絶えて春巡る
寂しくて自慢話の長電話
二時間を超えて元気な喋りぶり
一日中喋ってみたい長電話
ひょっこりと掛かる電話を待つさくら

西宮市　西口いわゑ

幾年の人間ドラマ見たさくら
菜の花にもらういとしさ懐かしさ
ガラスの靴拾わなかった幸もある
ぶらり宇宙へなどありそうな未来
振り向けばドタバタ劇や泣き笑い

西宮市　福島弘子

ひこばえの生命力に励まされ
早々にあやかりセール新元号
朝一番茶柱うれし旅の朝
ぶかぶかの制服うれし一年生
名も知らぬ鳥のさえずりいい目覚め

西宮市　福田正彦

平和へのタスキ令和がしかと受く
令和には世界平和の使命感
君の顔苦労したこと無いみたい
失言と気づいていない辞任劇
老木に一際目立つ花が咲く

西脇市　七反田順子

雑学に女三人ふつふつと
人模様グランドゴルフから学ぶ
明石城風貌ここに四百年
魚好き模型にできる食べっぷり
ありがとう言える日ごとの暮しぶり

西あわじ市　萩原狸月

元号を商品にする抜け目なさ
よく釣れる新元号をつけた鉤
喪に服すことなく令和迎えられ
将来の横綱候補まだ見えぬ
酒楽しはしごするほど強くなく

奈良市　阿部紀子

生前の退位決断素晴らしい
新天皇即位命名令和なり
西暦を適宜使って書いている
オリンピック同窓会をする予定
祖母の遺品五十年前の株券

久し振り父に同乗返納を
子を煽てひたすら誉める入試前
悪口と愚痴聞き育つ子の未来
日本一夢道半ば家族葬
去る者は追わずわが身を顧みる

奈良市　宇賀史郎

泣かれたくなくてお悔みにもいけず
嘘つきは上に立ってはいけません
マヨネーズ最後は切腹の憂き目
まあまあと言ってもらえば上出来だ
這えば立て今老人の合言葉

奈良市　大久保眞澄

サバ缶の人気につられ一つ買い
偽装統計民の財布は知らぬふり
爪のびて心の憂さを解いていく
孫初舞台気づけば拳にぎりしめ
連れてきた小犬が母に戯れる

奈良市　高橋敬子

崩壊の街何クソの草芽吹く
もうここらで気楽になれと言う辞令
送迎会部下ダシにしてまだ続く
郷愁は缶入りピースあの香り
車間距離保って姑のいる安堵

奈良市　米田恭昌

真っ新な笑みに拍手が鳴りやまず
気風いいお捻りに沸く大向う
かすみ草温い気遣い醸し出す
ちょっぴりの駄洒落含ませ座が和む
へりくだりながら本分確かめる

生駒市　飛永ふりこ

日本人で本当よかったわ桜
夜桜へ亡母の気配があたたかい
認知症の予防は出来るだけしたい
八十の笑い袋はまだ元気
思い出が断捨離させてくれないの

香芝市　大内朝子

古希の旅皆が青春持ち寄って
あなたには見られたくない顔一つ
使命終え宇宙に還る父送る
マンガでも万葉集を読んでみる
山積みの書類枕に明日の夢

香芝市　山下純子

イヌフグリ踏まねば逢いに行けません
ミモザ丈高く女が独り住む
タンポポのポポポポポポの笑い声
里山の榊も花をつけている
八重桜春の重さに耐えて咲く

橿原市　居谷真理子

奈良県　安福和夫

自動翻訳頼りすぎるとトラブルも
外国人案内ときに筆談も
手真似でも誠意込めればおもてなし
スマホ持つ観光客と対話なし
生き字引さえ寄せ付けぬスマホ族

奈良県　谷川憲

公正な人事にひそむ好き嫌い
孤高に生きご立派ですがただ頑固
イチローの野球修行は続いてる
決めること妻に譲って平和なり
瀬戸の海豊かになれと稚魚を撒く

奈良県　中堀優

窓ガラスへ張り付き妻の帰り待つ
古希を越え第二回目の幕上がる
逝ったわが父のダミ声鼓膜打つ
責めるのは人ではないぞ自分だぞ
母さんと叫べど波の音ばかり

奈良県　長谷川崇明

八合目うれしい水と木の根っこ
訃報来るたびにスリムになる名簿
餓死病死虐め日本のこどもの日
矍鑠の傘寿支えるボランティア
おやすみと今日一日に○を書く

奈良県　渡辺富子

温度差のある夫婦にも花吹雪
花吹雪愛の記憶を埋めていく
半額のシールおばちゃんよく釣れる
売り家のビラがかたかた風に哭く
令和の世どう生きようか思案する

岩国市　上村夢香

上野の森飛び交っている外国語
五年ぶり若冲に会う美術館
東京駅外せないのはみつをの詩
被災者の明るい声にほっとする
万葉集探し求めて東京へ

宇部市　平田実男

財産に勝る家族や友が居る
札束が絆太くも細くもし
仮面では隠しきれない腹黒さ
嫌われることを覚悟でまた苦言
賞味期限切れる頃から僕の味

下松市　有海静枝

差別だと言えず噛んでるミントガム
寂しがりスマホの窓をまた覗く
聞き捨ててしまえよそのカチンコチン
介護士のはしゃいだ声がする花見
胸に棲むブラックホールよまだ未解

防府市　坂本加代

言い訳に頷く友の目が深い
鼻歌が朝の光に乗って来る
枯野原点火をすれば風が吹く
背追うもの全部外して天界へ
この先は五年区切りが丁度よい

鳥取市　池澤大鯰

梅雨という適応力を問われてる
柔肌に潤いを増す梅雨最中
目に見えて黴がはびこり蟄居中
あるがまま梅雨を受け入れ長い日々
入梅を宣言してから長い闇

鳥取市　奥田由美

五日ほど書いて白紙の食事録
絵手紙も記念切手で飾る喜寿
菩提寺に植わるサクラが癒す霊
初かつおと同じ価格の塩サンマ
断捨離は売れぬ田畑の処分から

鳥取市　加藤茶人

ボケた振り時には見せる痴呆症
飲み忘れ薬を貯めて回復期
春うらら猫は恋する僕ひとり
ヒーローの如き転校生が来る
世界観三者三様画布の先

鳥取市　岸本宏章

来年も会おうと告げて桜散る
早起きが辛い年寄だっている
他人の世話できる幸せかみしめる
趣がそれぞれ違う小京都
トンネルを抜きに神戸を語れない

鳥取市　岸本孝子

今日も無事に暮れましたねとしめくくる
新元号穏やかな世を祈ります
よほどのことなければ折れぬ千羽鶴
三度のめしの次に大好きタイガース
友と会う花見今年も無事揃い

鳥取市　倉益一瑤

筆の遊び盗めぬままに師は逝った
不機嫌な筆で達磨の髭を描く
句読点打って私を引き締める
神さまは平和と言う樹植えた筈
わたくしを独身にする秘密基地

鳥取市　棚田大

造花見て水やってよと孫叫ぶ
正の道解いてる方の声弱い
桜またそれぞれ違い皆んなよし
今は冬やっぱり雪が欲しいよな
自然また明るい時と逆もあり

鳥取市　谷口回春子

できること年をとるほど数が減る
爺の脛大好物の孫四人
シベリヤの星の孤独に亡父偲ぶ
常夜灯隣近所の守り神
妻小言ハートを射貫く天の声

鳥取市　永原昌鼓

有難う御免で人の世を渡る
コーヒーの深い味わい老いの午後
程々の逆風受けて出る力
買い過ぎて賞味期限がまた過ぎる
終活へ焼くには惜しいラブレター

鳥取市　中村金祥

花の宴皆んなまあーるい顔してる
大空は嘘はつかない四季巡り
平成の最後が続くテレビ画面
改元へリセットしたい人生譜
神宮の内外詣り無の境地

鳥取市　夏目一粋

やりくりはやる瀬ないもの日が暮れる
春が来たきっと来るだろ青い鳥
和やかな人だよ太鼓判を押す
墓じまい曾孫が出来て活気づく
最強の凶器は無視で手が負えぬ

鳥取市　平尾菜美

共に生きクール嫁とは仲がいい
良識を見抜く眼を評価する
なりゆきを伺う神をたてまつり
唯一無二のれんひらひら個性だし
居座りのストレス楽に払えない

鳥取市　前田楓花

エリートのマグロずらりと豊洲市場
令和令和と百回言えば慣れてくる
見てみたい気もする百歳の景色
振り向けば泣きそうだから前を向く
グレーヘアーあこがれるけど勇気いる

鳥取市　山下凱柳

新元号に平和な御代を託す民
平成の御代何残したか振り返る
新時代の幕開け祝うニューヒーロー
口軽い政治家たちが跋扈する
思いの丈五七五で詠み憂さ晴らす

鳥取市　吉田孔美子

丁重に猫の診断愛想いい
雪は来ず指痛める程除草
四人がかりの座卓何が手頃か
四、五ページ使い捨てした子の性よ
広告の裏で充ちてるそこはかと

鳥取市　吉田弘子

テレビからあなたに似てる人に会う
花吹雪何と贅沢ウォーキング
毎日を追いかけっこの庭の草
春の陽にニアミスしてる飛行機雲
暇なのに誘いは来ない十連休

鳥取市　両川無限

幸せな家にでっかい窓がある
舌先で男丸めるのが特技
風向きが読めないままに舟を出す
あの頃の記憶をたどる途中下車
聖書読むいつも半分位まで

倉吉市　猪川由美子

同じ字だっ令和さん達驚きだ
許容量心身共に減ってくる
桜は女王もてはやしては泣き笑い
頑張ったイチロー国民栄誉賞を
難解な国会用語辟易だ

倉吉市　山中康子

お疲れさん足湯の川がにぎやかい
リハビリ休むとあちこちぐずりだす
のどぐろの骨が怖いの慎重に
愛しいのわたし育てた袋川
転んだら最期と気分ひきしめる

米子市　後藤宏之

乾杯を献杯にして酒を飲む
三角の心おフロで丸くする
いいことがありそう握手したあとは
帰っても外よりこわい敵が居た
森の中合唱団が現れた

米子市　後藤美恵子

母校の名久びさ叫ぶ甲子園
戦後処理北に南に積み残す
余るほどおかずを作り孤食する
検診が冬に甘えたツケ見せる
雑草と闘う前にスクワット

米子市　竹村紀の治

のど仏ゴクリ真実漏れ出した
延命を止め安楽に丸をする
治ったら呑もうとニット帽の友
立ち読みが出来ぬ馴染みの書店員
御守りも弾んでいますランドセル

米子市　中原章子

精一杯生きて別れが待っている
思い出の足跡のこし悔いはない
迷惑をかけぬ気儘が心地よい
元がつく仲間と群れる歳になり
人生を変える出会いがきっと来る

鳥取県　斉尾くにこ

ハグされるように挨拶してもらう
ペンの動くとき心の動くとき
令和の世にもダーウィンのメッセージ
自戒のようなクシャミのような独り言
無制限スペシャルトークはじまるよ

鳥取県　竹信照彦

元号が変われど妻は変わらない
新元号老化に息吹送ろうか
地方選何も変わらず雑魚ぼやく
大阪が変わっても人は変わらない
変わる世に変わらぬボクに缶ビール

鳥取県　細田裕花

押入れに冬を仕舞ってほっとする
散歩して菜の花の香を持ち帰る
知事さんと握手が出来る選挙中
毎日が花見我が家のダイニング
ホカホカの令和という字書いてみる

鳥取県　山下節子

キッチンでハッスル出来るうちが華
弁解があやふやになり玉の汗
虐待の親知ってるか子守歌
都市砂漠さびしさ抱え一人住む
成長期一度は都会夢にみた

松江市　石橋芳山

ほら吹きの風船萎みだしている
新月に吐き出す黒ずんだ吐息
午前二時悪を育てる水をやる
練乳の中で踊っている二人
ものぐさが並べ直している明日

松江市　藤井寿代

余白にはお昼寝中と書いておく
甘噛みで試すアナタの愛の丈
聞いていませんと左の耳が言う
狂わないようにと線を引いておく
SOS子供は親を選べない

松江市　松本文子

倖せを期待しないが待っている
ぽとりと落ちた椿拾って皿に置く
待っていたのに知らん顔した春の風
春鬱や師に大観の絵ハガキを
耐えて耐えて何を待っているのだろう

出雲市　伊藤玲峰

無住寺の桜仏護りて見事咲く
蓮の葉の露を硯に書く「令和」
謎めいた噂の女が美しい
心して選ぶ私の代弁者
折れた心やっと笑えた苺パフェ

出雲市　岸　桂子

手探りでよじ登ります八十路坂
勾玉の形で眠る老いた猫
子の部屋に時間割表貼ったまま
草の香で満たすわたしのテリトリー
朝の靴昨日と同じではないぞ

雲南市　菅田かつ子

鶯の風邪か花粉か掠れ声
時として聞こえぬふりをして平和
病室で八十七のバースデー
ありがとう今日は何回聞いたやら
看病の支えになっている句集

雲南市　松本　昌

作業着に汗がしみこむ春日和
しばらくはそっとしておけ娘の涙
義理人情厚い過疎地の人やさし
幼い日食物貧しき中に生き
半額で売る元の値は表示せず

島根県　伊藤寿美

記憶遺産モノクロのまま震災忌
群青の空たちまちに黄昏れる
キッチンに妻の定規が置いてある
その時に着る衣の色は桜色
花散らしの風が届けた同期の訃

岡山市　大石洋子

姿勢正しく本読むことが流行らない
「ねばならぬ」息苦しさが追ってくる
樟がゆったり見せる世代交代
六十代の家ごもり落椿みる
結界のカーテン淡い花柄に

岡山市　工藤千代子

お若いと言われその気になった背な
保護色を脱いでごらんと春の風
月だって肴になると森伊蔵
詩人にも画家にもなれる今日の虹
都合など聞かず菓子箱提げて来る

岡山市　丹下凱夫

当面の敵は腰痛体脂肪
年金のなんと覚束ないこの世
謙遜も傲慢もない山ざくら
見えすいた嘘にはウソを返しとく
花吹雪天狗の仕業かも知れぬ

岡山市　永見心咲

どこまでも富士は脈打つ令和明く
慈しみ受けた水車の軽い音
穏やかに語れば耳が拾いだす
豹の目の先にガゼルが日向ぼこ
目的地は雨だとカーナビの余談

岡山市　前田恵美子

ときめいた昔あるから今がある
味のある人になりたく天日干し
フキノトウ味噌に仕立てて春を呼ぶ
「あれこれそれ」台詞かんたん夫婦劇
屈託なく笑った時に戻りたい

笠岡市　藤井智史

愛が欲しいジャガイモたちの徒競走
オアシスのような花嫁募集中
婚活の道に豪雪注意報
ワンダウンツーダウン恋あきらめぬ
青筋を立てて仏の顔をする

岡山県　髙岡茂子

想定外傘寿すぎてもまだ遊ぶ
子は遊びすぎ嫁は遊んで助かると
我儘な孫「お前に似てる」亡夫の声
肝心なこと抜けている日記帳
クヨクヨから抜けて自分の色でいく

岡山県　田中恵

流し台ピカピカにして妻は留守
新しいメニューで女組み立てる
目の前に楽しいプランぶらさげる
スキップを覚えた春のスニーカー
意地悪をしても夫は気付かない

岡山県　藤澤照代

割れば愛あふれる母の握り飯
二日酔いに業火で炊いた粥を出す
早起きを雀と競う母の部屋
イニシャルが朧になった古日記
沈丁花の甘やかさ鼻先で揺れ

岡山県　山懸のぶ子

里訪えばよもぎ団子に桜舞う
雑草の生えたとたんに花咲かす
働いた母の素顔がピッカピカ
今日もまた自慢じゃないがボーとする
元号は三回目だがまだ生きる

広島市　岸本清

子供より親にしつけがいる時代
殺人のニュースに慣れてくる不安
徒ならぬ政官財の凭れ合い
大卒の官僚離れ頷ける
心込め平成最後の句をひねる

竹原市　石原淑子

令和元年平和祈念の緑冴え
元年を祝うリップを赤にする
やどかりの観察孫と今日も海
プラゴミゼロ生態系を護らねば
十連休旅行パンフで終りそう

竹原市　岩本笑子

水ぬるむうどん恋しと思う日よ
ベレー帽今日は海岸まで歩く
一月、二月、三月さあ四月、目覚めよ
道しるべ私の影を探す旅
肩の麻酔歯を食いしばる、命

三原市　鴨田昭紀

満ち足りるまで聞いてやる愚痴不満
逃げ足が遅くて損な役ばかり
不器用な人だと妻の褒め言葉
階段をゆっくり上る武勇伝
潮時が来るまでそっと浮いておく

東かがわ市　川﨑ひかり

生きている日日が健康記念の日
三世代平成最後の花の宴
生きてれば結婚五十七年目
披講聞くとうとう呼ばれませんでした
記念碑があるから解る母校跡

松山市　栗田忠士

首伸ばしキリンがふるさとを歌う
憧れたはずの時間をもてあます
おみくじの凶には凶の処方箋
花吹雪愛の終わりの形して
べんちゃらも背伸びも要らぬあるがまま

松山市　古手川光

もっともっとと思う元気が有ればいい
寄り添うとは被災地に見る両陛下
歳重ね故郷の山河夢に見る
頑固です馬鹿正直です鏡です
人生行路予定が狂う事ばかり

松山市　宮尾みのり

手続きという煩雑に惑う老い
借景へごちそうさまと言っておく
日帰りを労るように富士も晴れ
東京へ行けたまだまだ有る余力
現実をひととき忘れカフェの椅子

松山市　柳田かおる

アリバイが無い昨日をふってみる
羽ばたきの音が聴こえる春霞
イントロが長くて行方不明です
踏んづけてしまった春のいのちです
十七忌孫は少年ですよあなた

西予市　黒田茂代

しもやけの痕まだ巣くってる四月
何の罪だろヘルペスに襲われる
弱り目に祟り目ヘルペスと風邪と
食い意地の強さで風邪熱を退治
頑張りも無理もほどほどにと主治医

西予市　西田美恵子

幕上る覚悟はとうに決めている
ちょっと贅沢極上品の番茶買う
補助券が一枚足りぬような恋
花吹雪あれは桜の嫉妬だな
お元気ですか母は百歳越えました

土佐清水市　辻内次根

好い時間紅茶の色が増してくる
縁側の陽射し徒然草がある
平成と書いて感慨深くなる
縮んでる痩せてる聖者らしくなる
立ち上がる春が援軍連れて来る

（前月分）西宮市　西口いわゑ

頑な心を溶かす旨いもの
温もりをくれた一羽の紙の鶴
達筆の読めぬところが値打とか
手抜き料理案外うまく出来あがる
忘却と言う空間のあり生きられる

（前月分）岩国市　上村夢香

復興の三陸鉄道ファンになる
西日本支援いただく東北に
追伸に気づいてほしい本音など
真ん丸の手作りチョコは五歳児の
むずかしい名前書けたと二年生

（前月分）東京都　まえでとよこ

ふきん干せばからりとかわく春がきた
クロワッサン　パリパリパラリひざに散り
駅弁が好きフランスにいる日本通
駅ピアノざわめきまじるショパンかな
どの国とも和して同ぜぬたのもしさ

（前月分）岸和田市　宮野みつ江

あれこれ幸せな思い出と遊ぶ
マイ鉛筆明るい話なら拾う
妄想の浅い眠りと猫の爪
三月のうたた寝猫に腕貸して
だとすれば一緒に笑うほかはなし

（前月分）堺市　齋藤さくら

二万歩を歩いた足を誉めている
頑張れと花見の誘いくれる友
ぼんやりと時間つぶしのワイドショー
庭先のつつじが蕾膨らます
カルチャーの仲間に元気貰ってる

（つづき）

松山市　郷田みや

春だから歩幅広げてスニーカー
円陣で上下はないと花の下
閉会のことば一本締めでした
まあいいか無理はしないと決めました

川柳塔の川柳讃歌 ⑰③

上方芸能評論家　木津川　計

丁寧な字で書き写す師の句集

中山　春代

かくほどに師は尊いのである。薫風さんも師・路郎を亡くして茫然、ただ蚊を見つめるのみであった。「恩師の死　手に止まる蚊をただ見つめ」ていると初光が射した。「初光ここに人間陶冶の詩」と詠んで、路郎の名言「一句を遺せ」に痩身をなお削りつづけた。その「一句」こそ田辺聖子をして感嘆せしめた「人の世や　嗚呼に始まる広辞苑」、秀抜の句が後世に残った。丁寧に書き写された春代さん、薫風さんも泉下で喜んでおいでです。

片隅でレイテ戦記を読む初老

居谷　真理子

70歳で教壇を去ったとき、これでレイテ戦記(全三巻)を読めると僕は思った。以来十三年、雑事に阻まれ、襟を正す暇がなかった。八万四千人もの日本兵を失ったレイト島の死闘であった。すでに『野火』でその惨憺を証言した大岡昇平である。心して向き合わねばならぬ大著を初老の人物が「片隅」で読んでいたのは念佛を唱えながらだったからだろう。「赤紙がそこまで来てゐる防衛省に市町に流す十八歳の氏名一覧」(福崎享子、朝日歌壇)真理子さん、有難う。忘れていた本でした。

生命線じっと見つめる手術前

上出　修

昭和二十年代の半ば、肺外科は始まったばかりだった。医師は未熟、手術の失敗で次々死んだ。手術日の一週間前から食欲をなくし、遺書を書いた。国立療養所のベッドで僕も生命線をじっと見つめた夜があった。命にかかわる病気や手術を経験した人は修さんの気持がわかる。治ったり成功すれば、かけがえのない命を大事にしようと思ったのにまた不摂制をくり返し。修さん、今度こそお大事に。

美人には生まれなくって安上がり

榎　本　日の出

「自分が一番トクしたなと思うのはね、不器用というか、不細工だったことなんですよ」と樹木希林さんは語った。器量はそうだったかもしれないが、このひとは賢こかった。「モノがあるとモノにおいかけられます」から質素だった。「人生なんて自分の思い通りにならなくて当たり前」、慰められた人も多かろう。「『私が』と牙をむいているときの女は醜いなあ」、男も同じだと思いたい。日の出さん、「安上がり」どころか「トク」でしたよ。

くねくねと女性の仕種まだ五歳

水野　黒兎

僕の兄弟は上三人が男で、下二人が女だった。母は女の子に剣や電車をおもちゃに与えたが全く遊ばない。ふと人形を渡すと一日中抱きしめた。性別でこんなに違うのか、母の学習であった。男は直線だが、女は曲線だから幼児から「くねくね」の仕種を見せる。男らしさ、女らしさの区別である。端午の節句はこいのぼりを空に流し、ひな祭りは小さな人形を部屋に飾る。男女の文化だった。黒兎さん、五つのお子を素敵なレディーにぜひ。

人生は遊びだったと今頃に

奥澤　洋次郎

「定年後を愉しむ五つのキーワード」をテーマに先日も講演した。遊ぶ、楽しむ、交わる、尽す、学ぶ、の五つだ。明治以来、脱亜入欧をめざして克苦精励してきた国民である。道楽は、本職以外に趣味などにふけり楽しむことだったのに、飲む・打つ・買うにねじ曲げた禁欲の近代化だった。毎日新聞が味な特集をときに組む。そのタイトルが「人生は夕方から楽しくなる」。洋次郎さん、これです。

橘高薫風句抄

（『橘高薫風川柳句集』平成十三年発刊）

海底の都は憂きか平家蟹
風渡る愛の伝わりゆくさまに
落武者の強さを髷切れてから
おぞましき議員の胸の赤い羽根
鉄砲玉もひょうろく玉も定年か
真相は大根になる貝割菜
家元のお供で寺の昼を食べ
道化の死蝙蝠傘は舟になり
古手紙この世のことはこのような
父親の懐ふかき凧の糸
白色も一色ならず死生の裡
水は低きに友も低きに流れるか
お手植えの松枯れながら続く昭和
啓蟄の虫より先に代議士め
横揺りにあしかが歩く金脈へ
寝転んで読むを許さる卒業し
入学と卒業姉妹ピアノ弾く
春情やちまたに枝垂るもの多し
孔雀羽根ひろげくるりと能役者
楽しげは怨嗟の声の小鳥たち
合掌の手が焔とも見えるなり
美しき地獄牡丹の散りしける
青い葉は花よりすがし晶子の忌
落胤の身の放埒が募るなり
父と子と手をつなぎ行く盆の窪
旅人へ何と親しい駅だこと
梅雨の街碧眼灯すごとく行く
ああ五十妻が侮る子か叛く
金脈へ力無き蝦骨無き蚯蚓

自選集

小島蘭幸

釋浄信大姉　瀬戸の風になる
形見分け杖を一本だけ貰う
コンビニで会う弟よ頑張れよ
酒蔵まつり先頭にいたのは亡父か
気晴らしに来たのにカープ負けました

都倉求芽

満開だそうなご近所の公園
振り返る好きや勝手の言えたころ
節水量きっちりの薬缶磨いてる
パソコンの冗談必死で追いまわす
新元号決して零和とならぬよう

土橋螢

悲しみはみんな忘れて夏が来る
渦潮の近くの海の初鰹
照りかげる人の心に夏がくる
海猫が鳴く元朝の日本海
羅（うすもの）の胸の懐紙の白さかな

西出楓楽

天声人語音読今日が動き出す
ドリンクとサプリを飲んでいる自愛
傘寿いま一日ずつが新しい
まっすぐに生きているのに背が曲がる
ほどほどに惚けてかわいくなれました

仁部四郎

元号のそしゃくに手間を惜しまない
戦争を知らぬ元号守りぬく
わたくしは女系天皇嘉みします
歌会へ一億人の相聞歌
原点は人間宣言そうでした

前たもつ

老木の花の見事に学ぶべし
平成を日記で辿るわが余生
片足立ち200数える日課なり
生かされて元気で見たいダイヤ婚
地球上から消してはならぬ民主主義

三宅保州

二十九画書いたら鬱になりました
毛筆は苦手パソコンなお苦手
美辞麗句除くと見えてくる本音
石橋を叩きすぎても出遅れる
腕前はともかく情のある主治医

福士慕情

洗顔の水にも春が来たらしい
厳冬に耐えた古木が芽吹きだす
早咲きも遅咲もあるサクラ花
好い風に乗りたいタンポポの綿毛
正面にお岩木山がある安堵

宮西弥生

モザイクの向うで移り気と遊ぶ
ラストページは移り気のない本気
酔うてても私の耳は全開転
カラフルな赤着て存在感示す
パン食で大和魂欠けていく

村上玄也

夫婦の会話固有名詞が出てこない
主語よりも述語が先に出てしまう
一日のスイッチ入れる朝珈琲
天辺はいつも風雨に晒される
居心地の悪い中間管理職

森山盛桜

人となりだろう余談が面白い
ライバルが猫舌だったとは愉快
意に添わぬニュースばかりを見せられる
死ぬ程のドボンじゃないが可成りある
舗装から突然獣道になる

八木千代

淡々と

満月のころの記憶はあるけれど
割切って歩こう過去は過去だから
あったかも知れぬ話は夢の夢
あるかもの想いは所詮まぼろしよ
失速の足淡々とゆうるりと

山本希久子

どう生きてどう消えようか初夏の風
花道のない人生の四幕目
ポケットからポロリと落ちた春の嘘
戻れない扉がひとつ五月風
友有難し迷路に道しるべくれる

板尾岳人

長生きの秘訣教えてくれた姫
退任へ流れが速い五十鈴川
紫陽花の涙見ているにぎりめし
なあ海月ノーベル賞を知ってるか
二階から見るとパーリが燃えていた

川上大輪

何もない所がいつも混んでいる
凭れるとすぐに崩れるほどの夢
シャボン玉ふわり思い出ありがとう
風は友達ぶらんこと揺れてから
ハイタッチしてあげようか招き猫

さくらさくら遺す一枚撮っておく
家族葬ばかりがつづく春なのに
黒いリボンの少女が神を売りに来る
徘徊に非ずぶらりと月を観に
答なら去年の服のポケットに

木本朱夏

僕の中で動きはじめた芽が一つ
飛びながら祈り続けている花粉
したたかに生きる大地に根を張って
白魚に国境はない透明感
さくらさくらどこまで行くの救急車

斉藤劦

令和の世戦争なんかないように
平和ボケ「開花宣言！」いつまでも
旅立った友に献杯花の下
本日は芋焼酎と芋ケンピ
森林の樹木になった樹木希林

新家完司

螺子ぜんぶギュギュッと締めたはずだけど
平方根ぼくの苦手とするところ
きれいごと言って実りのない会議
たまには飲もう漢和辞典のような人
ライバルの独楽はピタリと静止する

髙瀬霜石

飲む止める思案の末にやはり飲み
温暖化迷う標準木の里
世の無常知らす満ち欠け見せる月
あきらめか余裕か開く直る老い
青山と決めて出雲の地に染まる

竹治ちかし

親友の釘煮で満ちる独り膳
人の振り我が振り愛は惜しみなく
あまおうに姉の笑顔が見えかくれ
昭和平成令和を泳ぐスマホ族
盆正月急に来るよな十連休

津守柳伸

第９回「ふるさと」川柳募集

課　題　「　生　」
（一口２句・12人による共選・複数応募可・清記選）

選　者　伊藤　寿子・渡辺　松風・米山明日歌
吉崎　柳歩・石橋　芳山・梅崎　柳青
赤松ますみ・浅利亥一郎　他

締　切　**7月31日（消印有効）**

投句料　1000円（切手不可）
★添付の誌上大会投句用紙他便箋等使用・２句を１枚の用紙に記入

賞　最優秀賞　1点
（樺細工色紙掛・仙北市産品）他

発　表　柳誌「湖」８号
（令和元年10月末発行）

投句先・問合せ
〒014-0602　秋田県仙北市
ひのきない字長戸呂８５
浅利亥一郎方
第8回「ふるさと」川柳事務局　宛
電話　０１８７-４８-２２３６

主　催　**川柳「湖」（うみ）**

句集の森

『川柳塔創刊８０周年記念句集』

津守　なぎさ

自家菜園ひと味違う香に浸る
青空がじっとさせない万歩計
軽い腰一人暮らしへ水ぬるむ
正恵方雪の散らつく寺めぐり
よくもまあ巨乳集めた週刊誌
ストールがひらひら踊る春の土手
百均のつぼへ豪華に活けたバラ
空の旅台風予報なんのその
デパ地下の試食一巡して帰る
期限切れせんべい鳩も寄りつかず
胸おどるプラン髪染め紅をさす
コスモスやススキと遊ぶ万歩計
にがうりを薬と信じ食べてます
食欲で体調計る自己管理
最小限詰める荷物の旅前夜

（平成16年7月17日発行）

温故知新

小出智子川柳集『蕗の薹』から

自嘲とは風呂がどんどん漏れている
友達と一緒に齢をとってゆく
七十はさほどに遠きことならず
玄関を出るとき男空を見る
玄関を出るとき女振り返る
新しいカレンダーほど強くなし
中年に通天閣の灯がともり
ナツメロの一つ恋の思い出に
いつまでの女と思う春の傘
あさはかなことだと篭の鳥が言う
大人にはいまだになれぬくすり指
女と妻のあいだで好きな彩を着る
身のうちの鶴を放ちて昇天す
じっくりと一本の樹を描きはじめ
逝ってからの父には無理が言いやすし
風花の舞う日を父の忌と憶え
梅干の種人生が解りかけ

西出楓楽選

あたたかい人にやさしい風が吹く
笑い合うそれができれば大丈夫
プライドはちょっと置いたら楽になり
仲の良い二人ほどよいキョリ保つ
わずかでもチャンスあるから必死です
遅咲きの花にもちゃんと意味を持ち

尼崎市　近兼敦子

約款はもっとすっきり書けないか
喜寿にしては元気ですねと褒められる
喜寿だけど予定にはない祝賀会
戻る筈が戻ってこないブーメラン
ほどほどの酒は薬と言う主治医
十人中九人は痩せていた戦後

松江市　中筋弘充

頑張れと言って欲しくて墓参り
消えてゆく頭のノート余白増え
ひとまずは今日も生きたと感謝する

米子市　黒田紀美江

マスクしてシミも化粧もベールかけ
晴れの日は庭の草達いばってる
ひとまずは御飯だけでも炊いておく

河内長野市　渡邊修

腰入れて飲めば女房にゃ勝てぬ酒
ロックンロール樹林の愛にフォール負け
坊さんがやおら切り出す寄附の金
アポ電に度胸千慮で諭す母
満開をランドセル群走り抜け
元号で万葉人が増える古都

箕面市　寺井柳童

しっかりとハグも上達日本ペア
乗り過ごしもう一回り環状線
ジャンケンで勝ち負け決める日本流
ピカピカに磨いた廊下良き先輩
旅行鞄あれこれつめて忘れ物
修学旅行忘れられないバスガイド

豊橋市　西郷紀美代

太くしていきいきさせる淡い眉
退屈な話にマスク大欠伸
ぼんやりと過ごす一日悔いはない
新聞で拾うレシピに踊る箸
苦労した昔話が通じない
欲が出て10坪増やす借りた畑

米子市　池田美穂

御仏も菊より桜見たそうだ
韓流であやまり方を学んでる
行楽の車列先頭農耕車
十連休田畑は待ってなどくれぬ
甲子園程良い負けにホッとした
四月バカゆえに令和を疑った

神戸市　山根弘華

突然にムードこわした父の喝
あったかいなべをかこんで仲直り
都会化でお国なまりが消えてゆく
一言がすぎてチャンスを取りにがす
今が旬枯木に花がキット咲く
あったかい言葉でとかすわだかまり

三田市　大西重男

仲裁役買って出たのに逆恨み
小遣いをやった時だけ孫笑顔
今日もまた暇だ暇だで日が暮れる
老後の夢共に見た妻鬼籍入り
読書する睡眠薬の代りする
ベッドでは眠られないと意地を張る

阿南市　小畑定弘

ペン持つととても強気になるワタシ
老人の恋に淋しさつきまとう
思い出を反芻しつつ生きてます
アナログの恋が何ともじれったい
この頃のボクの五感が頼りない
つまらないジョークで消した恋もある

和歌山市　まつもと　もとこ

「あかんで」と笑ってくれてありがとう
チクチクに弱い私のひとりごと
オナモミをいっぱい溜めている左脳
いつだってワ・タ・シ痩せても太っても
レム睡眠いっそ徹夜でひとやすみ
シオマネキ夢の彼方へ横歩き

大阪市　降幡弘美

ゴミだけどおもちゃに変える子の技術
産声に広がる未知の可能性
簡単な漢字忘れるスマホ族
一年の運命決まる新学期
柱キズ子の成長を刻んでる
誰も居ぬ部屋でおもちゃが鳴り始め

捻れないように半分だけ信じ
単純に伝えてくれませんか愛
舌打ちをＬＩＮＥで送り合える仲
人間の性は見えない交差点
眼裏に揺れているのは君の語尾

佐賀県　真島　久美子

すれちがうほのかに香る粋な人
なにげないしぐさに魅かれじんとくる
ハイタッチ覚えた孫のとくい顔
都合よく老人パワーつかい分け
平成も生きのびた母百歳に

沖縄県　あら　さくら

ＣＭは泣いている子も振り向かせ
幸せとストレス太りどちらなの
太るなよ体重計が教えます
時給制シニアがシニア介護して
ＤＮＡ内股歩き兄二人

沖縄県　禱　モモト

家族葬のようにそっと散る椿
冠をシロツメクサで編んだ畦
パソコンが来て達筆が退く帳場
令と書き万葉学者声弾む
小学校ありきの碑建つ廃校地

白河市　鈴木　たけし

夢で見るトイレはいつも間に合わぬ
夕映えを仰ぐ二人の夢一つ
悩み事モグラたたきのごと尽きず
悪ガキがフェラーリで来るクラス会
人生を割り切るためにある余生

富士見市　中島　通則

新学期期待と不安先生も
人生は光と陰が同じ程
誘われる本当は好きじゃないけれど
経験に勝るものなし本よりも
保護者会役員避けて下を向く

東京都　髙岡　弥生

和やかに心身ほぐすエステシャン
一喜一憂目くじら立てるほどでない
絆というロープを信じ輪になって
車中空き釣り革の輪がはしゃぎだす
クラクション鳴らして急かし捨てセリフ

江南市　脇田　雅美

もうすぐに電波届かぬとこへ行く
お供えも勘定に入れする法事
口惜しいが未練の川を渡れない
孫の手もやはり女房の爪に敗け
女狐と酔って候う春朧

舞鶴市　伊藤　恒

京都府　北野　クニオ

モットーは少肉多菜元気です
持病とはつかず離れず共存だ
災難は何故か一度にやってくる
愚痴聞いて心のガスを抜いてやる
人生の勝負死ぬ迄解らない

大阪市　中村民子

満開の桜踏んばる過疎の町
断ち切れず過去を引き摺る老いた母
小走りで夫の歩幅合わせてる
遺影にはとびきり笑顔決めておく
心地よい疲れは生きる糧となる

大阪市　樋口眞

春爛漫急に元気が湧いてきた
平成の最後最後と姦しい
嫌なこと短く書いておく日記
黄信号慎重になり渡らない
神仏に祈るほどではない持病

大阪市　宮本千恵子

家族みな禁煙してるタバコ店
花好きと片付け下手は母譲り
古稀以上米寿未満のフラダンス
姿勢正せよと私を叱る黄水仙
若牛蒡教えてくれた義母が逝く

池田市　上山堅坊

好き勝手なシナリオ書ける独り者
ボケさえも許すほかない老いの恋
物忘れあーあまたかと呆れてる
わくわく少し安堵たっぷり欲しい歳
子の荷物にならぬ最期をただ祈る

泉大津市　磯野不二夫

またしても口がすべって友逃がす
一円も残ってへんで言うて死ぬ
愛想良い体力なけりゃできません
ほらまたね玄関出ると鳴る電話
満腹で悩みどっかへ行っちゃった

泉大津市　助川和美

風呂敷に変わりブランド紙袋
リフォームで老いた夫婦も洋風に
主人のお蔭三度の食事作ります
ひょっとして結婚祝キャッシュレス
杖ついてこの一票を無駄にせず

貝塚市　吉道あかね

葉桜の下で一息ついている
コンプレックスあって私の底力
幸せを噛み締めている豆ごはん
これからもまだ働ける台所
エプロンでおしゃれしてみる誕生日

補聴器へ春の音符がよく弾む
万葉集携え春のバスに乗る
桜吹雪の向こうに友の後ろ影
樹木葬もいいかと満開の桜
たましいをさくらの下で見失う

門真市　坂本星雨

追い焚きも要らなくなって春が来る
中吊りに「新」が躍っている四月
選挙ポスター誠実そうな顔の罠
百歳の時代を笑う鶴と亀
路地裏に残る昭和の息遣い

河内長野市　中島一彌

冗談でも肥えたんちゃうは禁句です
想像の翼広げて一句二句
妻の留守孤独に惑い酒を飲む
夫留守とたんうきうき長電話
強面では人柄醸すむずかしさ

堺市　楠井輝子

気をつけろテレビが見てるネット裏
足し算より引き算目立つ預金帳
なつメロは昭和を歌うクラス会
五七五に慣れて長文もう書けぬ
ちっぽけなバッジ争う選挙戦

堺市　羽田野洋介

元号に未来を託し願い込め
長命を持て余す世は辛くなる
チャレンジが生きる希望の糧となる
定番のブリ大根に酒すすむ
スピーチに期待弾けるなおみ節

豊中市　荒木郁子

少し芯残して父の威厳だな
反対をされて火がつく若い恋
要らぬ皿割って不満の八ツ当り
口だけは現役並によく動く
鯉のぼり黒目ぱっちり遠く見る

豊中市　貝塚正子

錦織圭となおみお似合いだと思う
お茶会のきれいに盛ってある和菓子
なにわのおばちゃんもお金戻るに引っかかる
５５１の名前宣伝する匂い
政治家に向いてはいないトランプ氏

豊中市　木藤こみつ

衣替え道行く服が皺だらけ
花冷えに猫と一緒に丸くなる
春眠に目覚まし止めて二度寝する
ラケットで地球に当たるなおみさん
ハズキルーペ掛けて特大エビフライ

豊中市　齋藤奈津子

体からお便りがきてすぐ入院
お見舞の嘘を知ってる千羽鶴
子供より子牛の誕生にわく農家
病院に集まる仲間みな元気
ぬぎ捨てた女房の靴おこってる

寝屋川市　岡本　勲

厳かにインスタ映えの梅の花
戦無く平成閉じるありがとう
寒の戻り衣装交換忙しい
砂煙揚げて今日迄生きて来た
ひたすらに精進します五七五

八尾市　前田紀雄

悪気はないみたいだ騙されておく
しっかりと三度三度に腹が空く
ギャンブルに勝ったところで泡銭
ライバルに恵まれてこそ燻し銀
顔よりも声で察するお人柄

大阪府　奥野健一郎

頑な心を解す春の海
昭和から令和へエール送ります
生き甲斐に彩り添える一行詩
母さんのハサミに名前貼ってある
花よりも明日を夢見る蕾撮る

神戸市　大頭としお

雨上がり花の命を光らせる
満開に季節はずれの綿帽子
再会にまたねまたねと花の下
花は葉に儚きことの人に似て
亡夫の分生きて令和の桜見る

神戸市　玄番美恵子

入学式に呼ばれシャッター押す係
親の夢破り深海魚に夢中
ニュールックというらしいジーンズの穴
無言電話切れて無口になる夫婦
背いたら死にます艶歌うたう妻

神戸市　米田利恵子

ブック・オフから買い戻す万葉集
バウンドをしてやって来た春の月
観桜は二の次腹の虫が鳴く
断捨離にケリをつけたい十連休
張り合って上には上があると知る

尼崎市　清水久美子

ポシェットに令和の風をしまい込む
誘惑の海で五欲が渦を巻く
ピチカートぴちぴち跳ねる春の音
明るくて人間臭い人が好き
和気藹藹にぎやかが好きにぎりめし

伊丹市　延寿庵野鶴

四コマ目明日へ繋ぐオムニバス
プライドを捨てて素になる座禅堂
影ばかり追いかけ自分見失う
輪廻転生命を孕むヒトゲノム
虎杖の酸味噛み締め句を捻る

伊丹市　岡村風琴

夏休み鎮守の森が待っている
日陰でもきれいな花でいる努力
来る来ない十七歳の菊の花
一番が知らぬ二番の闘争心
水不足根性見たり野の花に

小野市　田中辰夫

新元号僕もリセットリフレッシュ
元号を三つも生きるこの至福
令和でも戦争だけはお断り
生きてやる次の元号白寿まで
キリンさん令和の未来見えますか

丹波篠山市　河南利尚

おしどりと言われて今はくたびれる
万札を諭吉言うのはあと五年
手間暇を惜しまぬ母の黒豆煮
握手こそしたが腹わた煮えたぎる
もう面倒バーコードやめ丸刈りする

丹波篠山市　久保木剛

蓄えて一年かけて桜咲く
クラス会傘寿の笑顔まだ若い
負の言葉避けて八十路を前向きに
この辺でゆっくり暮そう八十路入り
人様と比べないのも勇気いる

丹波篠山市　藤井美智子

鈍行がいいの十八切符です
鈍行で駅弁巡り古稀の旅
旅の宿お国訛りの温かさ
ノープラン人生気儘一人旅
古寺巡り自分磨きの旅に出る

三田市　九村義徳

イライラがつのる介護にゴールない
明日がある今日する事を伸ばす癖
休診が続く前にと運ぶ足
梅に桃桜のピンク癒やす春
介護中たまにはテレビゆっくりと

三田市　辻開子

福は内九鬼の殿さん鬼も内
誕生日又も冥土が近くなる
日が落ちて七段雛も浮かれだす
夢の中夫は声無く消え失せる
満開だ強い根っ子があればこそ

三田市　馬場貴美江

三田市　松本ゆかり

いざこざの起るあいだは脈がある
貪欲にストレスまでも生きる糧
ストレスも若さを保つ糧とする
独活だって扱いようで乙な味
傷に効く時という名の塗り薬

三田市　森　玲子

初うぐいすホーホケキョとはまだ鳴けず
寝る前に川柳塔を読んで寝る
日本一周旅しています川柳塔
孫の顔泣きべそだって癒される
皆揃う主役は孫よハイチーズ

宝塚市　岸田万彩

幹事役当らぬようにボケたふり
信念をもってボーッと生きている
イントロで身震いさせるのが演歌
サクラサクわがまま全部聞いてやる
緩い脳電子手帳がなお緩め

和歌山市　定松宏枝

好きなこと仕事にすれば苦にならず
ヘルパーさん来る日は部屋を片付ける
まだ灯り点かない隣気にかかる
万葉集入荷待ちと書いてある
墓まいり無縁仏の草も引く

和歌山市　福島一雄

芋虫の気持ちが解る朝寝坊
葉書出す序でに花見する平和
黒電話一度も詐欺のコールない
クラス会眺めて比較老い具合
遺書も書き前より寝付き良くなった

和歌山県　森下よりこ

お豆腐があれば何とかなるおかず
丁寧に生きる自覚の八十路
じゃが芋の芽も出揃って桜咲く
さくら餅食べては次は柏餅
ぴかぴかの新元号と生きてゆく

鳥取市　副井　裕

丁重さ度が過ぎぬよう配慮する
イチローは野球究めた求道者
食すすみ薬飲まない幸を知る
早朝の尿意のお蔭寝過ごさぬ
健康と安らぐ友が生きる基礎

鳥取市　田賀八千代

アルバムの抜けた写真にある痛み
度忘れを少しはするが達者です
少しは顔を見せと手招き里の風
キャンバスに描こう今日の晴れ舞台
逆ばかり言って好きとは言えぬ恋

倉吉市　若松由紀子

約束の指切りした手も皺になり
水たまり着地失敗老いを知る
ゆずられた席に素直にありがとう
一言が胸に刺さって眠れぬ夜
病院でインフルエンザいただいた

米子市　生田和之

ああ平成思えば何をしたのやら
令和の世八十路を幾つ生きるやら
八十路来て目も歯も自前するめ噛む
マイナンバー箪笥の底で朽ちている
杖持たぬ見栄に酔うのも男意気

米子市　伊塚美枝子

大粒のいちご大福春の味
夫婦げんかまだ出来るから大丈夫
十連休もて余してる老い二人
断捨離と言ってタンスを混ぜ返す
失恋をしていないけど髪を切る

米子市　川本美津子

コンセント抜いて春から社会人
人並に老いて来たのか物忘れ
今年また孫の世話してボケ防止
選挙戦社交辞令で両手振る
下駄箱に成長を見る孫の靴

米子市　野川宣子

新元号を肴に当分は飲める
ざわざわが拍手に変わる新元号
除雪費が余って頭悩ませる
巨漢力士増えて土俵が小さくなる
花粉ＰＭ予定外した万歩計

松江市　相見柳歩

天国へ小さな善もすべてマル
共にいて楽な相手と生きていく
オルゴール鳴らしながらのプロポーズ
貼りついてもう動かない過去の恋
いろいろなことチコちゃんに叱られる

安来市　原徳利

日延べする週一回の休肝日
花曇る春の匂いの入る窓
たまにあるナイスバーディーチップイン
ピカソの絵解るというと嘘になる
墨ツボを使わぬ家が建っていく

瀬戸内市　宮宅比佐恵

祝令和優美な日本よみがえる
真夜中に無口なペンが喋りだす
まだまだと風に押されて輪に入る
お裾分け昭和の風は温かった
年金に春の誘いが多すぎる

岡山県　小野美那子

たかが紙されど紙ですラブレター
大根足向い風には持って来い
中味より値うちを決める包装紙
八方美人演じきれるか鉢合わせ
外孫は二時間かかる子守歌

広島市　田桑恵子

草むしりそっとスミレがこちら向く
球音に夕餉の終い急かされる
百歳に再検討の軍資金
令和価値つけて商魂抜け目なし
新元号ただただ平和願います

尾道市　小畑宣之

昭和世代時代遅れで生きて行く
過疎の町人間らしく生きている
何よりも笑顔が防ぐ認知症
人の世は出逢い別れの繰り返し
パスポート妻は十年僕五年

竹原市　土井輝恵

七人兄弟上から順に逝く卒寿
胸の石流したつもりチクチクと
忘れよう忘れようとて甦る
まだ夜叉で仏への道繋がらぬ
三分咲き思わず萎む雪の空

府中市　岸田武

元号はどうあれ桜咲いている
イチローは哲学者にもなっていた
見覚えのカラスが今日も屋根にいる
こんな字を妻と笑って辞書を繰る
失せ物は明日になったら出るでしょう

山口市　青木隆子

国のため植えたスギの木花粉撒く
もったいないと母メモ帳を広告で
母の背に祖母の面影墓参り
これからは私が母の母になる
笑う叔父亡父の面影そのまんま

山口市　中前幸子

雲追い掛けて夢工房に辿り着く
悔い無き一生花柩に眠る
春愁や終着駅の風といる
コンパスの中心少しずつ狂う
風ひらりひらり本音を裏返す

西予市　井関はるえ

表も裏も見せて親友だと思う
機械音痴でずっとガラケー持つつもり
大阪弁にいつも発破をかけられる
まあいいか　いいかと柔くなって年
腕組んでみたが妙案浮かばない

高知市　三谷松太郎

恥多しいいや長生きずっといい
これだけはゴシック体で譲れない
忖度も胡麻すりもせず出世せず
春過ぎて清少納言朝寝坊

福岡県　本田さくら

ドッジボールはじける子等に花わらう
さくらさくらすべての子等にしあわせを
猫はもう飼わぬ最期がつらいから
卒園式昔とちがう名がずらり

唐津市　岩崎實

亡妻とまどろみながら眠ってた
何時か来る防災倉庫山積みす
難しい課題はみんな先送り
里ざくら酌み交わしてる羅漢様

沖縄県　下地香代子

離れても思い伝わるお母さん
冷蔵庫何もなくても開けるクセ
美容院行った帰りは胸弾む
子供の日運動不足感じる日

沖縄県　宮すみれ

下がる袖二重輪ゴムですっきりと
人見知り愛想笑いがまず一歩
水鏡ぼんやり顔も春を待つ
芳香が春を手招きカモミール

黒石市　北山まみどり

春嵐つぼみは固く閉じたまま
車窓から故郷に似た知らぬ山
路線から外れて新しい景色
雄弁になるまで変えぬ水の味

弘前市　髙森一呑

五十年リンゴ贈って柿が来る
幸せは両手で掴みはなさない
どっぷりと墨を含ませ筆を取る
こだわりを捨ててストレス消しにゆく

仙台市　月波与生

寂しいかと問われまあまあとこたえ
独りでもいいさまだまだ道はある
辻褄が合って甘口カレー煮る
狛犬と猫撫で終わる日曜日

千葉県　廣瀬良磨

だんだんとサプリメントの数が増え
満月と静かに酒を飲んでいる
やわらかいさくら色した春の雪
春雷が冬を春へと入れ替える

横浜市　巌田かず枝

老犬は私と同じ食いしん坊
間違えぬように数えて飲む薬
春ですねてんとう虫を見つけたよ
大漁の夢を見させる鯉のぼり

辞任劇適材適所も匙を投げ
平成を惜しむサクラの花いかだ
思春期はガラス細工のように触れ
起き上がり小法師のような存在感

横浜市　川島良子

よく生きた昭和平成令和まで
それぞれの花咲かせよう令和年
日本国幸せになれ令和年
もう一度生き直したき令和年

静岡市　渡辺芳子

傷ついた言葉の意味を深く読む
旅人の心和ます風物詩
いっぱいの思い出会いに里帰り
ゆとりから出るユーモアが和ませる

名古屋市　冨田末男

雨の夜は赤ちょうちんで雨宿り
草花に精霊宿る春の宵
忖度の言葉に響く裏の顔
伝統の小船で嫁ぐ晴れ姿

名古屋市　山本三樹夫

歳よりも前を歩いている老化
つき刺さる言葉がひとつ向い風
歯で腫れた妻の横顔若く見え
たかが眉されど眉いざ勝負の日

豊橋市　小松くみ子

次々と難儀な事がおきてくる
二人に一人それに当選ガン患者
急場凌ぎ食事作りの役が来た
ぎっくり腰杖ついてても口達者

大阪市　柴本ばっは

リアス線再開通の春が来る
する仕事好きになれよと父の声
平成の大横綱は白鵬に
選挙での僕の審判受けました

大阪市　前川善之

片づけてもなお片づかぬはがゆい日
春休み子供の姿見かけない
近頃は観るテレビなく本を読む
どしゃぶりの褒美の様に虹が出た

大阪市　松田聰

私の部屋に春連れて来るスイトピー
咲いた桜に雪たわむれる春でした
もがいてるだから笑顔を忘れない
いい訳はシドロモドロで舌足らず

大阪市　森廣子

散歩道足止めて見る蝶の羽化
少女期の何に迷った自死願望
昼のコンビニは爺さんの溜まり場
今年度またも借金増えた国

大阪市　横山里子

池田市　太田省三

マニュアルのとおりの謝罪つづく国
汗を拭く子どもの明日を信じたい
書き替えるたびに減ってる遺産額
泥棒は居ないと自慢する離島

池田市　倉本一弥

再々婚とことん縁の薄い人
割り込んで話かきまぜ　すみません
花時計お日様連れて香り連れ
たっぷりの墨で元号手すき和紙

河内長野市　原熊知津子

打ち消され行方不明になった自我
動かぬ下肢の翼となった車椅子
逞しく優しい人の苦い過去
若葉が匂う五月の風はみどり色

河内長野市　穂口正子

適当に有って助かる交番所
ケセラセラ人生謳歌目一杯
幽玄を奏で異界へ能舞台
前を行くきりりと生きる子の手本

堺市　古川光雄

雨ゴルフクラブと傘の二刀流
三次会本性出て来て場が荒れる
探し物ない時最後妻に聞く
酒も好きどらやきも好き二刀流

堺市　大和峯二

老人が邪魔だとばかり福祉切り
長生きをいやがる政治もう交替
美ら海に足を運ばず寄り添うと
わが余生平和のために注ぎたい

吹田市　岩口のぞみ

初出勤同じ車窓も凜と見え
十連休サービス業は十連勤
花見ごろ夜の宴は寒過ぎる
初任給初めて奢る父に酒

高槻市　三谷白黒

いかなごも絶滅魚種になりそうだ
欲しいよねスマートフォンの中毒科
変らずの日々が送れて幸せだ
嫌なとこ親に似て来た私です

寝屋川市　川本信子

お年玉キャッシュレスで廃止する
掘って掘って地下は蟻の巣大都会
快適に歩いてほしいと靴が言う
デパ地下で駅弁買って旅気分

寝屋川市　坂本ミヨノ

誕生日ケーキ笑顔でうたい出す
おぼろ月亡き母の顔浮かんでる
晴天に楽しくダンス杖持って
情っ張り母ゆずりなり娘似る

遺影持ちスマホ片手に花見旅
じじばばが校門で立つ初下校
選挙だけ力を入れる永田町
誘われて花見が続き四日酔う

羽曳野市　磯本洋一

嫌いだが薬になると食べさされ
愛嬌振りまく山高帽のだんご鼻
今までも柳に風と生きてきた
くたびれた浴衣は僕の寝間着です

枚方市　谷英也

勤務医は風邪をひいても休めない
聞いてない話しましたと今日もまた
バイトテロ人手不足も良し悪し
花粉ですマスクで化粧手抜きする

八尾市　田邊浩三

頤にマスク下げてよ聞こえへん
春の耳グラサン　マスクも引き受ける
ファッションを気にする人よ背が丸い
徐ろに猫が始めるストレッチ

大阪府　高木道子

白髪がすっくと立って席譲る
蓋のないマンホールにおーいおーい
権力の維持ナンバー2を潰す
曲がった道を歩いてるつもりなく

大阪府　中内孚彦

モナリザに見透かされてる下心
微笑みは見返り求め倍返し
不服らしい返事もせずに席を立つ
つわぶきの香りが春を追っかける

神戸市　奥田宗光

傘寿越え悔いの滓濾(おりこ)し生気みる
足技でトビラ開閉妻さらり
前頭葉水枯れせずに日記付け
うぬぼれひがみ二人羽織で生きてます

神戸市　興水弘

前向きに明日を約束生きる糧
桜植え生きる力にまず5年
悩むほどなくて幸せ遺産分け
失職もみそぎ済まして次期選挙

神戸市　近藤勝正

母の留守父のカレーは旨過ぎる
お世辞でも上達したと褒められる
夢の中巡り合えるか亡き母と
中身より見た目で決まる受付嬢

神戸市　斎藤隆浩

花冷えの中に小さな夢芽ばえ
咲いて散る修業と思う何事も
何拾い何を捨てたか今ぞ知る
人生の桜を思う咲かせたか

神戸市　田本古鈴

桜はらりはかなさ思う一人旅
飲兵衛に言い訳くれる四季の情
定年後ふっきれて良い顔になる
種をまき肥やしをあげて夢育つ

神戸市　敏森廣光

鼻をかむまさか泣いてたとは言えず
ド忘れもたまにやったら愛敬やが
老木に咲かせた花の心意気
令和やて昭和生まれは幾つやろ

尼崎市　清水正子

田舎の土地売り看板が雨に泣く
好きじゃなかった父にどんどん似て来たわ
ココシャネルは愛した男踏み台に
夫の柩ロッキーのテーマで送る

尼崎市　山田厚江

良い知らせ味わう御酒呑み過ぎた
ケキョケキョがやっと覚えたホーホケキョ
呆けるのは原因何か医者に聞く
ダイエット肥満の医者にコツを聞く

伊丹市　平井富夫

土付きの分葱届いて酢味噌和え
鯉のぼり花粉黄砂で腹膨れ
ウォーキングポイント無いとつい休む
まやかしの経済成長モヤシ食う

加西市　山端なつみ

人の輪を心で繋ぐ細い糸
お囃子で村が賑わい灯がともる
わらぞうり今では家の飾り物
怒ったふり見せて男の面子立て

丹波篠山市　澤良子

令和です私も一文字仲間入り
安倍麻生またも出ました忖度が
花見酒私の服も花模様
おぼろ月そう聞くだけで鼻歌が

三田市　住吉美和子

子供から大人になって恋もした
叔母の家に電話デートの約束
千両の蕾がふくらんだ頃結婚式
翌年夏あなたのお父さんを産む

三田市　東内美智子

妖(あや)かしの隠れていそう朧月夜
足音がついてくるシャッター街で一人
客のいない店にゆれてる赤ちょうちん
芦池に蛙鳴く夜の月映える

丹波篠山市　長谷川善輔

紅を差し友と笑った皺談義
小さな手指切りせがむ内緒ごと
白内障術後に見入る妻の顔
自転車にもシルバーマーク付けてます

三田市　生田えい子

三田市　幸田厚子

国旗より干し物なびく子沢山
伸びた下着びしょびしょポチを拭いてポイ
出前まださっき出ました何時もの手
出合いから決めていましたこの人と

三田市　中山昭美

ふと見せた素顔の君の目は優し
ゆずり葉になれぬ元気をもて余す
絵手紙に添えた一言温かい
サービス券財布の底で期限切れ

三田市　中山寅男

君の背はときめき孕む春の風
間違った注意と助言境目を
刑事もの筋書き読めて画面替え
暦見る頭の中ははや夏に

宝塚市　太田としお

一〇連休先ずは健康第一に
天国に一番近い老ホーム
今元気だけど明日は分からない
贈りもの梅が散ったらすぐ桜

奈良市　尾畑なを江

横たわるマグロの目からうらみぶし
おしのびで行くのが流行りそうな年
何程のこの世は一度きりのこと
新札の顔ぶれを待つサイフ達

奈良市　加藤江里子

満開の桜に心見透かされ
二人暮らし真ん中にある猫の席
春の嵐妙に力が湧いてくる
本堂への裏道が好き花の寺

生駒市　児玉規雄

大津波忘れた様な春の海
長々と講釈のいる新元号
急増の俄か万葉愛好家
改元に十連休の贈り物

和歌山市　北原昭枝

長かった道程一途さくら咲く
夜桜のぼんぼりの下酔うた酒
花影に妖艶をみている現
眼裏のふるさとにある花ふぶき

和歌山市　倉橋悦子

ありがとう束ねて母の日の墓前
虹色の空に飛び立つ新未来
おしゃべりは誤嚥予防にいいと医師
生き抜いた昭和平成への思い

和歌山市　佐藤まき

新元号日本の雅とりもどす
人生の楽しみ一つ損な下戸
淡路に春中学生が若布刈る
最果ての漁師を泣かすトドの群

和歌山市　鍋嶋澄子

彼岸すぎ春と遊ぼうガーデニング
春風と雲と自転車ツーリング
えんどうに菜の花春のちらし寿司
温泉と美味とおしゃべり姦しい

和歌山市　西川千鶴

覗くたび隣の芝生青くなる
殺気立つ程に鉛筆尖らせる
赤過ぎる紅は女の果し状
猿知恵を集め築いた砂の城

岩出市　村中悦男

料理番組プラス我流のかくし味
おそ霜の報に祈りの野菜苗
小さな悩み笑顔の妻にいやされる
今朝とった野菜ほおばる恙なく

鳥取市　上山一平

マイカーが歩く気力を奪ってる
歩きほど長生きすると諭される
引越しに業者の居ない辛い春
残雪の山とさくらが美を競う

鳥取市　大前安子

子の夢を脳の小箱へインプット
三猿を見抜いた子等は笑み返す
ライバルは世の風と知る子の顔よ
母の愛まだ半分も真似できず

鳥取市　山野すみれ

穏やかを望みながらも波立てる
矢面に立って男を磨く日々
散り際は選ばぬ花の風まかせ
目に見える少しの事で浮き沈み

倉吉市　伊藤嘉昭

マジで聴く「七十手習い続くか」と
年聞くな若者たちに智恵負けぬ
パソコンも一年経てば我がものに
スマホにて時間を調整まだヤル気

倉吉市　大羽雄大

筆まめも手の震えからケータイに
残りもの福があります妻の腹
男前倍に上がるとメガネ店
往年のスターやっぱり美男美女

倉吉市　岡﨑美知江

海鳴りは帰らぬ人の雄叫びか
情報の海に溺れる人の波
開発が進み熊までホームレス
四捨五入四の線上が渦を巻く

倉吉市　田中紀美恵

酒一合ほろりほろりと千鳥足
なあなあと世間話に花が咲く
ぎっしりと愛が詰まった夫婦です
何事もなかった一日めでたいな

倉吉市　田中　けいこ

根性があれば居ねむり避けられる
私には根気と本気欠けている
音を外すけれどマイクを離さない
言ってやる金は警察アポ電に

倉吉市　堀　かずこ

ほっとする明るい笑顔笑い声
花開き春の香りに蝶が舞う
楽をしてつかんだ夢は喜べぬ
大山のてっぺんあれは名残り雪

倉吉市　宮田風露

春雨に草一段と元気増す
戻り寒咲いた桜が悲鳴あげ
免許返納世間が狭くなって来た
令和には諭吉が姿消すそうな

鳥取県　飯野菖子

振り向けば過去は黙って俯いた
距離を置き暮して見えた幸もある
ポタポタに熟し逝く日を待つ私
嬉しいな孫と暮らせる幸せを

鳥取県　門村幸子

ウォーキング君も元気か土筆ん坊
新元号再スタートの気概もつ
スタートは寒いくらいがいい散歩
薔薇の棘刺さるうっかりミス続く

鳥取県　下田茂登子

八十五歳いつ死んだって惜しくない
怪我をしてそれから先が見えて来ぬ
距離あった息子と暮す難しさ
死にかけて死の怖さ知る八十五

鳥取県　西谷悦子

草取りの靴を履いたら雨ポツン
寸劇をして夫と日々暮らしてる
心中に遣る気の火種持ち続け
郷里に遊んだ露地が今は無い

鳥取県　橋本整

窓開けて花の便りを待っている
泉下から頑固を笑う妻の声
九十坂つかず離れず口ださず
がむしゃらに生きて妻には先立たれ

松江市　山根邦代

水仙を一輪そえて墓参り
野草つみ春の苦味をなつかしむ
正座して新元号を聞くさくら
トキメキをなくさぬ心持ちつづけ

出雲市　黒目ひでお

叶えたい夢は令和に持ち越され
広告に背中押されて夢を追う
ご苦労さんイチローに幕寂しいな
断捨離が進まぬままに年重ね

雲南市　永見安子

半端ない洗濯の山空あおぐ
手作りを供えてあげるよもぎ摘む
花桃の先が日に日に紅くなり
おめでとう仲間があってやる気出て

岡山県　大杉敏夫

新調の帽子先頭児等の列
初孫の入園式や山笑う
春野菜たっぷり盛って孫子待つ
まだ炬燵放せぬままの花便り

岡山県　岡本余光

決断を大書してみた再生紙
まだ動く五体労り深呼吸
飾らずに暮らして肩の凝り知らぬ
お守りの代りつとめる石ひとつ

広島市　松尾信彦

効果など問わぬアートの案山子です
あがいても収入欄のない暮らし
思考力スマホ進化で退化する
いらぬこと喋って三日音がない

尾道市　日谷寛

美しい恋のピアスと花の下
よろこんで恋のピアスにぶらさがる
あすを見る恋のピアスに花吹雪
拗ねている恋のピアスに花衣

竹原市　若年幸子

標準木一輪二輪へ気が揉める
ひとり占め桜散り敷く露天風呂
検診日上がって嬉し骨密度
筍へ庭の木の芽がシャンと伸び

三原市　笹重耕三

平成が眠る昭和が鮮かく
苦笑い作り笑いもして大人
生きてきてよかったそんな笑い顔
形見のように親父の鍬をぶら下げる

三次市　伊藤寿子

川柳を力に今日を生き抜くぞ
同窓会のボスが認知という噂
新元号の孫をいつまで見れるやら
老化現象笑い飛ばして生きてやる

今治市　渡邊伊津志

深呼吸して爪跡をまた舐める
ぎくしゃくを丸く納める歳の功
その先を促すように射る視線
目に青葉老いがゆっくり背伸びする

大洲市　花岡順子

大器晩成届かぬ虹を追いながら
春風にふと気を許す日暮れ時
鍵掛けたままの部屋から自立心
言われても困る黙られても困る

（郷田みやさんは39頁にあります）

英語 de Senryu⑨⓪

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

ビールの泡を吹いて　話を　そらす気か
blowing the foam
off the beer
he changes the subject

あつさりとふられた事を笑ひ合ひ
we laugh
at how she
flatly rejected me

---

blow off 吹き出る　*foam* 泡　*change* 変える　*subject* 話題
laugh at 聞いて笑う　*how* いかに　*flatly* きっぱりと　*reject* はねつける

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句㉚

デミタール・アナキエフ (*Dimitar Anakiev*) の俳句集 "21 *haiku from an asylum center: Xenophobic Mosquitoes*"『政治亡命者センターから発信する 21 の俳句：外国人嫌いの蚊』(2017)。アナキエフは戦争と向かい続けてきたバルカン半島に位置するスロベニアの詩人であり医師です。WHA 世界俳句協会の共同創設者、「Knots—南東ヨーロッパ俳句」の共同編集者、スロベニア俳句選集 *Pond of Silence* や非戦俳句集 *Pond of Sky* の編集などバルカンを中心に戦争の無意味さを問い続けています。フランツ・カフカ賞をはじめ数々の賞を獲得。今回の作品集『政治亡命者センターから発信する 21 の俳句：外国人嫌いの蚊』は、アナキエフが 2016 年 3 月から 7 月の間に医師として、スロベニアの *the Asylum Home* で経験した亡命者や難民との出会いから生まれました。21 句の俳句にそれぞれ英語、ロシア語、イタリア語、ドイツ語、ペルシャ語、中国語、ポルトガル語、スロベニア語による 8 カ国語の翻訳が付いています。彼の長年の友人である清水國治氏が出版の尽力をしました。作品集の一部分を拙訳で紹介します。

Xenophobic mosquitoes/ biting all asylum-seekers: black and white/ men and women
外国人嫌いの蚊が亡命希望者の黒人、白人、男や女たちを刺している

Escaping from war,/ escaping from poverty/ into an asylum center
戦争から逃げ、貧困から逃れ亡命センターにたどり着く

Only 13 years old/ she gave birth, now pregnant/ with anemia
たった 13 歳で出産し、そして妊娠中の今、貧血症

誹風柳多留一二篇研究 72

石川道子・小栗清吾
細井龍夫・伊吹和男
山田昭夫
清博美

615 **けんぎやうもたゞつき合へばしゆしやう也**

石川 盲人の官位では最高の検校は金貸しを兼業した。盲人の貸金は保護され、鬼のような取り立てのきつさが川柳でよく詠まれている。金銀の貸借では鬼だが、それがなくて普通に付き合えば殊勝である、というのであろう。

けんぎやうのなりたちをいふ三味線屋 二15

清 賛。「殊勝」はもともとは仏語。

616 **つよい気て着るとちりめん安く成**

石川 縮緬は絹織物の一。縦糸と横糸の縒りが違うのでシボができる。羽二重などと比べると強そうに見えるのかも知れない。強い織物だという気で態度大きく乱暴に着たりすると、せっかくの絹物も安っぽく見えるというのか。

ちりめんハとらまへいゝと禿いひ 一〇42
麻上下にちりめんてむす子出る 天二智1

清 賛。

617 **くせのある酒で花見をはふかれる**

石川 酒癖が悪いため花見に行く仲間から外された。

くせのある酒でくじら身さして出ル 安五松3

清 賛。

618 **たいこがさし口でかぶろとりに来る**

石川 太鼓持ちの指し口(告げ口・密告)によって禿がとりに来る、というのだが何を取りに来たのか。いい大人では取って来にくいところを、禿にささやいて取って来させたのであろう。

さし口で買よび出しの美しさ 明二義1

伊吹 一国成敗の句ではないかと思う。禿か取りに来るのは浮気客の身柄。

岡引ハたいこ捕手ハ禿なり 三五29
禿につかまると入墨でハすまず 拾七31

山田 右説賛。

清 同。太鼓持にまで愛想を尽かされた客?

619 **ちんひぶくりやう見かぎつて弥十郎**

石川 陳皮(ミカンの乾燥皮)・茯苓(サルノコシカケ科)は薬種。

弥十郎は、小西行長の幼名。

小西行長は堺で薬種を扱う商人の子として成長したが、薬種商を見限り秀吉の家臣となった。朝鮮へ出兵、関が原戦では石田三成に与し敗れて刑死した。

日本勢人参蔵てつかみやい 六23
日本勢一人リハ伽羅の目利もし 初23

細井　賛。関ヶ原の戦いに敗れて自刃したのは大谷刑部ただ一人。石田三成・小西行長・安国寺恵瓊は捕らえられ、果ては京都市中引き回しの後、六条河原で斬首された。切腹は許されなかった。

清　賛。

620　**くどかれてまへ歯できせるかんで居る**

石川　男にくどかれて前歯でキセルをかんでいる女。江戸時代女性の喫煙率は高かったようである。

　くとかれて乳母だいた子に聞合　六39
　くどかれて娘は猫にものをいひ　四38

伊吹　賛。はじらいか思案か。

清　賛。

621　**なみ杖を四五本やつてはたらせる**

石川　なみ杖は、座頭以下の盲人が用いる杖、またその人。

　検校が、貸した金の取り立てに支配下の座頭を四、五人も遣ったのであろう。

　なミづえを二三度やつてはたらせる　安四梅1

清　賛。

622　**若衆こんしやうが出たがる江戸家老**

小栗　「若衆こんしやう」は「若衆根性」だと思うがよくわからない。「若衆」は、普通の若者の意と男色の少年（陰間）の意とがあり、主題句の場合はいずれであろうか。川柳では、江戸家老は国家老に比べ軟派の人物ということになっているが、さりとて陰間風な性格・態度というのもピッタリしない感じがする。

　よく分からぬが、同じような句、

　江戸家老若衆こんじやう出シたかり　二二1

の『輪講』で、佐藤要人先生が「若者と同じように遊びたがるの意」とされているのを頂戴することとする。江戸家老を揶揄した類句の一ということだろう。

　思慮も無くアハ、〳〵と江戸家老　二一八28
　其顔の甘ミはしつた江戸家老　一六五18

清　賛。「こんしやうを出し|たがる」ならスッキリするのだが。

623　**こふくやのつき当リ迄五ツとまり**

小栗　ここで「呉服屋の突き当たり」は、越後屋のある駿河町の突き当たりに見える富士山のことで、そこまで江戸から「五泊」の旅程だというのであろう。旅行の泊まりは人によって区々であろうが、因みに『東海道中膝栗毛』では、戸塚、小田原、三島、蒲原、府中（静岡）と泊まりを重ねている。

　五十里も先を手に取呉服店　傍四18
　ごふくやの切リ通シからふじか見へ　安四宮2

清　賛。少々のんびりした旅程だ。

624　**ちよくとうにあたまのかざり壱本へり**

小栗　「勅答」は、①天子が臣下に答えること。②臣下が天子の問いに答えること。の二義があるが、ここでは②の方。

　楊貴妃の句。謡曲『楊貴妃』では、寵姫楊貴妃の死を悲しんだ玄宗皇帝の命を受けた方士が、蓬莱宮で楊貴妃の霊魂と対面、方士が対面した証拠の品を乞うと、楊貴妃は玉の釵を与えるというストーリーになっている。主題句はこれを材料にして、楊貴妃は皇帝へのご返事に釵を与えたのだから、頭の飾りが一本減ったことになるね、という意。

　かんさしをゆふれい壱本ぬひて出し　安五礼4

清　賛。

愛染帖

新家　完司　選

（投句272名）

金ないが花はきれいに見えている

（評）「おっ、綺麗！」と感動できるのは、心が健やかであるということ。少々手元不如意でも、それぐらいの余裕は持ちたい。

神戸市　奥澤洋次郎

いつまでも無邪気なタコのウインナー

（評）キャラ弁の定番「タコさんウインナー」。その可愛さを喜べるのも余裕。どんな事にも楽しさを見つける「人間」って面白い！

和歌山市　まつもともとこ

勝利者にゴールテープがハグをする

（評）待ち受けていた観客の誰よりも早く勝利者を祝福できるゴールのテープ。その体に巻き付いた状況はまさに「喜びのハグ」。

紀の川市　山東日出男

自虐ネタばかりが増えてゆく窓辺

（評）軽い自嘲は「ああ、私も一緒！」と共感できるが、自虐まで行くと引いてしまう。メンタルが強いが故に自省も強いのか？

佐賀県　真島久美子

飲みたいなロマネ・コンティを月一で

（評）最高級ワイン「ロマネ」。百万円以下はなく、良い年のものでは二百万～三百万円。月一ではたちまち破算。年一にしよう！

熊本市　杉野　羅天

鳥居マーク散歩の犬に教え込む

（評）「ここは神域です。立小便をしたらチンチンが腫れます」と主張している鳥居の絵。さて、ワンちゃんは理解してくれたのか。

奈良市　大久保眞澄

鬱憤もトランポリンで振り払う

（評）怒り・憎しみ・妬み・哀しみ等の「負の感情」は、身体を動かすことによって発散できる。トランポリンは最適だろう。

生駒市　飛永ふりこ

キャッシュレス時代に誕生新紙幣

（評）新しい紙幣が出るのは五年後。現在でもカード・オンリーの店が多い欧米諸国から「まだお札を？」と笑われるのでないか。

京都市　清水　英旺

寒いからスマホの光浴びている

（評）あらゆる情報を簡単に得ることが出来るスマホ。一人ぼっちでも寂しくなんかないが、一日に4時間以上も開くと依存症！

鳥取県　細田　裕花

死んでからでもやってくる請求書

（評）死んでしまえば「ハイそれまでよ～」とは行かない。妻や子に迷惑を掛けぬよう、借金より貯金を多目にしておくべし。

弘前市　高瀬　霜石

とは行かない。妻や子に迷惑を掛けぬよう、借金より貯金を多目にしておくべし。　男鹿市　伊藤のぶよし

散り際がだいじ咲くことより大事　下松市　有海　静枝

咲いて散ることに邪魔立てかも医療　岡山市　丹下　凱夫

心掛けしだいでできるゴミ拾い　倉吉市　岡崎美知江

湯の中に溶ける私のコラーゲン　広島市　岸本　清

老友の玄関ドアに昼寝中　大阪市　柴本ばっは

ふらふらとしてるが出刃は握れます　三原市　鴨田　昭紀

遅れないように出しゃばらないように　西予市　黒田　茂代

股関節病んで禿びなくなった靴　神戸市　大頭としお

寅さんを真似て旅して途中下車　鳥取県　斉尾くにこ

納得の「はい」と逃れるすべの「はい」　大阪市　江島谷勝弘

必死のパッチでないから悩まない　三田市　足立つな子

春の街制服を着たメダカ達　阿南市　小畑　定弘

免許証返して近くなる冥土

海南市　小谷　小雪
一画目心を込めて令と書く

西脇市　七反田順子
ああ令和きっと平和でありましょう

堺　市　加島　由一
令和元年神と分け合う米を研ぐ

寝屋川市　川本　信子
改元だリセットしようまだ喜寿だ

大阪府　髙木　道子
平成から令和に命移し替え

朝霞市　前田　洋子
令和へと母九十五辿り着く

土佐清水市　辻内　次根
令和元年ぼくの心が洗われる

門真市　坂本　星雨
人生の下五令和をどう生きる

大阪市　坂　裕之
和やかな時代を期待新元号

防府市　坂本　加代
平成が令和にバトン五月晴れ

横浜市　川島　良子
令和フィーバー詐欺の手口にご用心

鳥取市　山下　凱柳
新元号詐欺商法に利用され

箕面市　出口セツ子
昭和平成令和へ急に老いました

寝屋川市　籠島　恵子
令和の「和」まではチラッと予想する

八尾市　髙杉　千歩
新元号手が平成を忘れない

高槻市　初代　正彦
終活も令和を期して始めるか

鳥取市　永原　昌鼓
新元号もう馴染んでる令と和と

弘前市　髙森　一呑
新元号孫とお習字練習中

西宮市　髙橋千賀子
平成の名残りの桜凛と咲く

大阪市　森　廣子
平和を祈る新元号の夜桜に

三田市　多田　雅尚
平成で唯一誇れる無戦争

大阪府　米澤　俶子
本棚の万葉集が目を覚ます

米子市　竹村紀の治
はっきりとレイワと言えた長い舌

羽曳野市　徳山みつこ
唐草の風呂敷に包む平成

高槻市　松岡　篤
犠牲者が出ればお役所ドッコイショ

連続のくしゃみ襟元寒くなる

シンシニヨリソウと繰り返す鸚鵡
メールよりあなたの声がききたいの

ゴーンゴーン寺の鐘でもあるまいに
歩きスマホ罰金とればすごい額

岡山県　高岡　茂子
みんな好きみんなの桜咲きだした

伊丹市　延寿庵野鶴
花まんだら風もヒト科もみなうかれ

河内長野市　穂口　正子
人知れず泣きたい時も有る桜

仙台市　月波　与生
桜前線に乗りふるさとへ行く

唐津市　岩﨑　實
花吹雪車椅子にて吹かれおり

三田市　上田ひとみ
さくら散る少し哀しい色をして

大阪市　藤田　武人
便利さの二割しか使わぬスマホ
飛び入りの挨拶がある選挙前

岡山市　大石　洋子
蕗の薹地球の隠し味食べる
目地の黴うきあがらせて春うらら

貝塚市　吉道あかね
赤を着ていたのに席を譲られる
賑やかな街で疲れている夫婦

松江市　石橋　芳山
オムレツに包んで一件落着
予感などないが野性の勘はある

大阪市　小野　雅美
五割ほど引いて祝辞を聞いている
ときめきも減って化粧もほどほどに

川柳が生きる力と知恵くれる　堺市　大和　峯二
川柳と生きてる私知らぬ夫　神戸市　能勢　利子
夢を持ち猪突のように句を詠もう　境港市　藤原　久直
川柳に負けてはならぬ尻叩く　倉吉市　山中　康子
川柳を凶器にしてはなりません　富田林市　中村　恵
全没でも本社句会に出て行こう　寝屋川市　冨山ルイ子
通り抜け冥土みやげの入選句　八尾市　山根　妙子
句碑にされ直立不動してる石　枚方市　海老池　洋
見て見てとわたしを呼び止める桜　貝塚市　石田ひろ子
異国の人と共に楽しむ桜花　大阪市　平賀　国和
満開の日本が待っているのです　沖縄県　森山　文切
奥飛騨の白川郷の国際化　豊中市　水野　黒兎
お花見の序でに投票を済ます　八尾市　村上ミツ子
愛でるより飲む食う喋る花の下　東大阪市　佐々木満作

花見バス越冬の蚊も浮かれ出る　川西市　大坪　一徳
水仙の黄色いろいろ春匂う　鳥取県　門村　幸子
ハイヒール無性に履いてみたい春　米子市　吉田　陽子
鶯の囀り集め光る花　枚方市　山口弘委智
淀んでは連れ添い太る花筏　鳥取市　上山　一平
群れたがる縺れたがるは人の性　岡山県　藤澤　照代
春ううらスマホの中は花ざかり　篠山市　長谷川善輔
信じない大凶信じる大吉　松山市　郷田　みや
ビョーキだと嗤われているトラフアン　高槻市　片山かずお
あざ笑う声が聞こえる失せた鍵　岡山県　山縣のぶ子
竹島を想い続ける島根県　松江市　中筋　弘充
回遊魚にはなれぬ私は怠け者　八王子市　川名　洋子
学校で差もつけられぬ祝い金　堺市　奥　時雄
ズボンの裾上げまたも縮んだ3センチ　橿原市　安土　理恵

三倍にのびた結婚適齢期　三田市　北野　哲男
風呂入る時に気付いた昨日のシップ　堺市　矢倉　五月
受け売りを質問されてアップアプ　堺市　村上　玄也
右左前と後ろはまだ分かる　岡山県　田中　恵
使うほど利口に動く手も口も　和歌山市　上田　紀子
地球儀の空白に描く僕の国　倉吉市　牧野　芳光
化けなくていい日曜のリラックス　香芝市　大内　朝子
イヤリングはずしてホッと主婦になる　香芝市　山下　純子
ちょっと見は豪放磊落実はシャイ　藤井寺市　鈴木いさお
円満にほんの少しの隠し味　黒石市　北山まみどり
忖度をはかるわたしもお人好し　長野県　丸山　健三
老いの食クックパッドで新鮮に　羽曳野市　宇都宮ちづる
友くれたほうれん草となめくじと　米子市　成田　雨奇
ロボットの癒しだなんて真っ平よ　松山市　柳田かおる

三田市　堀　正和
春が好き日本が好き酒が好き
羽曳野市　中川ひろ介
寒曖に右往左往の花見酒
札幌市　三浦　強一
神様のいじわる燗酒の花見
箕面市　広島　巴子
何語でもいいよ浮き浮き花見酒
弘前市　稲見　則彦
山菜のほろ苦さ消す酒二合
東京都　川本真理子
何の会でも飲み会と言う男子
大阪市　高杉　力
缶ビール二本抱えて自由席
岸和田市　雪本　珠子
人を恋い人と別れて酒を知る
寝屋川市　伊達　郁夫
サプリ飲み自信をつけて三次会
池田市　上山　堅坊
居酒屋に渦巻いている自己主張
尼崎市　永田　紀恵
飲む相手変われば味も変わる酒
三原市　笹重　耕三
言い分けを重ねる午前様の酒
三田市　村田　博
うどんより酒に合うのは手打ち蕎麦
宝塚市　岸田　万彩
桃色の罠にはまって青い息

橿原市　居谷真理子
寒風に立つ父と子の相似形
笠岡市　藤井　智史
結婚はまだかまだかに胃腸薬
大阪市　古今堂蕉子
元気な声病人の声使いわけ
三田市　大西　重男
私の代わりに枯れた庭の松
豊中市　松尾美智代
車で行ってジムで歩いて鍛えてる
松江市　相見　柳歩
「好きだよ」と呟くだけじゃダメですか
鳥取市　奥田　由美
私より医師が二の足次のオペ
池田市　太田　省三
坐ってる捕手は案外重労働
和歌山市　福井　菜摘
目立ちたいが矢張り静かに暮らしたい
京都市　都倉　求芽
春宵一刻耳かきの大収穫
三田市　丹羽　美恵
あの頃に見られなかったおしん見る
八尾市　前田　紀雄
喜寿過ぎてアドレナリンが枯渇する
大阪市　谷口　義
立ち所に消えるお金というものは
松山市　栗田　忠士
もてなしが過ぎてツバメが来なくなる

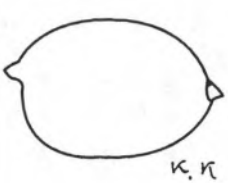
府中市　岸田　武
梯子からバイトが先に降りてきた
富田林市　片岡智恵子
やさしくされ心の貯金また増える
鳥取市　岸本　宏章
九十で新車買う人寝てる人
寝屋川市　平松かすみ
絵手紙のお礼電話で半時間
奈良市　米田　恭昌
缶ピース昭和の香り詰まってる
沖縄県　宮　すみれ
ベビーカーに愛犬乗せる若夫婦
三田市　福田　好文
失言が出ると国会活気づく
枚方市　丹後屋　肇
バブルから国力落とす事件事故
奈良県　渡辺　富子
スマートフォンずらりと並ぶ優先席
高槻市　富田　美義
老人力すこし付いたと笑い合う
大阪市　笠嶋　恵美
ゴムの木が玄関先でいばってる
堺　市　遠山　唯教
老妻の仕入れ係を拝命す
神戸市　冨永　恭子
飽きるほど一緒にいます船の旅
池田市　倉本　一弥
先走り人の話の腰を折る

共選欄

樽榛抄

（薫風書、カットとも）

（投句　３４２名）



「柱」　川端一歩選

いにしえの伽藍を偲ぶ柱石　羽曳野市　中川ひろ介
大黒柱もっと威張ってほしかった　藤井寺市　太田扶美代
天平が法相柱に蘇る　堺市　澤井敏治
どっしりと構え動じぬ床柱　三原市　鴨田昭紀
鼻柱折れてようやく仲間入り　明石市　糀谷和郎
廃屋もでんと踏ん張る床柱　大阪市　津村志華子
あかんたれの息子が今や柱です　河内長野市　大島ともこ
柱ごと父の権威が痩せてゆく　和歌山市　武本碧
門柱のある家にあこがれがある　尼崎市　藤井宏造
折折に支柱がほしい下り坂　八尾市　山根妙子
神のみぞ知る神殿の宇豆柱　出雲市　竹治ちかし
残り時間老いの支柱を立て直す　八幡市　今井万紗子
床柱の傷に家族のドラマ見る　東大阪市　北村賢子
母さんが我が家の柱母子家庭　寝屋川市　川本信子
大黒柱にも黴が生えてきた　奈良市　大久保眞澄

「柱」　山岡冨美子選

なつかしい柱時計に昭和の詩　生駒市　飛永ふりこ
今もなお南の島の幾柱　橿原市　居谷真理子
柱時計止まったままのインテリア　河内長野市　黒岩靖博
戦争で柱の消えた母子家庭　京都市　桝本宏子
戦争は一家の柱抜いたまま　堺市　奥時雄
孝行のつもりで磨く床柱　今治市　渡邊伊津志
築百年生家に光る床柱　河内長野市　木見谷孝代
鼻っ柱折られますます頑なに　豊中市　藤井則彦
石柱へ栄華を語るパルテノン　奈良市　渡辺富子
鼻柱折れてようやく仲間入り　明石市　糀谷和郎
柱にはなれそうもないふくらはぎ　沖縄県　森山文切
里民話くすんだ柱よく喋る　伊丹市　延寿庵野鶴
凧揚げに泣いた電柱過疎に泣く　大阪府　米澤俶子
咳払いで座を支配する床柱　宝塚市　岸田万彩
まだやれる茶柱立って励まされ　奈良県　長谷川崇明

熱血の父の柱はフェニックス　生駒市　飛永ふりこ
生き甲斐の柱にしてる五七五　鳥取県　橋本　整
まだ動く柱時計に負けられぬ　堺　市　柿花　和夫
表札が消えた廃屋の門柱　弘前市　福士　慕情
傷だらけの大黒柱父の顔　豊中市　松尾美智代
帆柱立て戦い空し壇ノ浦　奈良市　仲西　賛郎
建売の細い柱を見てしまう　大阪市　大川　桃花
戦争で柱の消えた母子家庭　京都市　桝本　宏子
ドングリを集め柱のないチーム　札幌市　小沢　淳
令和日本非核非戦の屋台骨　三田市　尾崎　一子
今もなお南の島の幾柱　橿原市　居谷真理子
忠君愛国お国の柱に兄十九　大阪市　髙杉　千歩
祝令和柱に傷を付けました　境港市　藤原　久直
原発がまだ欲しがるか人柱　羽曳野市　徳山みつこ
可視化にも胸の氷柱見せられぬ　岡山市　永見　心咲
美らの海新たな基地に人柱　河内長野市　藤塚　克三
電柱がぶら下ってた震度七　三田市　北野　哲男
余計なことするから柱揺れ出した　米子市　後藤　宏之
空手チョップで折れた建て売りの柱　尼崎市　清水久美子
柱にもシミソバカスが出来ている　鳥取市　前田　楓花
部屋へやの柱時計がみな違う　四條畷市　吉岡　修
理屈屋の鼻っ柱を圧し折った　大阪市　坂　裕之

痩せっぽちの父でもうちの柱です　奈良市　米田　恭昌
国の柱となって散った知覧の碑　寝屋川市　岡本　勲
わが家では大黒柱は弱竹か　丹波篠山市　長谷川善輔
脊柱の骨折 セメントが埋まる　藤井寺市　鴨谷瑠美子
柱にもならぬ男に惚れました　和歌山市　西川　千鶴
床柱時々研いてますよ亡父さん　堺　市　矢倉　五月
余計なことするから柱揺れ出した　米子市　後藤　宏之
勝ちに行く迷わず主軸にもバント　堺　市　内藤　憲彦
表札が消えた廃屋の門柱　弘前市　福士　慕情
茶柱を信じて向かう試験場　堺　市　村上　玄也
六歳の私覚えて居る柱　豊中市　池田　純子
床柱なくて上下ない暮らし　河内長野市　森田　旅人
歩きスマホ電柱上手く避けて行く　大阪市　髙杉　力
柱を背なに居眠りをしてござる　鳥取市　土橋　螢
頼りない柱で誰も寄り付かぬ　米子市　竹村紀の治
火柱を川は静かに通過する　富田林市　関　よしみ
床柱で背中掻くのはやめなさい　奈良市　大久保眞澄
働き手パパママジジにババみんな　池田市　倉本　一弥
御柱を担ぎ一念発起する　鳥取市　中村　金祥
妻の背に柱も移る定年後　豊中市　上出　修
折れそうな柱支えた多国籍　大阪市　小野　雅美
百年の柱を建てたい令和の世　松山市　栗田　忠士

住む人を柱に据えて町おこし　松山市　宮尾みのり
法相柱再現されて手を合わす　大阪市　笠嶋　恵美
貝柱美味に生まれて幸せか　八尾市　内海　幸生
熊本城角の石積み柱役　大阪市　近藤　正
通れたよ柱の穴で邪気払う　鳥取市　加藤　茶人
銀柱イワシの群れのマスゲーム　河内長野市　中島　一彌
柱時計今は無音で刻んでる　大阪市　江島谷勝弘
住吉大社四柱からとはしらなんだ　大阪市　榎本　舞夢
政界にひのきの柱見当たらず　和歌山市　福島　一雄
焼け野が原にぽつんと立っていた柱　門真市　坂本　星雨
私の支柱になってくれた本　大山市　金子美千代
床柱捨てて施設へお引越し　紀の川市　楠原　富香
年金は老後の日日の支柱です　塩竈市　木田比呂朗
大黒柱兄は戦でシベリアに　大阪市　森　廣子
折れそうな柱支えた多国籍　大阪市　小野　雅美
税収の柱値上げの消費税　さいたま市　星野　育子
不戦の誓い令和を守る心柱　河内長野市　村上　直樹
電柱が原発ノーと身を捩る　羽曳野市　吉村久仁雄
誉められず主役になれず柱石　大阪市　内田志津子
柱石の意地を通した母の愛　貝塚市　石田ひろ子
柱石築百年も揺るがない　大阪市　宇都満知子
エンタシスみたいな僕のシルエット　松江市　石橋　芳山

折折に支柱がほしい下り坂　八尾市　山根　妙子
いにしえの伽藍を偲ぶ柱石　羽曳野市　中川ひろ介
電柱が原発ノーと身を捩る　羽曳野市　吉村久仁雄
揺るぎない日本の技術心柱　高槻市　島田千鶴子
ドクダミの花は支柱に頼らない　岡山市　永見　心咲
シルクロードの風を纏ったエンタシス　和歌山市　古久保和子
電柱を探して夕焼けの孤独　門真市　坂本　星雨
柱でもなんでもなくてでくの棒　米子市　成田　雨奇
大黒柱もっと威張ってほしかった　藤井寺市　太田扶美代
海鳴りへ柱時計が呼応する　枚方市　丹後屋　肇
エンタシスみたいな僕のシルエット　松江市　石橋　芳山
部屋へやの柱時計がみな違う　四條畷市　吉岡　修
千年も塔を支えて心柱　三田市　村田　博
新天地船のマストの風にきく　三田市　野口真桜子
景気の柱インバウンドが多すぎる　河内長野市　穂口　正子
柱にはなれぬが風除けにはなれる　岡山市　工藤千代子
非正規が支える柱GNP　唐津市　山口　高明
骨粗鬆症の柱とわたくしと　富田林市　中村　惠
応援をします令和の若柱　唐津市　坂本　蜂朗
寄り添ってくれる柱を募集中　笠岡市　藤井　智史
茶柱にそそのかされて家を出る　三田市　北野　哲男
芽吹くまで春抱いてる霜柱　大阪市　藤田　武人

エンタシス東西問わぬその威容　弘前市　稲見　則彦
シルクロードの風を纏ったエンタシス　和歌山市　古久保和子
年金が大黒柱になる老後　三田市　谷口　修平
九条を柱にゆるぎない平和　香芝市　大内　朝子
沖縄の柱虫食む星条旗　三原市　笹重　耕三
核廃絶柱にすえていいはずだ　岡山市　大石　洋子
ソクラテスが見た円柱を僕も見た　川西市　大坪　一徳
五時四六分柱時計止まる　神戸市　山崎　武彦
十字架のような被災地の床柱　仙台市　月波　与生
お互いが支柱になって老いて行く　貝塚市　吉道あかね
柱などないが何とかやって来た　三田市　上田ひとみ
傷つける柱も無くてケアハウス　堺　市　矢倉　五月
大黒柱さえも出ていく過疎の里　寝屋川市　岡本　勲
芽吹くまで春抱いてる霜柱　大阪市　藤田　武人
よく笑う柱で人が寄ってくる　寝屋川市　籠島　恵子
支柱あってこその金賞菊花展　大阪市　田中ゆみ子
床柱背負って喪主の顔になる　弘前市　髙瀬　霜石
石柱へ栄華を語るパルテノン　奈良県　渡辺　富子

秀　句

戦争は一家の柱抜いたまま　堺　市　奥　時雄
人柱そんな時代があって今　男鹿市　伊藤のぶよし
平成っ子国の柱にやがてなる　豊中市　水野　黒兎

よく笑う柱で人が寄ってくる　寝屋川市　籠島　恵子
他人の塩舐めた柱が太くなる　出雲市　伊藤　玲峰
火の柱抱えすぎたか火傷する　倉吉市　牧野　芳光
ご立派な柱が邪魔で多い敵　下松市　有海　静枝
鴨居には新選組の刀傷　大阪市　古今堂蕉子
残り時間老いの支柱を立て直す　八幡市　今井万紗子
戦略の柱になった若い志士　和歌山市　上田　紀子
柱時計夫婦のリズム作り上げ　倉吉市　大羽　雄大
柱にはなれない樹だが好い木陰　安来市　原　徳利
動かない柱時計も令和にする　仙台市　月波　与生
横になることは考えない柱　大阪市　平井美智子
男なら時に火柱あげてみよ　千葉市　海老池　洋
牛乳で耐震加工する背骨　和歌山市　まつもともこ
停年後化粧柱に甘んじる　神戸市　近藤　勝正
神のみぞ知る神殿の宇豆柱　出雲市　竹治ちかし
日本の柱と思う両陛下　宝塚市　太田としお
父さんが座っていればそれでいい　三田市　上田ひとみ
ドングリを集め柱のないチーム　札幌市　小沢　淳

秀　句

イチローの柱は忖度を受けぬ　八尾市　前田　紀雄
店番の猫が我が家を支えてる　神戸市　米田利恵子
柱にもシミソバカスが出来ている　鳥取市　前田　楓花

「大きい」

（投句　221名）

小沢　淳　選

広げ過ぎ大風呂敷が畳めない　札幌市　三浦　強一
あの夢は大き過ぎたかシャボン玉　宝塚市　丸山　孔一
はやぶさ2宇宙の謎に大挑戦　河内長野市　藤塚　克三
大物の片鱗みせる初舞台　和歌山県　福井　菜摘
甘くない西瓜に生きる意味を問う　佐賀県　真島久美子
大黒柱撫でて水やる母が居た　大阪市　古今堂蕉子
辞書いっぱい呑み込んでいる電子辞書　奈良市　大久保眞澄
一本道大きな月とランデブー　高槻市　島田千鶴子
大風呂敷広げて畳む術知らず　高槻市　松岡　篤
深い愛やさしくつつむ大きな手　和歌山市　北原　昭枝
命名の文字は大きく太く書く　三原市　鴨田　昭紀
安心を貰う大きい傘の下　鳥取市　永原　昌鼓
最大にパソコン画面表示する　大阪市　小野　雅美
大器だと言われ続けて芽が出ない　堺　市　村上　玄也
無人駅発つ少年のデカイ夢　弘前市　福士　慕情
大らかな人に悩みも消えていく　羽曳野市　藤原　大子
ついて行く大きい歩幅だったなら　黒石市　北山まみどり
インバウンド大きいバッグ街に満ち　大阪市　平賀　国和
大笑いついプライドを脱ぎ捨てる　西宮市　福島　弘子
過疎の里大きな家に母ひとり　三田市　福田　好文

父の日は少し大きい睨み鯛　大阪市　森　廣子
大きい方取るすべ知らぬ一人っ子　京都市　桝本　宏子
トランプの夢も長城には負ける　倉吉市　牧野　芳光
初競りのマグロ三億大きな値　鳥取県　山下　節子
どうせなら大きな嘘で煙に巻く　箕面市　出口セツ子
根比べ相手が大き過ぎました　西予市　黒田　茂代
懐の大きいお方大好きよ　大阪市　榎本　舞夢
大の字を付けた日本が見た不幸　出雲市　竹治ちかし
何事も笑って呑んでいく大器　海南市　堂上　泰女
大家族昔なつかし今ひとり　大阪市　榎本日の出
懐の大きな人のいい笑顔　豊中市　水野　黒兎
嘘つけば大きく開く鼻の穴　河内長野市　中島　一彌

佳　句

盃が大き過ぎたか二日酔　香南市　桑名　孝雄
器より大きい欲を盛りたがる　大阪府　米澤　俶子
富士山に表も裏もありません　弘前市　髙瀬　霜石
赤ちゃんが寝た大きい声は法度　倉吉市　山中　康子
海に出て心でっかくなってゆく　海南市　小谷　小雪

人

児童虐待守る大きな傘がない　河内長野市　原熊知津子

地

人間に戻る大きなあくびして　仙台市　月波　与生

天

一年生みんな大きい返事です　弘前市　稲見　則彦

軸

気宇壮大なれど懐ちと寒い

「トンネル」

（投句　218名）

島田千鶴子　選

合格へ長いトンネル潜り抜け　和歌山市　喜田　准一
スランプのトンネル抜けて弾むペン　和歌山市　福井　菜摘
トンネル前慌てて閉めたＳＬ車　東大阪市　北村　賢子
砂山のトンネル抜けて子らの夢　東京都　川本真理子
トンネルが過疎化を救う起爆剤　名古屋市　山本三樹夫
復興の長いトンネルまだ続く　犬山市　関本かつ子
甲子園あのトンネルが勝負分け　大阪府　高木　道子
トンネルの向こうで呼んでいる明日　富田林市　山野　寿之
トンネルの中心機一転して抜ける　大阪市　榎本　舞夢
トンネルの出口付近に待つ希望　海南市　小谷　小雪
トンネルを抜けてもりもり出すやる気　池田市　上山　堅坊
トンネルが続く用心しなければ　熊本市　杉野　羅天
連敗のトンネル抜けた不戦勝　東大阪市　佐々木満作
トンネルをプラス指向で駆け抜ける　高槻市　富田　保子
ぼんやりとだけど必ずある出口　三田市　上田ひとみ
悲しみのトンネル続く拉致家族　宝塚市　岸田　万彩
身の丈に合ったトンネル素手で掘る　松山市　柳田かおる
花のトンネル抜けて巣立って行く子供　豊中市　松尾美智代
トンネルの中でエンストする悲劇　藤井寺市　鈴木いさお
トンネル抜けやっと答えが見えてきた　奈良県　渡辺　富子
トンネルの出口土竜の罠がある　大阪市　田中ゆみ子
トンネルでひと節悦に入るわたし　河内長野市　梶原　弘光
トンネルの多い旅だがまだ続く　松原市　森松まつお
トンネルを抜けたら息を潜めます　佐賀県　真島久美子
トンネルが続き溜息ばかり吐く　堺　市　村上　玄也
トンネルを越える気骨が花咲かす　生駒市　飛永ふりこ
ほんとうにブラックホール見えちゃった　堺　市　内藤　憲彦
トンネルの出口をふさぐ不況風　和歌山市　武本　碧
長いトンネルだった娘の反抗期　豊中市　木藤こみつ
タイムトンネルあの世とやらを見て見たい　札幌市　三浦　強一
トンネルを過ぎると違う里言葉　出雲市　竹治ちかし
葉ざくらのトンネル駈けるランドセル　大阪府　米澤　俶子

佳　句

トンネルを抜けるとここも過疎の村　弘前市　高瀬　霜石
トンネルの奥で戦の声がする　大阪市　平井美智子
トンネルを抜けると加速する旅情　門真市　坂本　星雨
母に会うトンネルならば振り向かぬ　大阪市　小野　雅美
地下鉄の路線図アリが書きました　奈良市　大久保眞澄

人

トンネルで五感を研いで時を待つ　河内長野市　木見谷孝代

地

トンネルの真上を泳ぐ大鮪　弘前市　稲見　則彦

天

トンネルを抜けて少年視野無限　札幌市　小沢　淳

軸

トンネルの先に一番星光る

初心者教室

題 ― ペット

居谷 真理子

ひっくるめてペットと詠むか、犬や猫など種類を決めるか、はてまたポチ、タマと名前で言うか。思案のしどころです。

（原は原句　参は参考句）

原 可愛さが哀れに変る老ペット　光雄

この句の場合ペットを限定した方がいいでしょう。訴える力が強くなります。

参 かわいさが哀れに変わるポチの老い

原 立ち話ペットはそっぽ向いて居る　道子

犬を連れて散歩途中の立ち話ですね。

参 立ち話犬はそっぽを向いている

原 お隣りのペット我が家と境無視　三樹夫

ペットにもいろいろありますので

参 お隣の猫が垣根を越えてくる

原 犬に猫私ペットが嫌いです　重男

参 内緒だが私ペットが嫌いです

原 おだやかな気分の日には甘え寄る　(東)美智子

参 おだやかな気分の膝に猫が来る

原 二年ぶりよくぞ覚えて猫もどる　嘉昭

参 二年ぶりふらりと猫がまいもどる

原 駄犬でも掛け替えの無い家族です　千賀子

参 駄犬かもしれないけれど家族です

原 ゆるキャラをペットにしてる町の人　よしお

言われてみるとその通り

参 ゆるキャラは町のみんなのペットだね

原 お玉から蛙になって住みついた　恒

面白いところに目をつけられました。でも「お玉」と略すと台所用品の杓子になってしまいます。オタマジャクシのことですよね。

参 卵から蛙になって住みついた

原 日向ぼこ猫になりたい時もある　貴美江

参 しばらくは猫になってる日向ぼこ

原 喜寿の今ペット扱いされている　洋一

参 喜寿の僕ペット扱いされている

原 捨て猫を洗い乳やり抱いて寝る　(門)幸子

説明過多のような……。シンプルに愛情を表現してみました。

参 今日からは拾った猫を抱いて寝る

原 戯れるペットさまさま老夫婦　(澤)良子

参 ふざけあうペットさまさま老夫婦

原 その命預けられたよ我死ねず　(立)和子

参 飼い主となった私は死ねません

原 スピッツを連れる昭和のお嬢さん　(幸)厚子

参 スピッツが流行った頃のお嬢さん

原 犬嫌い知って俺には吠えるポチ　剛

参 犬嫌いと知られて俺にだけ吠える

原 マイキャットこの暖かさ抱きしめる　寧

参 抱きしめて温みを貰うマイキャット

原 流行でペットたちにも出る格差　くみ子

参 ペットたちにも流行という格差

原 僕の位置頂点妻でポチの下　照代

参 頂点は妻です僕はポチの下

原 ペットショップ命売り買い平気です　なつみ

参 ペットショップ命売りましょ買いましょう

原 会話なしきみのしぐさでよくわかる　(二)千代

ペットという題を知らなければ分かりにくい句です。

参 犬語など知らないけれどよくわかる

原 訪問にしゃしゃり出て来るペットさま　雄大

参 訪問にしゃしゃり出て来るお犬様

参 訪ねたら主人顔したお猫様

参 ペットさま訪問客の値踏みする

原 タマの首鈴の代りにお守りを　えい子
参 お守りをタマの首輪に付けておく
原 寂しさもラジオペットで長い夜　一平
参 寂しさの夜はペットにするラジオ
原 哲学者デカルトカントうちの猫　里子
　愉快な句。猫の風貌が浮かびます。
参 哲学はデカルトカントうちの猫
原 介護用ペットにしたいしゃべる鳥　(あ)さくら
参 介護用ペットにしたい九官鳥
原 人形もペットの様にだきついて　ミヨノ
参 人形もペット抱いたり話したり
原 子供一人育てられるペット代　信子
　全体で十七音ですがリズムを整えて
参 子供一人育てられますペット代
原 あなた好みの長い髪から卒業です　(大)洋子
　題から想いきった飛躍です。内容を強めて十七音にしました。
参 切りましたあなた好みの長い髪
原 ペットにも犬派猫派の二大閥　和之
参 町内に犬派猫派の二大閥
原 外面が良すぎるポチよ仕事しろ　美恵
参 外面が良すぎ番犬にはならず
原 ペットにもそそぐ愛情子と同じ　のぞみ
参 子と同じ愛をそそがれてるペット
原 亡き犬の柱につけた傷恋し　久直
　「恋し」とまで言わず、読者に感じとってもらいましょう。
参 亡き犬の柱につけた傷なでる
原 婆さんのペットになった掃除ロボ　徳利
　親愛をこめての「婆さん」でしょうが…
参 老妻のペットになった掃除ロボ
原 ブルドック美人が連れてよりお洒落　奈津子
参 ブルドック連れて美人がより美人
原 マイペット嫌な顔せず愚痴を聞く　勝正
参 愚痴を聞くこれがペットの大仕事
原 犬社会にも生まれながらにある格差　通則
参 犬たちも生まれながらにある格差
原 ぬいグルミ毎夜添い寝癒しくれ　開子
参 添い寝して癒してくれるぬいぐるみ
原 三年前逝った愛犬ペットロス　(伊)美枝子
参 三年も引きずってますペットロス
原 飼い犬に会うため帰る里帰り　弘美
　「帰る」「里帰り」、言葉が重なりました。
参 飼い犬に会う喜びの里帰り
原 かわいいと嫌がる服を無理に着せ　(北)恵子
参 かわいいと嫌がる犬に無理に着せ
原 俺はトラ鉄の鎖はひきちぎる　もとこ
　元気いいですね。感情をプラスして
参 ペットにはならぬ鎖はひきちぎる
原 妻多忙子供部活でタマ家出　まさる
　サラ川的な面白味はありますが
参 誰からも構われなくてタマ家出

【佳　句】

手厚さに夫が僻むペット葬　紀美代
ブルドックにちょっとひるんだ散歩道　風露
パート代ポチの薬に消えていく　美穂
父さんの両ポッケから仔猫達　隆子
愛猫と睨めっこしてまた負ける　優
妻よりも甘え上手な猫が居る　(森)玲子
口きかぬ亀にもちゃんと有る気分　(貝)正子
ペット飼うペットは僕を飼っている　みちを
タマだけが私の膝を恋しがる　廣光

【今月の推せん句】

お前もかタマと目が合う午前様　河南　利尚
飼主と同じ病で医者通い　山本　ゆき
母ちゃんのペットじゃないと十五歳　磯野不二夫

川柳塔鑑賞

同人吟　早川遡行

―5月号から

新元号が発表された。日本古典「万葉集」からの出典（初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす）から採用、令和、と改元されました。

新元号に関わる句が多く出句されている。「令和」が発表される前に詠んだものだが、撰集して観賞して見たい。

新元号平成の傷労りつ
（故）島田誠一

新元号やきもきさせる雀たち
稲見則彦

新元号馴染めば良いに決まってる
今愁女

元号は変れど僕は僕である
磯部義雄

駆け抜けた平成耐えていた昭和
上田紀子

新元号日本の夜明けなって欲し
川端一歩

新元号わたしも卒寿いき燃やす
吉内タカ子

新しい年号を待つ八十路の身
栗田久子

「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ、という意味が込められている」と安倍晋三首相は新元号の「令和」の意味をそう説明した。

和やかに新元号を待っている
指宿千枝子

平成が始まった日よ終わる日よ
髙田美代子

生きて行く新元号に期待して
吉田喜代子

新元号予想しながら五七五
能勢利子

平成の灯もその内にぼんやりと
永田紀恵

御退位の陛下に感謝謹みて
大坪一徳

新元号を待つ誕生日無心
石原淑子

いい余生だった平成ありがとう
岸本宏章

天皇陛下御退位叶い安堵され
猪川由美子

戦争に苦しんだ昭和。災害に明け暮れた平成。元号が「令和」に決まりどのような時代がやってくるのか。期待と不安の入り混じった川柳人たちの思いである。

貧しさを抜ける机にかじりつく
牧野芳光

ゴルフ、パチンコ、旅行、と金の掛かる趣味ばかり。それに比べ川柳は、紙と鉛筆さえあれば、どこででもできる。

初花を仰ぐ両手にゴミ袋
細川花門

美しいものと汚いもののコラボレーションによって生まれた一句。

待ち切れず花屋の春へ逢いに行く
吉田陽子

温室で咲かせた花が逸早く春を告げる。

一面の菜の花村に子が居ない
西田美恵子

過疎化した村には年寄りばかり。

言葉では慰められず手を握る

寺井弘子

病院での見舞いでしょうか。きっと重い病気なのでしょう。手を握るだけで思いが通じ合う。真心のこもったお見舞い。

入社式みんな期待の星だった

谷川憲

入社した時はみんな期待の星であるが、星になれるのはほんの一握りである。

思い切り歩いて気分変えていく

松原寿子

上司から嫌なこと言われた。つまらぬことで夫婦喧嘩になった。そんな時、男は酒で気分を紛らわす。あなたは思いっきり歩くことで気分を変え、ストレスを発散する事ができる。

妻に感謝だけどことばでよう言わぬ

石田隆彦

そうですよね。まだ名前で呼んだこともない妻に、感謝の気持ちを言えなんて、一升呑んでもいえません。何せ、オーイお茶、オーイ酒、の間柄なのですから。

ふる里の頑固がなぜか心地よい

両川無限

都会の頑固と田舎の頑固は質が違う。

平凡と言う幸せに今気付く

榎本日の出

平凡な夫と夕日浴びている

工藤千代子

平凡な暮らしを守るのは難しい。平凡な夫と見下して言っている訳ではない。愛する夫としあわせな夕日。

マイペース守っています酒の量

近藤正

気分次第で飲む私の酒とは大違い。暑い寒いといっては飲み、ドラゴンズが負けた、全没だからといっては飲む、増肝日はあっても休肝日はない。

忘れたいことありひとり旅に出る

高杉力

忘却とは忘れ去ることなり、忘れえずして忘却を誓う心の悲しさよ。映画「君の名は」の菊田一夫の言葉である。

会える時に会っておこうとクラス会

木見谷孝代

名古屋で暮らす同郷のクラス会。年齢とともに一人減り二人減りして、いまは十二人になってしまった。八十三を迎えた今年も案内状が来ている。会えるうちは出かけようと思っている。

わたしの庭を選んでくれた蝶々

太田扶美代

近くには公園もあり花も咲いているというのに、小さなわたしの庭にも蝶々が来てくれた。選んできてくれたと思うとなおさら、こんな嬉しいことはない。

山男に惚れた私の登山靴

酒井紀華

山に惚れた、ではなく山男に惚れたですか。山男に惚れると若後家さんになるという歌をご存知ないのかな。いや、それを承知でこの人と決めたんでしょうね。私もそんな山男になりたい。

栞忌が巡る新緑鮮やかに

内海幸生

西尾栞ご夫妻とお会いしたのは、平成六年犬山市制四十周年「お城まつり川柳大会」の時でした。美与子婦人が当日の兼題橘高薫風選「団体」で天の句を受賞されたのをよく覚えています。

その一年後の平成七年五月十五日、風薫る新緑の中お隠れになった。先生から頂いた「人恋し人煩わし波の音」の色紙が額に入れられ、我が家の床の間で不動の位置を占めています。

水煙抄鑑賞

―5月号から

倉益一瑤

庭先の芽がおもむろに顔を出す

北山　まみどり

万物が芽吹く季節になり、小さな庭に春を見付けた時のわくわく感が伝わってきます。「おもむろに」が何とも楽しい。

飴一つもらってあげてもう仲間

中山　昭美

不思議ですねえ、経験ありです。全然知らない人でも飴ちゃん一つで話のきっかえができて仲間にすぐなれる。

人生の後半直球で勝負

米田　利恵子

私もこの元気が頂きたい、気力だけはあるのですが、思い切って勝負しますか。

ありがとうついにあなたも流れ星

小野　美那子

近年次々とありがとうも言えぬまま星になってしまった人の多い事悲しい。

牛の目の中をのぞけば俺が居た

中井　虎尾

牛は何とも哀愁を帯びた縋り付くような瞳をしている、そこに自分がいる時、心を覗かれた気がしてドッキリ。

じわじわとくる奥行きのある手紙

真島　久美子

だんだん読んでいくとやさしさの中に妙に説得力がある、メールで済ます時代にこんなお手紙頂きたいものである。

ボクと医者パソコンだけが繋いでる

上山　堅坊

実感である、目を見てくださいよ、顔見てくださいよ話聞いて下さいよ、そう叫びたくなる、温かい言葉で楽になるのです。

愛情に飢えて握手もハグもする

清水　久美子

握手もハグもしたくなる時自分が寂しくて人の体温が欲しい時だと気付きました。人はこんなに温かいのかと感じる。

曖昧でいいの正せば角が立つ

倉橋　悦子

白黒をはっきりつけたら誰かが傷がつく。生きてゆく処世術として必要な事であるが度を過ぎると信用をなくす。

ひと息に階段駆けた日は遠い

青木　隆子

若い日はいいなと振り返ってみてもどうにもならないけどついつい思いだす。

懐の大きい奴についてゆく

高森　一呑

本音である、でも時々誤算があるから人を見る目を磨いて見定めたいものだ。

褒め上手人を動かす苦労人

脇田　雅美

人の上に立つ者には必要な事だと思うそれにより出世に差がつくかも…。

お誘いがあれば行きます月旅行

田賀　八千代

令和の時代に実現するかも、私も仲間に入れてくださいね。夢のある句に心安らぐ気持ちになりました。

知恵袋叩いてみたらまだ出そう

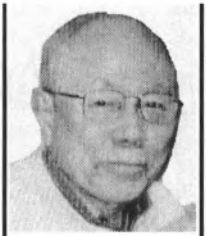
岡崎　美知江

好奇心をもって生きていればいい考えが浮かびすてきな川柳が出来ると信じる。

平凡な丸いお鼻に惚れました

大杉　敏夫

何かほのぼのとしたものを感じ優しい空気に包まれました。



追悼

さようなら升成　好さん

奥　時雄

本名　升成（ますなり）　好行（よしゆき）
平成三十一年三月十八日没　享年八十三

好さんの突然の訃報には本当に驚きました。それはそうでしょう、亡くなる五日前に「そうりゆう会」で会ったばかりなのですから。当日の朝、寝床で静かに息絶えていたという。好さんとは、かねて「死んだら互いの弔辞を」と約束していましたが、彼曰く「升成家は長寿の家系だからなあ、私が惚けないうちに間に合わせてよ」と笑わせていたのに。

何たることか、ショックだよ、好さん…。

好さんとは同じ会社でしたが、彼は経営トップの秘書を長く勤めていて、営業の私達は彼の原稿による「トップのご訓辞」を、長年に亘り真剣にメモっていたことになります。然し、彼はそれ故に身についた豊富な語彙や文章力が、のちの川柳に大いに役立ったであろうことは紛れもないことでしょう。

そうりゆう会からは多くの仲間が相前後して川柳塔に参加しましたが、好さんは群を抜いた実力で、忽ち各賞を受けてきています。

以下の句数は失礼ながら二句ずつとしました。

平成十六年川柳塔賞準賞
いける口ですなと猪口がにじり寄り
ゲーム機の手では飛ばない竹とんぼ
平成二十年路郎賞準賞
退屈の長さに足りぬ砂時計
問診のような母への長電話
平成二十九年椋賞準賞
ポケットに渦巻く青いアンビシャス

何れも準賞であることが好さんらしい。「その方が良いんだ」も半分は本音だと思う。とにかく謙譲の人だった。本社句会がタ方だったころ、投句を終えての食事でも、酒も料理も私に「同じもの」と言うばかりだった。

堺の句会が福祉会館だったころは帰りには立ち飲み屋によく寄ったものですね。このところ二人が行かなくなったせいか、堺銀座の路地の提灯も少なくなり何だか寂しげですよ。

あの頃がとても懐かしいね、好さん…。

ご本人もまさかだったのでしょう。好さんは亡くなられる直前まで川柳に心血を注いでおられたようです。

最後に畏友名残の句です。

平成三十一年三月七日　本社句会
野の花は凄い無肥料無農薬
育児書を閉じおおらかな子に育て
平成三十一年三月十二日　川柳塔さかい
運命の神の手帳を覗きたい
歳月に過去を許され助けられ
平成三十一年三月十三日　そうりゆう会
ささやかに生きる一人のゴミ袋
怒らしちゃ駄目じいちゃんはお金持ち
川柳塔四月号
消灯の闇に五感が眠らない
空と言う自由に雲の湧きやまず
川柳塔五月号（恰も辞世の句の如し）
犬かきで平均寿命泳ぎ切る
ふかふかの枯葉あしたの森になる

ご冥福を折りつつ、好さん、さようなら…

『麻生路郎読本』余滴 (52)

「石曽根民郎宛葉書」②

菜原道夫

「川柳しなの」は、昭和15年10月25日発行（通巻45号）を以て休刊し、昭和16年3月には廃刊を表明した。次の写真は、飯田市立中央図書館所蔵の「川柳しなの」昭和15年10月号の表紙である。

題字は、路郎。表紙版画は、「子守」関野準一郎。菊判（150×220㎜）で、本文12頁、蔵書票紹介4頁で計16頁。蔵書票とは、本の見返しに貼って、持ち主を明らかにする紙片で、石曽根民郎は蔵書票収集家としても知られていた。

10月号を発刊した時には、休刊するつもりはなかったようだ。というのは、12月号と1月号の募集をしていることから分かる。また、「川柳きやり」は「川柳しなの」の広告を昭和16年3月号まで掲載している。休刊中も広告を載せ、廃刊と決まって広告を止めたものだと思われる。

休刊した理由について、前回の「余滴」で筆者は用紙の割り当てが関わっているのではないかと記したが、「川柳しなの」通巻40号から45号までの頁数を見てみる。43号を除いて飯田市立中央図書館、43号は大阪大学総合図書館の調査による。

号数	本文	蔵書票紹介	計
40号	16	4	20頁
41号	22	4	26頁
42号	14	0	14頁
43号	8	2	10頁
44号	8	2	10頁
45号	12	4	16頁

休刊前年、昭和14年の「川柳しなの」の頁数を日本現代詩歌文学館に調査してもらったところ、通巻30号、32号が総頁16頁であったが、他は20頁から28頁であった。これを見ると、通巻42号から用紙の確保がいっそう困難になっていたことがうかがえる。

「川柳しなの」休刊前後の石曽根民郎の記事を「川柳雑誌」から拾ってみる。

「川柳雑誌」（昭和15年9月1日発行）の「柳界展望」に、〈▼石曾根民郎氏（不朽洞會員）は青年團員十九名と共に橿原神宮參拜後、廿三日來阪され、不朽洞來訪の豫定〉とあり、10月号「柳界展望」には、〈▼石曾根民郎氏（松本）は橿原神宮參拜後、廿三日來阪、不朽洞へ來訪される豫定であつたが一行中に病人が出來たため、橋本綠雨氏に迎送され僅に大阪の地を踏んだだけで直ちに歸松された〉とある。12月号の「川柳塔」欄に、民郎の次の三句が入選している。

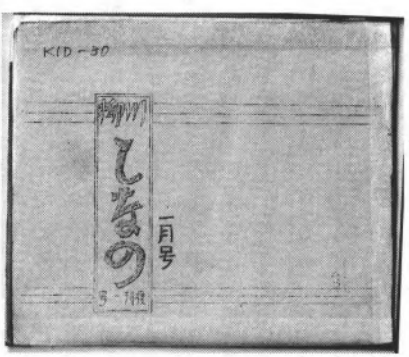
伊勢神宮にて
五十鈴川生き合ふひとの歩みなる
橿原神宮にて　二句
遠つ祖に額（ぬか）く旅を秋の晝（ひる）
無冠王君の案内

京に友あり名所こそ多すぎし

無冠王とは、京都の川柳人・大島無冠王（1901～1978）のこと。昭和5年、「紙魚」を改題して発刊された「川柳街」の同人で、昭和11年8月には「川柳同人社」を創設した。昭和初期から京都川柳界の中心人物であった。川柳塔同人・鴨谷瑠美子さんの御尊父である。

昭和16年4月号「昭和川柳」で、「川柳しなの」の廃刊を知った路郎の、民郎宛葉書の最後に、〈五月号へ何か書いてくれたまへ〉とあったので、「川柳雑誌」を調べたところ、6月号に「箒と盥に就て」という、俗信に関わるエッセイを寄せているが、「川柳しなの」の廃刊については触れていない。路郎も、「柳界展望」や「後記」で一切触れることはなかった。

昭和15年10月号を以て休刊した「川柳しなの」が、復刊したのは昭和21年1月である。下は、国会図書館所蔵の「川柳しなの」（昭和21年1月25日発行。通巻46号）の表紙である。152×120㎜で、菊判截判横綴り（152×106㎜）より、やや縦が長い。頁数は、全部で8頁に過ぎない。



「復刊のことば」を挙げておく。適宜ルビを振った。「／」は改行を示す。

〈川柳しなのは昭和十二年一月創刊 爾来地方／柳誌としては特異な編輯技術により大方の絶讃／を博しつ、昭和十五年十月を以て惜しくも一時休刊／の止むなきに至つた。／戦争終結の事実は日本の惨しき敗戦国の烙／印を押され片方では民主主義思想の擡頭／を勧奨せらるゝに當り、しなの川柳社もそ／の一翼として勇々しくも今回さゝやかながら／復刊一号を発行することになりました。／川柳は民衆の偽らざる聲なのだ。制約され／た詩情への感傷を豊かにうたひあげてゆきたいものだ。／昭和二十一年一月二十五日記〉

次に、「編輯室より」を挙げておく。

〈復刊第一号の／編輯に當り同人諸賢の／熱意と力とによつて雄々しく／もペンを取り、〝川柳しなの〟／の編輯に取りかゝつたが疎開／した印刷機の處理や工場の／問題に追われ意の如くなら／ず、決局一号は同人其他投句／せられた賢君の作句集と／して納めることにしました。／次号よりは内容を充實した／柳誌としてゆきたいと思ひます。／大方諸賢御援助をお願ひいたします。 民〉

戦前、菊判で出していた「川柳しなの」の復刊は小型の雑誌で、しかも印刷機も疎開していたので、孔版でのスタートだった。しかし、休刊を余儀なくされていた雑誌を復刊できたことに対する喜びと意気込みが感じられる。通巻50号（昭和21年5・6月合併号）から、菊半截判・活版の刊行で本文20頁。戦前の菊判に戻ったのは、通巻69号（昭和23年1月号）からで、18頁だった。「川柳しなの」は、平成17年9月号（通巻746号）を以て廃刊した。民郎は同年9月21日に亡くなった。

同人特集

平成を振り返る

（順不同）

私の平成

米澤俶子

平成の幕が開き元年に男女二人の孫に恵まれました。この孫達が成長しはじめた平成七年神戸淡路大震災があり、長女一家が被災、小学校が自衛隊の給水所になり休校になったため小学五年生と幼稚園児の孫を預かり、それぞれ地元の小学校、幼稚園にお世話になりました。なりふり構わず孫育てに明け暮れ、その後、孫達が親元へ帰ってからは、元の平穏な生活に戻り、水泳、フラダンス、習字、川柳などいろんな事に挑戦、とても充実した日を過ごして来ました。

平成十七年橘高薫風先生が突然ご逝去されNHKりんくう教室は河内天笑先生に引き継がれご指導を頂きましたがまもなく閉鎖となってしまいました。この哀しいときに相前後して母と妹が亡くなり心も折れておりました。そんな折、思いがけない平成十八年度路郎賞を戴き、いつも支え続けてくれた夫と共に一生の宝となりました。これを機に句集「花の下」も上梓することが出来ました。先生方ご先輩柳友にも恵まれ幸せの限りです。

その後不幸にも幾度の入退院を繰り返しましたがお陰様で現在に至っています。世間では災害の多い平成でありました。私の平成も起伏の多い時代でしたが現在は比較的健康に恵まれ日々感謝で過ごしています。昭和平成を生きやがて来る令和の御代に生きて行く身の上をこの上ない幸せと感じています。東京五輪まで一年余、日本選手の活躍をこの目で見られるよう頑張ります。

私の平成時代

片山かずお

昭和天皇崩御のためとは言え、娯楽を筆頭に、全てに対して過剰とも思えるほどの自粛ムードで始まった平成時代。

振り返ると、長野五輪やサッカーW杯の開催など明るいことがたくさんあった筈なのに、一般的には、阪神淡路大震災や東日本大震災など、自然災害が多かった時代と記憶されるのだろうか…。

翻って些末な私事になるが、私にとって平成は、川柳を始めた思い出深い時代

である。

平成19年、第二の職場の嘱託期間満了により、サラリーマン生活にピリオドを打つことになった。余裕ができる時間をどうするかで迷っていた時、新聞の文化欄の川柳句会の紹介記事に出会い「紙と鉛筆があればできる趣味」という言葉に惹かれた。何も分からぬまま「よし、川柳をやろう」と決めた。

川柳は「紙と鉛筆」だけでできるものではなくて、やはり「川柳センス」が必要。その上にある程度の「お金」も必要と分かったのは相当後になってからであった。

とにかく何も知らないので、新聞社に問い合わせたりして、高槻市在住の瀧本きよし氏（故人）の門を叩いた。

川柳は文芸。多くの人に読んでもらって共感してもらわなければならない。だから、普通の中学三年生なら知っている程度の易しい言葉で、川柳のことを全く知らない人が読んでも、その人たちの七割以上から「なるほどなあ！　そうやなあ！」と、共感してもらえる句を詠まなければいけないと教わった。

以来、その言葉を思い出しながら作句しているが「川柳センス不足」は如何ともし難く、苦難の道がつづいている。

でも、時代が平成から令和に変わるのだから、私も気分を一新させて、多くの人に「なるほどなあ！　そうやなあ！」と言ってもらえる句が作れるようにしたいと、気持ちだけは前向きにしている。

「もくせい句集」から　平成を振り返る

初代　正彦

豊中もくせい川柳会では令和元年六月中旬に会員合同句集Ⅶを発刊致します。当会は昭和五十九年橘高薫風先生ご指導の下に発足しましたので、ほとんど平成と共に歩み今日に至っております。本稿では五年毎に発刊の句集から時の様子を覗いてみたいと思います。

○先ずは句集Ⅰ（平成元年六月）から

アルバムに明治の笑う顔がない
橘高　薫風

ジャンボくじさて平成へ運だめし
額田　明吉

産声高く生まれし孫へ消費税
村上とく子

当時の句は昭和の香りがいっぱいです。平成元年7月、消費税（3％）スタート。

○句集Ⅱ（平成六年六月）

銭湯がある下町に住み慣れる
黒川　紫香

平和の世 新成人は華やかに
並木三千男

平成三年にバブル経済崩壊を経験しましたが、庶民は明日をみて暮らしていたのでしょう。

○句集Ⅲ（平成十一年六月）

風花の神戸 地獄の底に立つ
橘高　薫風

震災が神戸の歴史塗り替える
住谷　石舟

不況風が骨に染み入る年の暮れ
阿萬　萬的

平成七年一月十七日発生の阪神淡路大地震が今も脳裏を過ります。平成九年四月には消費税5％、当時はまさに平成不況。

○句集Ⅳ　（平成十六年六月）

報復にテロの連鎖はどこまでも　源田　啓生

春寒し戦争だけは止めといて　安藤寿美子

小泉丸どう進むのや呆けられず　中内久太郎

平成十三年は、四月に小泉純一郎内閣成立。九月にアメリカ同時多発テロ発生。

○句集Ⅴ　（平成二十一年六月）

赴任地にやっと慣れたと子のメール　上村　隆

シナリオに書いてなかった認知症　谷川　勇治

電子メールは平成十年以前でも企業業務ではかなり普及していたと思いますが、個人の携帯メールが普及し始めたのは間違いなく平成十年以降、スマホは二十年以降でしょう。一方、認知症がこの頃から世間の関心事。

○句集Ⅵ　（平成二十六年六月）

原発事故地獄の蓋をこじ開ける　上山　堅坊

被災地を想いながらも飲んでいる　江島谷勝弘

振り向かれ監視カメラが狼狽える　島田千鶴子

○句集Ⅶ　（令和元年六月）

七十年ずっと平和でいた日本　江見　見清

いよいよ五月から令和に入っています。どのような時代になるのか、人生を愉しみながら少しでも長い間じっくり見届けようと念じています。

十八代目　中村勘三郎

乗原道夫

歌舞伎は平成になった頃から観るようになったが、たまに勘三郎（昭和30年5月30日生まれ。筆者より1歳上。当時は、勘九郎だったが勘三郎と記す）を観る機会があっても、調子を張ったときなど、声の甲高いのが耳障りで、少しあざといなと思っていた。それが平成10年3月、東京・歌舞伎座での「通し狂言　仮名手本忠臣蔵」を観て、感動したのである。このときは、塩冶判官と七役目「祇園一力茶屋の場」での寺岡平右衛門をつとめた。「忠臣蔵」で勘三郎の持ち役といえば、塩冶判官と早野勘平だったが、初役の平右衛門がよかったのである。平右衛門は夫勘平のために祇園に身を売ったお軽の兄。甲高い声も出さず、お軽役の坂東玉三郎との息もぴったり合って、平右衛門の朴訥で実直な人柄が充分に伝わってきた。以来、勘三郎の芝居は、来阪したときには可能な限り観ることにした。当時の東京・歌舞伎座8月興行は、勘三郎が座頭の若手中心の芝居だったが、それにも頻繁に足を運んだものだ。

勘三郎は、アドリブも利き、喜劇でもその実力を発揮した。平成9年、東京・新橋演舞場で初演された「浅草慕情」が翌年には「浅草パラダイス」として上演され、おもしろい芝居だと耳にはしていたが、観る機会がなかった。その「浅草パラダイス」が、平成12年3月に大阪・松竹座にやってきたのである。昭和初期の浅草が舞台。勘三郎演ずる芸人の女房が藤山直美。勘三郎の相方が柄本明。酌婦として福島から女衒に連れられてきた

寺島しのぶの面倒を勘三郎と柄本明が見ることになり、直美は気が気でない。他に旅一座の女座長　渡辺えり子（現・えり）と若い座員の中村七之助との恋模様等々。三幕3時間半の長い芝居であったが、あっという間の3時間半だった。直美は父（寛美）譲りのアドリブの達者な役者である。その直美のアドリブに渡り合える役者をそれまで見たことがなかったが、勘三郎は、直美の放つアドリブをきっちりと受けて、それ以上のアドリブで返すのである。そこに瓢々とした柄本明か絡むのだからおもしろくないわけがない。もう一度観たいと思い、チケット屋へ走ったことを思い出す。同じ芝居を2回も観だのは、後にも先にもこのときだけである。

勘三郎は、この平成12年11月に東京・浅草で、「平成中村座」を立ち上げて以来、大阪・ニューヨークなどでも公演を打ち、どれも大入り満員を続けた。1年のうち1箇月だけ休暇をとったが、その間も頭の中にあるのは芝居のことばかりであったという。

平成17年3月、十八代目襲名後も日本を代表する役者の1人として活動し続けた。疲労が蓄積したせいであろう、平成23年1月から突発性難聴で療養した。完治していない状態で、1箇月の復帰公演を9月、大阪・新歌舞伎座で行う。私が最後に観た勘三郎の舞台となった。

平成24年5月30日、誕生日の日に食道癌が見つかり、同年12月5日、急性呼吸窮迫症候群で勘三郎は57歳で死去した。

私にとっての平成

澤井敏治

命令の令まず思た昭和の子

（朝日川柳4月3日掲載）

私にとっての平成は、昭和64年1月1日付の転勤辞令に始まった。役員の名は付くものの子会社への出向命令であった。まさに人生の三コマ目から四コマ目への転換期の始まりである。

今回の令和という新元号を耳にしたとき、瞬時にイメージしたのが冒頭の川柳であった。

当時の勤務地富山での業務整理・挨拶回りを終えた七日の朝、昭和天皇の崩御そして一月八日からの踰日改元「平成」をニュースが報じた。

新しい職場での平成は、まだ3％だったものの消費税の始まりである。それぐらいはサービスできんのか、苦労させられたものであった。

35810真綿で首を締めに来る

世界的にはバブル崩壊・同時テロ・自国主義、日本では阪神東北熊本ほかの大地震等々、最近は負の時代とも感じるようになった。それは、わが身の加齢と重なるからであろうか。

さて、四コマ目とも思う平成も、捨てたものではなかった。

息子三人の結婚、平成十年の初孫以来計六人の孫、親父からお爺ちゃんへ昇格したのである。ついに昨年、中二の孫に身長は抜かされたものの。

充実した（本人だけはそう思っている）老後を過ごせているのは、何と言っても平成十九年の川柳との出会いである。路郎師薫風師水府師の名前さえ知らない。

聞くこと読むことすべてが勉強だった。指を折っていてピチャッと叩かれて、「体でリズムを感じなさい」と。七十歳の手習いには厳しい指導だった。独りよがりはアカン。川柳を知らない読み手でも思わず膝ポンという一読明解を畳み込まれた。「生きている」から「生かされている喜び感謝」を、本音として詠めるようになった。

継続は力　毎日酒を飲む

年下の私に比べ遥かにお元気な天皇。司法まで、行政に忖度するかのような時代、その中で生前退位の勇気ある決断をされた天皇。今もなお披災地を見まわれる両陛下に、戦争の無かった三十年と共に、感謝と賛美を贈りたい。

平成へのオマージュ

山岡　冨美子

光と陰はいつの時代であろうが歴史の表裏である。

平成がカウントダウンを迎えようとするいま、過去の阪神淡路大震災、地下鉄サリン、そして米国の同時多発テロ等、類を見ない恐怖と、その半面、バブル期の異常な繁栄は、その後の崩落と併せ、激しい落差が私達の暮らしを揺さぶった。

時代の変化はまた、地球の裏側の事案を今や他人事にはしてくれないのである。

頭脳労働はＡＩに取って代わり、ブラックホールまで鮮やかに認定してしまう時代。恵まれた時代か、幸せかは別として。

そしていま私達はもうすでに多くの人も物も見送ってしまった。

密なご近所付き合いの頃のチンコロ姉ちゃんや、サザエさん。時代を華やかに彩ったモンローや裕次郎。そして元号は改まって令和へ。

天皇・皇后両陛下の生前御退位という、ドラスティックな歴史を目の辺りにするのである。

取り敢えずの募らしに変化はなくとも、時代の潮流に晒されて文芸作品の潮目も当然変化してゆくのであろう。

老いのハンモックで昼寝を貪っているときではないのである。

時代を生きる母

尾崎　一子

私は昭和一八年生まれ。小学校一年生の時、父が手をとって私の名「たむらかずこ」と書きました。「名前は上手に書けよ、勉強を習え」とゴツゴツした手の温もりを今も思い出します。母は昼夜働いておりました。横座に座る父は偉い人に思えました。

祖母は「子に手を上げるな、腹が立ったらうちにあたれ」「子に内輪もめを見せるな、子が真似る」と母に教え、母は祖母を尊敬しておりました。

私が嫁ぐ日、父から「美しくなったな」とひとこと。涙ぐんでいました。そして母は「人と比べないで、しっかり家を守りなさい。腹が立ったら明日言いなさい」と送りだしてくれました。

私も母になり子供には癖字にならぬうちにと、鉛筆の持ち方から目を配りました。名前は自分の顔だと教えました。サインは生涯自筆。明治・昭和・平成を繋

いできた父も母も義母も戦争を知る人、清貧の言葉そのものの人でした。

妻は内助の昭和から男女平等、女性が社会進出する時代となりました。少子化、共働き、非婚の波が押し寄せた平成。そして相次いだ事故、災害の数々。

震災の絆繋いでいる灯り

昭和から平成、女性の生き方も大きく変わってきました。共稼ぎ、未婚、子沢山から少子化、保育園が立ち並び、ゼロ歳から保育、学童保育。家族と過す時間が短縮してきました。

抱きしめる母の両手を待つ園児

折りあれば嫁姑がお互いに生きた時代を語り合い、慈しむ母性豊かな心を次代へ繋いで欲しいと念じています。

入選句で振り返る

内藤憲彦

定年日賞味期限と違います
空の虹楽しんじゃえと言っている

平成20年の定年を機に川柳・太極拳を始めた。令和でも頑張らなくちゃ、楽しまなくっちゃと思っている。

イチローのバットに宿る不動心
三回転真央ちゃん真似てさくら舞う

血のにじむ努力があってこその神業である。卓球、将棋など平成の若手が何喰わぬ顔で繰り出す神業も陰では・・・。

すぐ喜ぶ両親が居る三世代
やっと言えた産んでもらってありがとう

大正昭和平成を生き、父は昨年九十八歳で逝った。曽孫3人は見せられたが、令和までは無理だった。

明日また反省会で酒飲める
ロボットが僕の仕事を引き継いだ

パワハラ・セクハラ何のその、仲間と一緒にバブルを楽しみ、リーマンショックで苦しんだ。今はＡＩが宿敵らしい。

文明の自惚れ正す地下マグマ
義援金みんなひとりじゃないと知る

地震台風テロ病魔など残念な平成も、何とかかんとか駆け抜けた。でも安心安全を誇る日本で「偽装」は最悪だ。

ご慈愛の笑顔がステキ両陛下
子ども達ごらんよあれが真珠湾

お疲れ様でした両陛下。戦争に巻き込まれなかった平成。これからも戦争を知らない子供たちでいて欲しいですよね。

ゴミ箱を蹴るタイガース二連敗
優勝は来年で良いタイガース

心残りは、平成のリーグ優勝は巨人12回阪神2回。何んと日本一は巨人6回阪神0回。令和元年は阪神が日本一だ。

転んでからの杖

大久保眞澄

時の小渕官房長官が「平成」という額を掲げた頃、癌が再発した父と、長く心臓を患い、入院中の母を、二人とも仕事を持つ私と姉が抱え込んでいた。

父は一ヵ月後の二月六日に逝き、母はその二年後の四月に旅立った。ドサクサ

に紛れて「私の平成」は始まった。

その平成もあと一カ月となった四月三日夕方六時過ぎ、夕食の用意をと立った時、家中の灯りが消えた。今時停電？子供の頃は良く原因不明の停電があったものだが…。

周辺を見回すと停電はどうもウチだけらしい。夫がブレーカーを調べ、大方は通電できるが、リビングの照明器具のスイッチを入れると家中のブレーカーが落ちることが分かった。漏電である。その器具を夫がはずし、下で受け取った私の肩にぽとり、水がかかった。我が家はマンションの一階、これは上階で水漏れが起きている。ならばこれだけで済む筈がない。まずはバケツだ…。

天井をくまなく調べると、天井のクロスの一部が溜まった水で大きく膨らんでいた。ドバッときてはたまらない。クロスに切り目を入れて水を抜く事にした。雨漏りの如く、バケツや洗面器を持って右往左往する始末。上階を訪れ、水漏れを見てもらったが、そういう形跡はない。ならば床下の配管が問題なのだ。

翌日、業者さんが一日がかりで上階の修理を終えてくださった。が、我が家は三日間雨漏りの如く水を受け、灯りをつけることができず、暗いリビングで過ごした。

無事復旧したはずの冷蔵庫が異常音を発し、氷が作れず、夫のパソコンはブレーカーが落ちた時、バッテリーが機能しなかったことで、どちらも不具合が顕在化した。思わぬ出費だったが、気付いていなかった故障がわかったのは、不幸中の幸いである。

私はこのドタバタ騒ぎで、坐骨神経痛が悪化して、歩行困難に陥っている。不幸中の不幸である。

かくして、転んでからの杖を持ち、何とか外出したいとの思いで、坐骨神経痛との闘いの日々が続く中、「私の平成」は終わろうとしている。

そして令和へ

木本朱夏

昭和63年の秋、私はラジオの音楽番組のディスクジョッキーを担当していた。全くの素人が生番組の一時間ぶっつけ本番。若かったとはいえ余りにも無謀。たとえローカル局とはいえ私を起用した放送局も勇気があったと思う。

番組の中のニュースで病気療養中の天皇様の体温、血圧などが毎回主治医から発表された。「ゲケツ」という耳慣れない言葉を聞いたのはその時。「下血」と書くことを知った。

昭和64年1月7日早朝、昭和天皇崩御。「カブオンギョク」は自粛。私の放送も休みになった。カブオンギョク、歌舞音曲（歌ったり踊ったり、鳴りもの一切）である。その夜、繁華街を歩いた。普段なら正月の流れで賑わう街に人の姿は無く、開店している店も息を潜めているようであった。私の昭和の終りはモノクロの絵の底に音もなく沈んでいた。

平成の荒ぶる年の長刀鉾　薫風

平成12年、西暦2000年はミレニアム（千年紀）ということで世の中は湧き返っていた。ある識者が唱えた新世紀には「エゴ（エゴ・対立・競走）からエヴ

ア（愛・調和・互恵）の時代が始まり人類は皆幸せになる」との説に、私は大きな希望を抱いたのだが・・・。

顧みて平成は人皆幸せな時代であったか。「へいせい」というやさしい語感に似合わず災害・事故・事件の多い年だった。格差が広がり弱者や子どもたちには受難の時代だった。日本に戦争はなかったが、地球上のあちこちに戦火は絶えなかった。

反面医学の進歩により寿命はどんどん延びている。百歳が珍しくない時代。しかし出生率は低下。世の中がどれだけ進歩しようが、少子高齢の波に抗う術はなく日本の将来に明るさが見えない。

おばあさんばかりで枢担げない

谷口義さんの句だが、こんな時代が来ないことを祈りたい。

平成から令和へカウントダウンや花火、夜を徹しての踊り、大震災から見事に立ち直った神戸の街を山車が練り歩き、文字通りのお祭り騒ぎで令和は始まった。

粛々と身を慎んで過した昭和から平成へのあの日。少なくとも今より30年は若かった時代を懐かしく思うのは、私も充分老いたということであろう。

平成後半を川柳で生きる

江島谷　勝弘

平成十六年（２００４年）三月、四十年間勤めた大阪市交通局（現大阪メトロ）を定年退職した。現役時、「川柳大阪」の句報は毎月手にしていたが、川柳を作ったことは一度もなかった。

一年後の平成十七年四月に、橘高薫風師が亡くなったことを新聞紙上で知ったことを何故か覚えている。その年の十一月に、私の人生の師、川端一歩さんのお誘いで「あかつき川柳会」に初出席。初めての入選句は番傘の碓氷祥昭さんの選であった。

翌年には「川柳大阪」「南大阪」「城北」句会に初出席。平成十八年十月には川柳塔の誌友となり、「水煙抄」に初投句。十一月には本社句会に初出席。平成十九年十月には一歩さんと大内朝子さんに推薦して頂き同人なった。それから川柳とのたたかいが始まったのである。

現在は、月に八ヶ所の句会と、川柳塔編集部と川柳塔の発送に四、五日は事務所に通っている。ひと月の約半分は川柳三昧が続いているので、私のおくさまは、川柳川柳と元気でいるからしゃあないなと諦めながらも、半分はプリプリしていると思う。

あれから十三年、川柳は上手になったかと言えば、柳友から見れば下手であると思う。真面目な句は作れず。抒情的な句も作れず。少し乱暴で自虐的な句しか作れないでいるが、それなりに入選するので、自己満足に浸っていたが、本年の一月と四月の本社句会で全没に遭ってしまった。完司さん流に言えば。二ヶ月の重症を負ったことになる。でも、メゲずに〝一読明解・リズム〟のある句を目指していきたいと思う今日この頃である。

令和

102

平成元年をしのぶ

この6月号への投句締め切りは4月15日必着でしたので、新元号の「令和」を詠った句が沢山載っていることでしょう。皆さんがどのように感じられたのか今から楽しみです。

では、「平成元年」が発表されたときに、当時の同人はどのような句を残しているのでしょうか？　気になりましたので電子化された塔誌742号（平成元年3月号）を開いてみました。

このようなときに電子化されたバックナンバーは威力を発揮するものだと、改めて有り難く思いました。（※）

平成元年その朝も髭剃っている　小島　蘭幸
平成元年きのうと同じ靴を履く　西山　幸
平成元年昭和のままの野良着着る　天満三千代
平成元年派手に茶碗の割れる音　福本　英子
平成元年富士は雲間を見えかくれ　大塚　節子
平成元年うちの息子が満はたち　奥田美智子
平成元年早く馴れぬと先がない　永田　俊子

元号が変わっても庶民の生活には何の変化もなく、いつもの朝と同じように髭を剃っています。また、靴も作業着も新調したものではなく、「昭和」に身に付けていたものばかり。このように、日常の暮らしは特別に変わったこともなく、アクシデントと言えば茶碗が割れたことぐらいです。

平成元年に「早く馴れぬと先がない」等と気の弱い句を出され永田俊子さんは平成5年に路郎賞を受賞。平成26年に102歳で他界されましたが、その直前まで投句を続けられました。

平成の世へ退院をしたいのち　高杉　鬼遊
平成に余生をかける火を燃やす　春城武庫坊
平成に変えて秒針事もなげ　若宮　武雄
平成に変わる舞台の裏を見た　菅井とも子
平成の句始めいざよい会へ行く　藤田頂留子
平成の幕明け粛と満員車　竹内　紫錆
平成がどうあれ無休の発車ベル　井上　喜酔

昭和には入院していたが、めでたく「平成の世へ退院」してきたいのち。「さあ、元号も新しくなったことだし、これからの余生に命の火を！」と詠われた鬼遊さんと武庫坊さん。大先輩お二人のご温顔が作品と共に甦ってきます。

このように、時代の節目を詠った句は、「自分史」を超えて、大きな流れの中のヒトコマとして面白い趣があります。

幸福哉平成元年初登山　福井　桂香
平成の朝も哀しい涙雨　都里　遊光
平成も疑惑は消えぬリクルート　田中　正坊
平成に棚上げされたリクルート　松尾柳右子
平成元年　初心にかえり詩探る　藤井　明朗
平成の文字嘴へ輪の如し　大矢　十朗
過去は過去平成と大書して　山内　静水

正坊さんは敏腕編集長で知られていました。私も「同志と同士の違い」を指摘されたことがあります。また、静水さんの良く通る独特の呼名は今も耳にしっかり残っています。

（※）電子化本の閲覧は、「川柳塔」で検索して、サイト・トップの「川柳塔電子化事業」をクリックしてください。

川柳塔WEB句会　兼題「ラジオ」

＊平抜きは到着順
＊webサイトと内容に齟齬がある場合、webサイトが正

4月例会入選句　投句数372句（188名）なかはられいこ　川上大輪　共選

なかはられいこ 選

天丼を味わいながら聴くラジオ　甘酢あんかけ
踏ん切りをつけラジオ体操第二　雨　径
ラジオだから見えないことと浮かぶこと　三好　光明
ラジオにもマイナンバーの周波数　岩崎　誠治
秀才のラジオ体操揃わない　ホッと射て
大部屋で肩寄せ合っているラジオ　板垣　孝志
ラジオから春の匂いが溢れ出す　やっこ
ゆっくりと考えたい日ラジオ聞く　やっこ
欅とはラジオ体操だけの仲　米山明日歌
病棟の深夜ラジオが痛み止め　多川　義一
「ラジオがゆうてた」と母は譲らない　平井美智子
４コーナー曲がり短波は大揺れ　海賊　芳山
株式市況祖母はモダンなひとでした　美馬りゅうこ
何処からかラジオ聞こえる千枚田　平尾　定昭
一本の糸で繋がる深夜便　上田ひとみ
星月夜ラジオポッケに聞く演歌　葱　坊　主
朝ラジオ昼もラジオで夜ラジオ　A　2
真夜中になると元気のでるラジオ　田村ひろ子
そのうちに会いましょうねというラジオ　田村ひろ子
ラジオ体操白い浮き雲青い空　春川　秋男
ハングルが電波に乗って攻めて来る　栂瀬みちを
深夜、ラジオでつながっている荒野　秘まんぢ
ラジオから声がしたので返事した　涅槃ｇｉｒｌ
靴ぬいできちんとラジオ歌ってる　サトシワタナベ
返事してもいいしなくてもいいラジオ　サトシワタナベ
鳴っているラジオポッンと一軒家　ま　さ　と
叱られるほうに向けてる周波数　まみどり
25時表記のラジオ番組表　高田　桂子
好きな曲かかるとラジオ見てしまう　たごまる子
雑音も混じる故郷の周波数　光畑　勝弘
細胞がラジオ体操覚えてる　黒　し　ま
FMが追い越してゆく更年期　秋　鹿　町
佳５　コミュニティ放送局はいつも空　森山　文切
佳４　おばちゃんはラジオネームを持っている　西山　竹里
佳３　針しごと寄り添うようにいるラジオ　坪井　新
佳２　金魚飼ってますラジオも聞いてます　居谷真理子
佳１　雨の音だけが聞こえてくるラジオ　平井美智子
人　卍固めかけてくラジオ深夜便　海賊　芳山
地　ラジオってとんぼのにおいしませんか　尾崎　良仁
天　周波数あわせる時に混ざる海　エノモトユミ

川上　大輪 選

ハンドルがニヤリと笑うカーラジオ　大木雅彦
雑音がラジオ消しても続いてる　荘子　隆
ラジオ局わざわざ選ぶ美人アナ　横山園治郎
沈黙が怖くてつけているラジオ　渡辺　勇三
雷が聴きたい曲の邪魔をする　龍　せ　ん
正座してラジオを聴いた幼き日　武良　銀茶
ドキドキとラジオの前で立てる耳　みぢんこ
聴くうちに眠れなくなる深夜便　みぢんこ
声に惚れ自分好みの顔浮かべ　三好　光明
ラジオにもマイナンバーの周波数　岩崎　誠治
深夜ならテレビに勝てそうなラジオ　岩崎　誠治
温もりが欲しくて添い寝するラジオ　山本　進
山道の熊避けラジオつけたまま　ホッと射て
ひょっとして叩いてごらんこのラジオ　里山　水月
ラジオは無機質ニイタカヤマノボレ　板垣　孝志
欅とはラジオ体操だけの仲　米山明日歌
国民の耳を奪った終戦日　冬　子
４コーナー曲がり短波は大揺れ　海賊　芳山
ホームランのようにフライを言うラジオ　坂本　星雨
一本の糸で繋がる深夜便　上田ひとみ
読まれると信じ今宵もラジオ聴く　寺井　一也
金魚飼ってますラジオも聞いてます　居谷真理子
ラジオってとんぼのにおいしませんか　尾崎　良仁
ラジオから声がしたので返事した　涅槃ｇｉｒｌ
公園のラジオ体操子が手本　西上　遊二
叱られるほうに向けてる周波数　まみどり
玉音から続く平和のありがたさ　伊藤　良一
エンジンをかけると喋り出すラジオ　村上佳津代
目を閉じて猫がラジオを聴いている　原　徳利
悩み相談ボリュウーム上げて聴くトマト　徳重美恵子
剪定の枝のラジオに青江三奈　アズスン安須
たけのこは割れたラジオが鳴ったまま　斎藤　秀雄
佳５　「ラジオがゆうてた」と母は譲らない　平井美智子
佳４　周波数合わないままに切るラジオ　西　鎮
佳３　ピ-ピ-ガーガ何か怒っていたラジオ　岩根彰子
佳２　感度いい提灯鮟鱇のラジオ　森山　盛桜
佳１　平壌も北京も近くなるラジオ　藤田　武人
人　おばちゃんはラジオネームを持っている　西山　竹里
地　手作りのラジオが英語しゃべった日　石川　柳寿
天　周波数あわせる時に混ざる海　エノモトユミ

投句方法　【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック
senryutou.net　（サイト管理　森山文切）

（投句205名）

令和という新元号への移行を、大騒ぎしているマスコミ、そして無理矢理取らされた感のある十連休のしんどさをアホらしく思っていたのは私だけだったのでしょうか。

なんてアレコレぼやいているうち日々だけは刻々と過ぎて行きます。

川柳の世界もレイワ、レイワの句が氾濫し、お目出たムード満載ですね。

それでは、レイワ初のナビでーす。

大阪市　若本　安代

いま気付く君が四ツ葉のクローバー

（評）青い鳥は自分のすぐ傍に居た、の心境でしょうか。大切な存在を探す時は一番近い所からですね。

唐津市　仁部　四郎

だれにでも花の便りを待つ権利

（評）権利を駆使し、行動を起こすのは難しいこと。しかし、待つという一見消極的な行為は意外と強力にも思えます。

香芝市　大内　朝子

幸せなひとに意地悪したくなる

（評）いわゆる「嫉妬」という感情は、もっとも厄介なものらしいです。でも、だからこそ人間でもあるのですが。

神戸市　能勢　利子

花ふぶき浴びて百歳鬼ごっこ

（評）人生百年、この言葉も耳慣れてきました。どうせなら表舞台で少しでも長く活躍したいものです。

笠岡市　藤井　智史

好きなことできる幸せではないか

（評）その通り、こんな幸せはないでしょう。ただ、自己責任はきっちり取らねばなりませんね。

橿原市　居谷真理子

細雪よりも若草物語

（評）姉妹の物語でも、和ものと洋もので随分違いアリ。ただし、見る方の歳によって面白味も動きます。

富田林市　山野　寿之

自分史の所所に赤い花

（評）幸せ、それとも成功の証の赤い花でしょうか。それが所所にある自分史なんて素晴らしい。

河内長野市　穂口　正子

白髪染やめて素敵な帽子買う

（評）流行りのグレーヘアーですね。そんな女性は何だかとっても知的に見えるし、またお洒落も上手いです。

弘前市　稲見　則彦

来る来ない来る来ないホラ来る来ない

（評）花占いを連想するけど、そうでないかも知れません。でも、占いめいたことをする時ってちょっと弱気かも。

防府市　坂本　加代

幸せを押し花にして閉じ込める

（評）こんな瑞々しい感性を今も持ってらっしゃるのに感動です。時々それを取り出せばいつも幸せですもの。

岡山市　大石　洋子

あなたさえ黙っていればすんだのに

大阪市　岩崎　玲子

雑草は賢く強く迷いなし

神戸市　山口　光久

そのうちにどうにかなると風を待つ

大阪市　石橋　直子

黄身二つ得したような朝の膳

丹波篠山市　河南　利尚

熨斗つけて入れ替えしたいものがある

松山市　宮尾みのり

振ったのはあなた振られたのはわたし

米子市　八木　千代

恋すてふどうぞ噂にならぬよう

大阪市　笠嶋　恵美

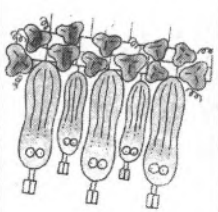
しっかりと書いておきたい遺言書

四條畷市　吉岡　修

宝塚突破菫の花に酔う

三原市　笹重　耕三
油断するとシミそばかすに狙われる
大阪市　古今堂蕉子
十年後の自分に手紙書きました
弘前市　福士　慕情
ひとりぼっちじゃ淋しいよ僕の春
藤井寺市　鈴木いさお
失礼なもみじマークじゃありません
佐賀市　真島久美子
サヨナラは付箋に書いておきました
尼崎市　近兼　敦子
もうちょっと待って心の準備中
門真市　坂本　星雨
幸せを探していつも遠回り
箕面市　出口セツ子
宗教も国の違いも越えて和す
南あわじ市　萩原　狸月
みよちゃんに白詰草の首かざり
神戸市　冨永　恭子
春というベッド私を甘やかす
豊中市　水野　黒兎
太宰府へ移住を決めた梅の花
和歌山市　まつもともこ
みつけてネわたしはいつもここにいる
千葉市　海老池　洋
万歩計明日咲く花を知っている
寝屋川市　森　茜
言い切って淋しい春にしてしまう
大阪市　江島谷勝弘
ひょっとして当たる気がする宝くじ
鳥取市　夏目　一粋
石が岩にはなりません石は石
塩竈市　木田比呂朗
正札は表向き値引きもします
池田市　太田　省三
自我発露うそを覚えた幼少期
和歌山市　上田　紀子
伸びしろはまだある天を志す
朝霞市　前田　洋子
幸せへ売約済をはりました
熊本市　杉野　羅天
思い出はやはりぼんやり色がよい
和歌山市　武本　碧
愛という不確かなもの信じ込む
岡山県　小野美那子
今の世に似合わないのよラブレター
大阪府　髙木　道子
丁寧なお辞儀かえされ立ちつくす
鳥取県　斉尾くにこ
しあわせは順送り次はわたくし
弘前市　髙瀬　霜石
生老病死ただいま僕は第3部
沖縄県　森山　文切
幸せになったひとりぼっちになった
岸和田市　宮野みつ江
傷ついたハートに貼ったキズテープ
大阪市　藤田　武人
ヒラヒラと扇と舞ったお立ち台
羽曳野市　徳山みつこ
いつまでも待つワ貴方のお便りを
三田市　多田　雅尚
パックした顔では誰か気付かない
箕面市　広島　巴子
草原で大の字になり夢を追う
奈良県　中堀　優
やっと出た命引き継ぐ芽を育て
大阪府　米澤　俶子
菜の花が咲いたと蜜蜂にメール
三田市　堀　正和
追伸が三行になる頼みごと
富田林市　片岡智恵子
ほどほどの刺激求めている米寿
神戸市　山崎　武彦
懲りた筈それでも続く再稼働
犬山市　金子美千代
束の間の幸せだった人魚姫
奈良県　長谷川崇明
勝負服下に残したエレキバン
東京都　川本真理子
摘まないでおこう四葉のクローバー
大阪市　坂　裕之
一片が散って時代が移り行く

8月号発表
(6月15日締切)



(平本　勝彦　画)
柳筥に2句

本社五月句会

◇五月七日（火）午後一時
アウィーナ大阪

十連休の余韻冷めやらぬ七日、本社句会は百三十二名（内投句者六名）の参加で開催された。初出席は西澤司郎さん（吹田市）。句会に先立ち、過日亡くなられた同人、島田誠一さん（茨木市）に黙祷を捧げた。

今月のお話は鈴木いさおさん。題は「川柳塔誌でふり返る平成」。平成元年から三十一年四月までの世界の主な出来事と、各年の新同人（抜粋）、活躍されながら惜しくも逝去された同人（抜粋）の方々、路郎賞受賞者の紹介に加え、いさお選のその年々の代表句四句を年表式に纏められた。一時間半はかかろうかというお話を端折って、とのことだったが、エピソードも交えた楽しいお話は平成二十四年をもって時間切れとなった。自慢の喉が聞けなかったことは、会場はもちろん、ご本人にとっても心残りデシタ。（眞澄）

月間賞は小野雅美さん（大阪市）

（司会―真理子・隆彦）（脇取―美智子・まつお）（受付―裕之・雅美）（懸垂幕墨書―耕治）（清記―憲彦・勝弘）

席題「着　く」　出口セツ子　選

テロ地から無事の便りが着き安堵　坂上　淳司
ブジツイタ地球の裏の弾む声　山田　耕治
母の味そのまま届くクール便　山下　純子
五分早く着いて事故には遭わなんだ　松尾美智代
着信を純烈にして弾む祖母　水野　黒兎
下駄履きの着任だった終戦後　前　たもつ
万歳で送られ英霊が戻る　山崎　武彦
終着をつけずのらりくらりと生きている　敏森　廣光
弾道弾が着くかも不安あおられる　森　廣子
蹲いて転んでたどり着いた椅子　鈴木　かこ
ゆったりと浄土へ着いた花いかだ　渡辺　富子
地に足を着けて歩めと父の檄　永田　紀恵
行き着いたところに待っていた破産　中島　一彌
五年越しあなたの胸にたどり着く　鈴木　かこ
休み明けどっと着いたは請求書　堀　正和
ノルウェーから脂の乗った鯖が着く　藤井　宏造
子と孫の到着を待つおでん鍋　柿花　和夫
月世界夢でとっくに着いてます　榎本　舞夢
着信音変えて別れを繰り返す　平井美智子
父からの男結びで着く荷物　山野　寿之
胸の差でテープを切った金メダル　澤井　敏治
千鳥足記憶飛んでも辿り着く　中島　一彌
飛行機が火達磨になって着地する　川端　一歩
オーバーラン海に突っ込み大騒ぎ　黒岩　靖博
母の日に届いたバラの着払い　細川　花門
釘煮着く姉も達者でいるらしい　鈴木いさお
百歳へ辿り着くまでスクワット　村上　直樹
楢山についたら鬼が待っていた　和気　慶一
褒められてまたもピエロの席に着く　伊達　郁夫
うららかに母の着信宙へ舞う　渡辺　富子
童謡は母の海へと辿り着く　久保田千代
ワンランク下げて幸せ辿り着く　小野　雅美
五十年着かず離れずして平和　大内　朝子
不時着は言葉の森の奥の奥　平井美智子
被災地に一番乗りのボランティア　三宅　保州
不時着をしました妻のてのひらに　小島　蘭幸
落ち着いたら知らせとそっと金包み　長高　俊雄

佳

メールから君のハートでやけどする　飛永ふりこ
平均点の人生までは辿り着く　石田　隆彦
真っ先にネコが着席した法事　大久保眞澄
着々と辺野古の基地の土砂埋める　前田　紀雄
キャッシュレス三途の川の船着き場　長谷川崇明

人

流れ着いた町で仮面を付け替える　木本　朱夏

地

新札のたどり着く世はキャッシュレス　岸田　万彩

天

平和を守る第9条にたどり着く　内藤　憲彦

軸

月の地を踏むまで長生きするつもり

兼題「絵」　山崎武彦選

母さんにほめられたくて描きました　上田ひとみ
赤富士の向うに謎が秘めてある　川端一歩
子に絵本読んでる母が寝てしまう　斎藤隆浩
絵手紙にトマトの香りのせて初夏　山下純子
絵に描いた餅だが話乗ってやる　岩佐ダン吉
猫百態まだ三匹しか画けぬ　宮崎シマ子
受けた恩忘れず奮起する余生　渡辺富子
絵に描いた花のようです新天皇　田中廣子
巡る春スローライフの絵を描こう　中川ひろ介
ゲルニカの前で誰しもなる真顔　澤井敏治
描く絵がやさしくなって老いを知る　太田扶美代
ちひろの絵やさしいママの眼が笑う　上山堅坊
肖像画ちょっと冷たい人が好き　田中ゆみ子
箒目の波が見事な庭にする　松原寿子
表紙のきり絵からじっくりと見る塔誌　片山かずお
分からぬ絵芳名帳に義理を立て　山田耕治
クリムトの絵じっと見詰める老い二人　藤井宏造
お揃いのベスト絵になる老夫婦　米澤俶子
公約の絵空事には飽きた耳　出口セツ子
母描けば哀しいほどの笑い皺　平井美智子
両親のカンバス抜け出す子の自立　矢倉五月
鯉のぼり未来へ泳ぐクレヨン画　大内朝子
春雨のふたり絵になる二輪草　初代正彦
真っ白な画布に産声したたらす　中村惠
この帯解けと言う浮世絵の女　上山堅坊
だまし絵でのらりくらりと政と官　村田博
吉永小百合をデフォルメに描く嫉妬心　清水久美子
いっせいにダリの時計が鳴りだした　小島蘭幸
父ちゃんより大きいトンボ絵日記に　柴本ばっは
九条が踏絵となって右派と左派　中島一彌
地上絵のナスカロマンを孕む謎　山野寿之
クリムトの接吻寝室に飾る　上野多恵子
相合傘絵にしてくれる法善寺　中川ひろ介
絵が浮かぶような楽しい句を目指す　坂裕之
絵も壺も行く先決めて逝った父　米田利恵子
少子化の国に未来の絵は描けぬ　阿部俊八
裸婦の絵に長居は妻の目が刺さる　萩原狸月
10連休ついに自画像描きあげる　油谷克己
佳
折れそうな心を包む園児の絵　石田ひろ子
子は巣立ちやがてふたりの絵にもどる　鴨谷瑠美子
モネの池岐阜に作って村起し　能勢利子
騙し絵と気づかず夏を食べている　伊達郁夫
絵の奥の奥に平成うずくまる　青木公輔
人
名画展まず体力を試される　山岡冨美子
地
青春の叫び聞える無言館　澤井敏治
天
踏み絵には私の顔が描いてある　川端六点
軸
デフォルメが過ぎて自画像ピカソめく

兼題「疑う」　上田ひとみ選

疑うことをこれから学ぶ園児たち　降旗弘美
めずらしく頑張っているタイガース　前田紀雄
生ビール190円冷えてます　斎藤隆浩
何かあるダーリンと呼ぶ妻の声　堀正和
年金で世界一周やってきた　太田としお
疑った言葉涙腺突いてくる　山口弘委智
お疑いですかと薔薇らしく散った　居谷真理子
疑いを持たぬソプラノ冴えわたる　津守柳伸
疑問符を持つ子は成績が伸びる　阿部俊八
何一つ疑いもせずついて来る　森廣子
疑えば不幸になるという男　米田利恵子
嘘でしょうあなたの訃報聞くなんて　鈴木かこ
信じ切ることが出来ない嫌な性　坂裕之
私の疑心暗鬼が哀しくて　中岡千代美
疑ったときから落ちる蟻地獄　山岡冨美子
ばあちゃんが疑っているボクの声　山田耕治
疑いは私の強さなんだろう　岩佐ダン吉
武勇伝誰も信用していない　田中ゆみ子
目も鼻も疑いようの無い血筋　川端六点
疑いはこのやさしさの裏にある　山下純子
疑えばきりない夫の女好き　古今堂蕉子
本当のことを言ったら怒られる　敏森廣光
株あると言ってるけれど嘘でしょう　榎本日の出
疑いが晴ればみんな寄ってくる　安田忠子
5W1H疑ってなどいないけど　中岡千代美

ライバルがくれた美しいリンゴ　安土　理恵
そりゃないと疑っている余命表　森田　旅人
もう一度訊くが君ではないんだね　上野多恵子
また恋をしてるんですかお婆ちゃん　細川　花門
料理酒飲んだの僕と違います　村田　博
どの男も酔って覚えがないと言う　横山　里子
生年月日疑ったことがない　前　たもつ
見も知らぬ人が教えるいい話　中島　一彌
名も知らぬキノコ御近所からもらう　大久保眞澄
疑問符が溜り積もって石になる　伊達　郁夫
逢えぬまま疑惑を抱いている小指　松原　寿子
疑えば犬は悲しい顔を見せ　長川　哲夫

佳

妻は美人でないのであんしんです　江島谷勝弘
青信号ですが渡っていいですか　森松まつお
疑い出すと怪しく見える影法師　前　たもつ
婆様が一升瓶に線を引く　大杉　敏夫
疑いの晴れた命のほっとする　大内　朝子

人

疑う余地が無い君は主犯格　加川　靖鬼

地

お待ち下さいビデオ判定致します　太田としお

天

いつまでもこんな幸せ続かない　吉村久仁雄

軸

どのくらい私を知っているだろう

兼題「どうぞ」　中川ひろ介　選

お先にどうぞ僕はこの世にいま暫し　鈴木いさお
ゆずられたエレベーターでブザー鳴り　降幡　弘美
「どうぞお先へ」覆面パトの罠だった　木藤こみつ
食べ方が解らずあなたからどうぞ　太田扶美代
細い道自転車下りて譲りあう　宇都満知子
席を立つ少女どうぞと頬赤い　森田　旅人
退院日空をまるごと召し上がれ　鈴木　かこ
見栄張らずどうぞの席はありがたい　飛永ふりこ
カジノへどうぞ待ち構えてる依存症　岸田　万彩
細道にどうぞと雨の法善寺　水野　黒兎
どうぞどうぞと誰も座らぬままの席　平井美智子
天皇位はいどうぞとは行かぬもの　松岡　篤
ライバルにどうぞと言える出来た人　阿部　俊八
ぶぶ漬けでもどうぞは落とし穴だった　大久保眞澄
美しい「どうぞ」と席を譲る人　平賀　国和
どうぞと席譲られ下車までの恋　矢倉　五月
お役に立つならどうぞアイバンク　米澤　俶子
どうぞとは言えぬトイレの長い列　坂上　淳司
どうぞどうぞと案内される落とし穴　平井美智子
ゲーム族誰もどうぞと譲らない　横山　里子
丁重に出された茶菓子蟻二匹　宇賀　史郎
平服でどうぞに靴も宝石も　川端　六点
またどうぞ言われたくない歯医者には　堀　正和
おたやんの隣でいいのならどうぞ　長浜　美籠
肝だめしどうぞと譲り後ずさり　藤原　大子
手料理のフグを後妻がハイどうぞ　岸田　万彩
どうぞよろしく家族がひとり増えました　鈴木　かこ
まっさらな令和を生きる覚悟問う　渡辺　富子
どうぞどうぞと遍路の旅は温い　森　廣子
お先にどうぞ譲られてから知る野心　松尾美智代
インバウンドのお方もどうぞと通り抜け　堀　正和
ウエルカム掲げ猛犬2匹置く　清水久美子
ご自由にどうぞと妻が戻らない　伊達　郁夫
握手されても魂だけは売れません　前　たもつ
混浴へどうぞどうぞと言われても　太田としお
孫誕生どうぞ元気に育ってね　能勢　良子
半額がどうぞ買うてと見上げてる　居谷真理子

佳

葉桜もよいものですと招かれる　油谷　克己
素通りの出来ぬ知人の募金箱　平松かすみ
お先にどうぞ私の狙い残り福　澤井　敏治
初心者もどうぞ句会で会いましょう　斎藤　隆浩
これからは女性もどうぞ天皇に　川端　一歩

人

救急車受け入れ先が見つからず　榎本日の出

地

どうぞから始まる作法おもてなし　津守　柳伸

天

僅かでもどうぞと分けた昭和の子　長谷川崇明

軸

プロポーズ受ける気で乗る観覧車

兼題「派　手」　西出　楓楽　選

派手好きもレジでは安いほうがよい　伏見　雅明
派手すぎる演出に見るヤラセ感　降幡　弘美
当たったら川柳塔へ派手に寄付　内藤　憲彦
金ぴかの秀吉成金の極み　藤井　宏造
下着にはタップリお金掛けている　上田ひとみ
ワンゴールど派手にピッチ駆け巡る　佐々木満作
襖を解いて真っ赤なハイヒール　森田　旅人
三原色の好きな妻です達者です　柴本ばっは
マドンナはピンクのままのクラス会　堀　正和
入院へせめてパジャマは派手にする　山本希久子
新元号騒いでいるが物価高　川端　一歩
どう見ても派手だが褒める試着室　山崎　武彦
派手な服上手く着こなしてる白寿　出口セツ子
今日だけは派手を避けたい花の下前　たもつ
派手な母通夜はフラダンスで送る　佐々木満作
ストレスのはずみで買った派手な服　中川ひろ介
通好み派手さはないがいぶし銀　中島　一彌
ヒョウとトラ柄競い合う橋の上　吉村久仁雄
派手好きな友だったのに家族葬　柿花　和夫
地味婚の割に喧嘩は派手にやり　松岡　篤
赤ピンク着たい傘寿はお年頃　藤原　大子
お隣の派手な喧嘩で目が覚めた　齋藤さくら
久々に派手な舞台の万葉集　敏森　廣光
宝塚観た後化粧けばくなる　冨永　恭子
わたくしを奮い立たせる派手を着る　大内　朝子

知らぬ間に彼女のとりこ食虫花　田中ゆみ子
派手を着て淋しい心かくせない　山本希久子
派手にせんでも君は十分目立ってる　今井万紗子
新元号へ派手に飛び込む戎橋　前　たもつ
百歳を派手に祝って散るつもり　能勢　利子
派手な喧嘩繰り返しつつい夫婦　能勢　良子
トランプもキムも目立ちたがり同志　山岡富美子
猫の声派手さは子孫残すため　松岡　篤
思いっきり派手に飾ってエピローグ　石田ひろ子
ティファニーの帽子をかぶる嫁が来た　内藤　憲彦
派手好きな質でいっつも素寒貧　澤井　敏治
派手になりましたおばちゃんになりました　中岡千代美

佳

寂しくて飾る赤い羽根青い羽根　中岡千代美
花柄でフリルでリボンついている　居谷真理子
姑が草間弥生の真似をする　清水久美子
パフォーマンスは派手に中身のない男　木本　朱夏
派手かしら　いいよと遺影笑ってる　山田　耕治

人

派手な相づちこの人話聞いてない　吉村久仁雄

地

はんなりと質素と派手の暮しぶり　七反田順子

天

物欲が極彩色になっている　鈴木　かこ

軸

存在感示すくしゃみを派手にする

兼題「時　代」　小島　蘭幸　選

日めくりをめくると風薫る令和　山本　進
再びのバブルの夢を爺は持つ　横山　里子
時代祭外国人の武者姿　上田　和宏
アルバムに遠い時代を閉じ込める　斎藤　隆浩
四代を刻む白寿の笑い皺　山野　寿之
プレスリーの真っただ中を生きてきた　中岡千代美
キャッシュレスへギアーチェンジが未だ出来ぬ　松岡　篤
地球から逃げ出す時代きっと来る　村上　玄也
人生ゲームもはやゴールのない時代　大久保眞澄
キャッシュなど時代遅れと言うスマホ　阿部　俊八
わたし流たとえ時代が変わろうが　山岡富美子
人生百年時代わたしまだ傘寿　山本希久子
新聞に時代が軽く重く載る　居谷真理子
琥珀色の亡母の梅酒は宝物　坂上　淳司
時代から取り残されて組む坐禅　西澤　司郎
たまには老父の時代遅れの小言きく　米田　恭昌
巻き尺から出てくる忘れていた時代　鴨谷瑠美子
難破船などになるなよ令和丸　新家　完司
まだ似合う娘時代のワンピース　上野多恵子
少子化時代いずれ我が家も墓じまい　初代　正彦
戦争を語り継ぐためまだ生きる　前　たもつ
麦ご飯でしたが夢がありました　平井美智子
今はこんな時代ですのよお義母様　矢倉　五月
美しい時代でしたと畳む恋　平井美智子
少子高齢ボーっと生きちゃ叱られる　内田志津子

平安時代なら私かて美人　大久保眞澄
不自由な時代を生きて来た自信　萩原　狸月
給食で大きくなった昭和の子　能勢　利子
新時代初日は雨で始まりぬ　森松まつお
ご近所は昭和のままのお付合い　能勢　利子
いつの代も時代遅れが味を出す　敏森　廣光
手さぐりだった懸命だったあの日　上田ひとみ
戦あるな令和の空を鯉のぼり　木本　朱夏
平成にも昭和にもボクの足跡　立蔵　信子
平成の椅子が持っている余熱　古今堂蕉子
痛風が贅沢病じゃない時代　岸田　万彩
女優の訃時代変わっていくのだね　山田　耕治

佳

雑炊に並んだフェルメールに並ぶ　居谷真理子
敬老を忘れる時代来る寒さ　伊達　郁夫
ゆうゆうと時代遅れを生きている　渡辺　富子
バブル期の遺産小出しに今日も飲む　清水久美子
ガラケーのどこが時代遅れですか　鈴木いさお

人

あたらしい時代を開けて庭雀　森田　旅人

地

あの頃に戻る拓郎聴きながら　鈴木　かこ

天

同じ時代に生まれあなたに巡り会う　**小野　雅美**

軸

わたくしの時代はついに来なかった

句会燦燦

四月句会を読む　板垣孝志

玄関を開けてくずれる酔っぱらい　古今堂蕉子
『トラ箱には行かぬ』崇高な信条もここまで
こんなとこで寝るから踏んでしまうねん　大久保眞澄
ネコでなくて良かった　今日はツイとる
ぐにゃとした男カリッと揚げました　渡辺　富子
シャキッとさせたらポロッと折れた
賞味期限余裕あるのは棚の奥　木藤こみつ
同じ物を買う要因がここに眠っている
お芝居のひとコマのようお葬式　齋藤ざくら
必ずと言ってよいほど大根役者が混じるもの
樹の役をしますと孫の招待状　田中ゆみ子
舞台でいちばん大きい役だと鼻息が荒い
まだ少し愛があるのか胸痛む　榎本日の出
なりゆきで喧嘩別れをしたものの
言い勝った胸に淋しい風が吹く　平井美智子
またやってしもた・・　因果やなぁ
淋しさはきちんと恩を返される　居谷真理子
『ありがとう』に『これきり』まで付けて
椿散ってもまだ情念の色のまま　荒川　鈍甲
雨に濡れたら血を流す
半畳もあればわたしの花舞台　木本　朱夏
金魚でさえ小さな鉢で存分に踊るのだから
恩人はみんな桜の木になった　新家　完司
こういう句に出会えたら選者冥利に尽きる

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

川柳塔すみよし（大阪）　森松まつお報

大丈夫妻の私が付いてます　崩
丈夫です長持ちしますもろてんか　いさお
一病を持って句会に来てる皆丈夫　シマ子
瀬戸際の母の口癖大丈夫　志津子
底力まだまだ出そうおじいちゃん　ばっは
イチローは心も丈夫だったんだ　直子
丈夫やでちょっとやそっとへこたれん　美世子
丈夫な足と笑顔で三途の川渡る　久仁雄
未熟児を丈夫に育て優良児　民子
安らぎが欲しくて群れの中にいる　美籠
群衆の中に紛れるテロリスト　宏造
群れに入り孤独ますます深くなる　昌紀
地球上の国旗の群れを見る五輪　たかこ
立ち飲み屋オッサン達の群生地　まつお
深呼吸だんだん湧いてきた自信　雅美
誉められて益々闘志湧いて来る　舞夢
湧水に茶碗の伏せた春景色　重信
アンパンマン読んだら勇気湧いてきた　一歩
湧き上がる惜別を浴びバット置く　妙子
叱られて泣くたび湧いてくる闘志　ゆみ子
母さんが夢に出てきてくれた事　芳香
インフルも花粉もわたし避けて行く　桂子
嫁が来たパンと笑顔を持って来た　公平
姪からのランチの誘い有頂天　廣子
なんといっても定年退職の日　勝弘
嫁さんを貰った時の三日間　行兵衛
試歩そろりやっと水分喉に染む　ふりこ
此の歳でガンは静かに消えていた　日の出
寒い日に出会った夕焼けの茜　満知子
懐かれて三日も飼えば情も湧く　俊雄
群れるのが好き孤独の恐さ知ってから　(矢)五月
群衆の中で迷いを吹き飛ばす　大子
人の道蟻の行列から学ぶ　満作
善人の群れ気疲れが重くなる　里子
胃を切った僕を笑わせにきた見舞い　ひろ介

岸和田川柳会（大阪）　石田ひろ子報

ちらほらの灯に復興がまだ遠い　あかね
ちらほらのあたりで花見行きましょか　信子
大阪城日本の方もちらほらと　まつお
古稀になり白髪顔出すちらほらと　繁子
老いを知る髪にちらほら白いもの　信二
ちらほらと客見え隠れ過疎の寄席　笑司
はやくしろバカアホ言うと芽をつぶす　心
出来ぬ理由芽を摘まれたと言いのがれ　雲水
木蓮の芽が握ってる白い夢　多喜子
青空にむかって冬芽背伸びする　大条
無関心なのに芽を出す律義者　恭子
もう愛が芽生えたらしい幼稚園　保州
星月夜ロマン芽生える初デート　たか子
独り言みたいに囁くなんてズコ　昭
雪解けて春がささやく里の川　ふさゑ
植え替えた松にささやきかけている　三成
新品のネクタイ固い入社式　香代
囁きを集め平和の声にする　ひろ子
囁きの割にはしょうもない話　航太郎
囁いてほしかったのは違う人　規予子
はにかんでチョコが囁くバレンタイン　洋二
にんにくを食べ耳元で囁くな　いさお
春の囁きじっと聞いてる土筆の子　晶子
怒鳴るだけ囁きなんて無い夫婦　秀夫
まくら元囁く声にぎょっとする　明
好きだよと囁いてから半世紀　義泰
やきもちも焼かずさっぱりした嫁で　みつ江
武装解くように喪服の帯を解く　益子
拉致帰還さっぱり目途が立たぬまま　隆昭
さっぱりと別れ始発の無人駅　大輔
言いたい事言ってさっぱりしたと妻　珠子
ネクタイから男の素性透けている　英夫
ネクタイを締めると君は賛成派　ダン吉
ネクタイピン光る胸にも赤い羽根　由紀子
ネクタイは白黒二本あとは風　喜八郎

川柳塔打吹（鳥取）　斉尾くにこ報

出勤は朝の戦で始まった　龍枝

戦時食いも大根むぎ米三粒　久芽代
核戦争地球の終り知りながら　岳　人
躾にも戦混じりて子に当る　恭　子
戦争は灰になるまで無くならぬ　石花菜
イントロが流れて戦始まった　熊四郎
花畑もごもごさせている土竜　重　忠
断捨離が出来ずもごもご思案顔　泰　山
もごもごと寝床出れない寒い朝　悦　子
わからないところは口ごもるお経　芳　光
夕べからずっとスルメが呑み込めぬ　三津子
好きならばあの時抱いて欲しかった　芙美子
好みです今さら言われパニックに　義　人
俳優は簡単に言うアイラブユー　みち子
女医さんに一目惚れしてわざと怪我　紀美恵
のら猫に好かれゾロゾロついてくる　公　恵
好きだった飲む打つ買うに尿酸値　野　蒜
末期の水ビールにしたいビール好き　照　彦
ゆったりと解けた飛行機雲が好き　完　司
雨の夜デンデン太鼓のメロディー　貴　恵
軽やかな曲朝一番に耳が立つ　七　七
深夜聞く夫のメロディー五デシベル　清
メロディーのついた寝言にアンコール　滋
不眠症の君に捧げるブラームス　節　子
メロディーの和音のような日本食　重　利
メロディーにのって手足の愚痴がへる　美知江
うつむいてしまえばメロディーは消える　久　江
メロディーを人は小鳥に教えられ　玲　坊
天国と地獄流れる運動会　紀の治
戦車より強いとおもう思いやり　くにこ

川柳塔みちのく（青森）稲見　則彦報

亡母の技どっぷりと吸う一夜漬　ひとし
春うらら僕の心も芽ばえてる　冬　道
目を閉じるそっと聞こえた芽ぶく音　小とみ
どっぷりと沈む夕日に騒ぐ海　吹　喜
花芽たちどんなドラマを生むだろう　劦
プレゼント私いかがとラッピング　孝　子
百才の私に贈る認知症　柳　子
十五の春うれし涙が光ってる　初　枝
沖を見ているとわたしは発芽する　黙　人
恙無い節目に干支の猪口贈る　風来坊
どっぷりと浸かってみたい酒の風呂　重　虎
芽の忍耐明日は開花を宣言す　隆　樹
補助輪をはずせば伸びる新たな芽　美　鈴
還暦の父に似合わぬチャンチャンコ　慕　情
二日酔いまだどっぷりとどっぷりと　則　彦
一升瓶さげてストレス消しにゆく　一　呑
ヤサブローの嫁コ涙で米を研ぎ　英　子
父贈る地酒は友の好きな酒　きよし
焼酎に種ごとりんご夢の味　真由美
良心を保って生きたい油断せず　京　子
落ち込んだ心に沁みる虹の色　のぶよし
天災に負けない農を志す　龍　馬
年毎に増える病と生きる知恵　ふさゑ
新聞は記事よりチラシ時間かけ　花　峯
電池交換しに行きましょう縄のれん　霜　石
思慮深くなれよなれよと向かい風　洋　子
本心は言うまい天気荒れて来る　呑　舟

柿花和夫選

筆圧の弱まる母の闘病記　義　泰
なごり雪積もるごめんと言ったのに　あき子
どんな芽が出ても私の蒔いた種　半　徳
キープしたボトルに一句添えておく　克　己
天の句の十七文字にある矜持　寿　降
風読んだあの時僕は負けていた　ダン吉
妥協せず駆け引きもせず逃げもせず　直　樹
空白のページに理由など書けぬ　八千代
ヴィヴァルディ前頭葉へ春が来た　道　子
覚えてはいるが黙っていてあげる　美代子

佳句地十選　（5月号から）

政岡日枝子　選

戦っていますか恋をしてますか　いさお
すみれ咲く恋満開の花時計　みつこ
富士山へ叫ぶと雲が沸くようだ　笑　子
昭和の男だ煙草もポマードも　眞　澄
ドーナツの穴から孫を見て飽きぬ　黙　人
晴れた日は春のひかりをスケッチしょ　文　代
スーパームーン彼に電話をしてみよう　千代美
運命とつぶやく鎮静剤にする　五　月
ヴィヴァルディ前頭葉へ春が来た　道　子
生れてからこれまでずっと雨の中　芳　光

青春のしっぽ切りなよねえオジジ　和香子
すねかじり一次会にて帰ります　規子

はびきの市民川柳会（大阪）中川ひろ介報

早とちりそれでも僕を憎めない　ダン吉
遠い日の母をぱくつく稲荷寿司　みつこ
3Kの職場で今日の終電車　壽峰
今はまだ笑えるほどの物忘れ　ちづる
早蕨の風味さくさくさく徳利　欣之
始発から終電までの人模様　いさお
一日の無事全うへ終電車　大子
記録から記憶の人となるイチロー　久仁雄
あのときのあの悔しさが僕のバネ　かこ
借金は記憶喪失知りません　清
記憶なくひと悶着の貸した金　高鷲
忘れたらいけない記憶戦争は　かつ美
クリスタルガラスに早春が光る　瑠美子
早食いの癖が直らぬ戦中派　専平
お花見の席取り孫の初仕事　久仁子
早送りされてはこまる吾が人生　シルク
愛された記憶土産にあの世まで　千鶴子
同じ手は使わぬプロ棋士の記憶　紀雄
配達は早さじゃないよ正確さ　雄太
記憶には今にも耳に子守唄　洋一
記憶したそのひきだしがわからない　フジ
昼御飯記憶あるから惚けてない　さくら
しっかりと明日の予定を記憶する　正義
うっかりと洩らした内緒風に飛ぶ　泰子
改元へ昭和の記憶遠くなる　ひろ介

和歌山三幸川柳会　西川　千鶴報

ジョーク出るベッドそろそろ退院日　ひろ子
裏を見て表を眺め日々生きる　智三
究極の美学は顔のないこけし　保州
鬼ごっこやっと見つかりほっとする　よしこ
従順な鬼を一匹飼っておく　日出男
もう二度と白いページに戻れない　俶子
平成は戦後が続くいい時代　康則
枯れるまで我を通してる白い花　起世子
鬼灯が赤くなる頃参ります　知香
鬼の面取れば優しい父になる　義雄
両陛下民を見守る新世紀　准一
新元号地球は丸いままがいい　当代
時時は黒い心を陽に晒す　幹子
新元号生きる喜び示すべき　一雄
割烹着似合う女がいなくなる　富香
新雪が優しく包む父母の墓　まき
大根のどこを切ってもある矜持　純子
喜びは新元号で喜寿祝う　宏枝
大根の白さと勝負せぬことだ　和子
白線の越えたあたりにある野心　菜摘
神様に最も近い白い色　次根
空白の中に紛れる冬の蝶　昭枝
丁寧に生きよう白無垢の君と　あき子
大丈夫何とかなると挫けない　昇
黒塗りの器へ夢をうんと盛る　美枝子
白梅はきっと吹雪の置き土産　八重子
元号は時代の波をあらわして　保子
ささくれた心鎮める雪景色　敏照
新しい時代の標元号に　彦弘
新元号竜宮城のノックから　弘子
生きた証残して過ごす改元年　明宏
無になろう白い心のままでいい　美羽
元号が三つ変わって年がいく　いさみ
両親の年越え未知の山のぼり　かず子
鬼おこぜ最初に食べた人偉い　千鶴

川柳塔唐津（佐賀）　仁部　四郎報

来ぬ人を待ち寒空に涙する　蜂朗
大臣に渡す原稿フリガナを　四郎
亡き父の金科玉条額にあり　高明
快都君一コマおもちゃのうぱい合い　實

竹原川柳会（広島）　古田　太虚報

これまではいいこれからが大切だ　宣之
ロボットと仲良く過ごす老未来　輝恵
石段のこれから亡父に逢いにゆく　笑子
これからのこと考えている芒　蘭幸
マイペースゆっくり行こう年が言う　規代
二日酔い叱ってくれる人いない　夢香
私の娘マイペースなり子育て感　千代美
千切れ雲みなマイペースどこへ行く　比呂子
マイペース夫婦百迄踊らんか　弘子
マイペースなだめて優し介護の掌　幸子
一人居に好きな音楽聴く幸よ　汎美
そっと置くひとりぼっちの箸の音　栄香
黄昏てやっと夫婦の音になる　昭紀

孫のフルート少しボリューム上げて聞く　慶子
音も無く忍び寄る老い迎え撃つ　淑子
難聴に聞こえる音が一つある　節生
句帳から生きた証の佳い音色　敬子
両手ひろげて掴む春の足音　寛
子育てにブレーキなんてかからない　歩美
自問自答なのに亡母に訊いている　京子
親子猫日なたぼっこにやってくる　半徳
恐竜をリュックにつめて曾孫くる　初音
細波の消えて自由の翼買う　厚子
初恋はただドキドキとしたもんだ　史子
えいえいえいまほうのれんしゅうしています　三歳　ちか

わかあゆ川柳会（島根）　松本はるみ報

暖冬の先を案じてする追肥　恵美子
歩いても歩いても想いは先へ行く　はるみ
辻褄が合って安らぐ今日の雨　安子
墓参りだけの実家へ足が向く　ハル子
茶封筒せめて切手は春の色　かつ子
過疎高齢なにが生きがい鍬振るう　昌

川柳ささやま（兵庫）　北澤　稠民報

野菜畑夢いっぱいの余生です　かほる
ストレスを宥める薬般若湯　哲男
内緒ごとしながら夫婦半世紀　稠民
電柱の影が枯野へのびている　真由
運動する健康だから腹がへる　さゆ子
捨てられずここに有る物皆宝　幸子
亡妻植えし水仙の花今年も美人　善輔
卵焼きうまく出来たよ妻の留守　剛
夜桜の下で飲む酒ああ甘露　重男
ひきこもる君の苦しみわかってる　喜弘
少子化の子らの叫びが聞きとれぬ　良子
花粉避け帽子にマスク顔知らず　照代
新元号令和が民へ幸の風　美智子

川柳同友会みらい（鳥取）吉田　陽子報

泣くまいぞ明けない夜は無いはずだ　かず子
反省が出来ない猿のままである　みち子
しおらしい気に変身させる和服力　美恵子
毎日が盲点だらけ引き締める　章子
いじめ等ないか湖上の鳥の群れ　亜矢
おせっかい人の心も知らないで　君代
方向を変えるしかない行き止まり　真帆
スマホだ何てまだガラケーが仮免許　恵美代
一人旅自分の時間独り占め　一眸
綺麗になあれ鏡の前で一回り　紫音
新元号当てるクイズは難しい　和之
一番はやっぱり愛と言い切れる　智恵子
父は何故買ったのだろう哲学書　海希
素うどんが旨い一日ボランティア　陽子
モナリザの口元いつも真似ている　安子
何度でも神は優しく返事する　れい子
いつまでも別れられないわかれ道　扶美代
なんでやねん小石ひとつに躓つまずく　ダン吉
ページ繰るたびに波音せりあがる　心咲
ゆらゆらと海月になって生きてゆく　游子
客席に媚を売らない芸をする　公弘

京都塔の会　山田　葉子報

モナリザのポーズでお悩み聞きまひょか　福子
してやったりガッツポーズが様になる　光久
金も土地家もあるのに居場所なし　円笑
技の差で世界手玉の町工場　欣之
段差ないとこでつまずき周り見る　文代
貧乏も皆笑顔ではしゃぐ家　五月
笑いましょはしゃぎましょうよ若返る　哲子
裸木へ春の足音はしゃぐ音　公子
菜の花がいま満開にはしゃいでる　朝子
淋しくて一人ではしゃぐ事がある　ルイ子
待っててやすぐ咲きますと言う桜　かずお
異次元の記録刻んだイチメーター　洋志
イチロー引退歴史に残る名選手　義昭
イチローの美学貫く記者会見　満子
なぜわかる春がきたことホーホケキョ　弘子
五つ目の蕾が開くニュースです　弘之
ロダンのポーズ真似てもヒント湧いて来ぬ　則彦
月末は頭抱える母がいた　宏子
子に見せるポーズは元気なんだけど　葉子
誉めるのもほどほどの差をつけておく　弘委智
別れたらデートの差額払わされ　雅美
平成と昭和大きな差は戦　美津子
柄になくはしゃいだ訳は内緒です　多津子
はしゃぎましょ運が好転するのなら　美籠
気のあるポーズきっとあの娘を振り向かす　万紗子
はやぶさを乙姫様がウエルカム　英旺

店頭ではしゃいでいますさくら餅　求芽

プラザ川柳（大阪）　穂口正子報

コンビニでおでんおにぎり一人飯　正子
トントンと朝食の音春近し　政夫
喧嘩ではじきに泣いた子名医成す　園子
秒針が刻む刹那の胸騒ぎ　久美子
かま出しで初めて分かる化粧泥　千枝子
アポ電に適当答え怒鳴る母　修
適当にあいだも空けず子沢山　五月
じいちゃんの刻みたばこが懐かしい　弘光
適当にあしらっておく夫の餌　淳司
美らの海悲しみ刻み埋められて　克三
消しゴムに刻んだ雅号光ってる　一彌
刻まれて春知らせてる蕗のとう　清乃
CMに切り刻まれるメロドラマ　悦夫

川柳ふうもん吟社（鳥取）両川　無限報

ニコニコと胸のマグマは覗かせぬ　美恵子
三面鏡隠した歳を暴露する　回春子
桜咲くまだまだ咲かぬ僕の恋　勲章
子が巣立ち夫婦の会話あれとそれ　真理子
酔うと出る愚痴を聞いてるワンカップ　茶人
山菜の仕上げは母のかくし味　一平
春うらら茸もむっくり顔を出す　房江
人は人私は私物の価値　節子
裏道が好き人が好き花が好き　宏章
幸せの死角に潜む別れの日　りんこ
気ままな風が残り火を消してゆく　一粋
アルバムの抜けた写真にある痛み　八千代
広い胸羽根を休めていいですか　一瑤
いつからか家が都になっていた　京子
都会へ行くなキツネタヌキに狙われる　蟹郎
義経の夢を砕いた古都の乱　金祥
方言は捨てて都会で生きてゆく　みゆき
おらが村コンビニ出来て都会なみ　振作
私には過疎の都もすみにくい　鐘旭
東京都芯に日本は回ってる　善平
風になる都の本音聞きたくて　千代
政令都市ですがイノシシ殖えました　心咲
都合よく話し合わせて逆らわず　楓花
遺影だけいつでも何で明るいの　薫
ほどほどの明るい声で見舞いする　紀美江
明るい笑顔惚れて一緒になったのに　凱柳
どの顔も明るく笑う路地地蔵　昌鼓
残る世がバラ色であれ今日・明日　幸子
逆風がわたしを強くしてくれる　天翔
雨降りを願う子もいる運動会　毅大
逆境に強いと言うも口だけだ　義徳
マヨネーズ逆立ちさせて使い切る　千賀子
幼児に還った母と読む童話　無限
トンネルの向こうはきっと青い空

南大阪川柳会　松岡篤報

怒鳴るより任せた方が強さ生む　弘委智
気が弱いのに鼻っ柱が強いボク　勝弘
児を持つと女は強い二人力　和雄
寝た切りを優しく介護伏しおがむ　ルイ子
妻に伏す小遣い少し上げて欲し　一歩
伏せてあるメモが気になる朝帰り　実
地に伏すと地球の呻き聞こえ出す　たもつ
長生きの褒美ひ孫のウエディング　ひさ乃
折にふれ覗いてくれる嫁いだ娘　柳右子
もう嫁に任せてみるか匙加減　郁夫
嫁さんと仲よう暮す老後策　志華子
長湯する母をそっと覗き見る　シマ子
結論を先に聞きたい長ばなし　真佐子
引退へファンの長いため息だ　修
乾杯の前のスピーチ長過ぎる　いさお
進化して不便なことも尾長鶏　東風
釣る人も見ている人も気が長い　保州
100迄の20年程恋しよう　篤
五月一日平成を押しのける　直子
善良な市民戸惑う都構想　柳伸
記念樹が泣いております廃校で　ばっは
中流意識怪しくなった物価高　弘子
知恵積もり年の分だけ手抜きする　峰子
春はそこますます目鼻痒くなる　昌紀
実習生に女工哀史重ね見る　国和
わたくしの素顔を売りに道の駅　あや子
長いこと待たせましたと屋根修理　克己
春の訪れ一番先に知る便座　楓楽

川柳茶ばしら（愛知）　関本かつ子報

ルール通りにやれば見落とし起らない　雅美
久し振り竹馬の友も翁となる　三樹夫
Lがもう穿けなくなった胴回り　遡行

しきたりに従う親のいる内は　美千代
新人も半月たてば場に馴染む　まみ子
伝統のみこしを担ぐアルバイト　かつ子

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

旅日記良い事ばかり書いてある　柳　童
一人旅孤独が好きな訳でない　順　子
駅弁を買ってビデオで旅気分　正　子
彩りの庭から春が決まりゆく　桂　子
人生は一つ未決で終わりたい　則　彦
音決めるお琴の糸の張り具合　信　男
決め事になぜか一人はあまのじゃく　一　弥
元号が決まり太宰府花が咲く　黒　兎
たっぷりの余裕が人生を変える　久　子
どうしようたっぷりすぎる十連休　純　子
たっぷりと日差しを浴びてウォーキング　郁　子
手のひらにたっぷり夢を握り込む　美佐子
里帰りたっぷり母の玉子焼き　奈津子
たっぷりと苦渋を舐めて聖となる　孚　彦
捻挫した足を引き摺る空元気　春　代

富　柳　会（大阪）　関　よしみ報

説教も馬耳東風に孫二十歳　きみ子
春うらら涙腺ゆるむ一ページ　文　重
雷光にざっくり裂けた樟新芽　伸　雄
ざっくりと気儘に生きる今日明日　由　夏
ざっくりと割れて柘榴は本音吐く　田鶴子
たたかれた涙は見せぬ燻し銀　澄　子
弁解を聞かず雷落とされる　よりこ
弁解は無用結果の丸裸　壽　峰
アンダンテ春はぶらぶらやって来る　隆　充
いつの世も涙は女の強い武器　一　文
ひと滴落す涙にある決意　高　鷲
新元号新天皇が盛り上げる　清
断捨離で自分を捨てる過去すてる　常　男
あの人とあの日のように会う桜　あかり
悩んでた敵は自分と気付く夜　武　人
号泣の涙はどこか嘘っぽい　恵
くに発ちに母の涙子の涙　寿　之
縁ちぎり縁にざっくり判ひとつ　よしみ
判決の日は号泣憚らず　欣　之
風も父も少し小さくなって母　森　子

川柳あまがさき（兵庫）　大浦　初音報

球児らははち切れそうな太い腿　厚　江
思い出はつきぬそろそろ通夜の席　たみえ
大笑い音痴も負ける弾語り　雄　次
軒先を何度も下見初ツバメ　公　子
夏仕度せよと通販せめてくる　初　音
私のモノサシ自由自在です　菊　江
朝寝坊犬の散歩が後になる　(高)千賀子
初任給威張って息子仏壇に　富　夫
蕎麦啜る米原駅の名残り雪　英　坊
春到来力を溜めて待っていた　正　彦
誰にでも母を泣かせた駅が有る　新　緑
規格外弾き出されて安売りに　りこ
福沢諭吉替わるらしいよ新紙幣　つな子
春めいて猫とのんびり甲羅干し　(竹)千賀子
舞う花に土筆が埋れる無人駅　真桜子
古賀メロディーギター爪弾く望郷歌　良　種
駅中で新幹線を見る喫茶　靖　鬼
辿り着きふわり雲浮く無人駅　ヨシエ
そろそろと妻に似てきた娘の嫌味　(谷)修　平
歳とって丸うなったら気いつけや　ひろ介
琉球の悲痛な叫びか蛇皮の音　純
そろそろり春の女神が疼きだす　紀　華
八十になってもお礼舌足らず　耕　治
見守られそろそろ歩く試歩の杖　美　籠
三回忌そろそろ化粧濃いくする　宏　造
そろそろと歩く夫の杖となり　祐　康
飲むや打つ人事も決めた駅の裏　(入)修　平
後回しすることばかり増えていく　ひとみ
セーターのラインが春を主張する　かずお

川柳塔なら　大久保眞澄報

エイヤーと貴景勝の背負い投げ　優
背負い投げできればこの世パラダイス　ふりこ
背なに負う日の丸重しアスリート　のぶよし
ローン終え背負っているもの持病だけ　倫
ランドセル親の期待が重くする　光　堂
背負うもの沢山あって元気湧く　和　子
妻のため年金背負って生きてます　勝　弘
デカイ夢背負って折れぬ葦の自負　ひろ介
子の面目を立て口と金を出さずいる　敬　子
主の罪を背負い黒子に徹し生き　史　郎
日本を背負う背骨が右にずれ　行　久
背負う荷の重さに耐える愛の中　美智子

伝統を背負う球児に玉の汗　崇明
人の性一生背負って生きていく　圭
面目を果たし四分音符が弾む　國治
耐えて起つ案山子面目など問わず　妙
スマホ出て面目なくす生き字引　和夫
半目差読んで師匠の顔たてる　薫
ロードショー画面そこそこ追う字幕　展代
人生を刻む時計が速すぎる　富子
風を読み素早く動く処世術　恭昌
お鍋からすばやすぎるよつまみ喰い　孝子
友達をすばやく作るランドセル　辰雄
若者の世代どうする負の遺産　甚之市
味方から思わぬ吹矢飛んでくる　成子
意味不明カタカナ略語がまた増える　文聡
ふところは寒いがうなぎ屋ののれん　理恵
今もまだ切れぬ小指の後始末　俊八
やせたいしおなかいっぱい食べたいし　眞澄
年金はダウン消費税はアップ　貫一
どうしようDNA鑑定言い出した　すみれ
ご立派なアイディア誰が猫に鈴　比呂志

川柳花の輪（大阪）　**岡本　薫報**

外面を脱いだ父見た定年日　みちる
女装家は正しく芸が身を助け　正太郎
猿芝居妻はとっくに悟ってる　泰子
弁当に昨夜の喧嘩の続き見る　信子
さなぎからみごとに脱皮輝いて　笑子
のんびりと弁当箱も春やすみ　やすの
今日を脱ぎ明日に着替える日誌書く　亜成
ぬぎ捨てた女房の靴おこってる　薫

川柳塔さかい（大阪）　**内藤　憲彦報**

新聞に載らないわたくしの挫折　扶美代
令和やて見出しも踊ってるやんか　進
背を丸め新聞をよむ父偲ぶ　唯教
胸張って新聞を読む株価高　憲彦
新聞もスマホが流行り先細り　富夫
今の子は褒めて育てと専門家　(綾)清
出来るまで母は信じてそっと待つ　志津子
健やかに育てと泳ぐ鯉のぼり　妙子
子育ての中で自分も育てられ　玄也
子育てほど割に合わないことはない　愿
生さぬ仲育てることの難しさ　廣子
手足取り育てた部下が肩たたく　雅明
カラフルな夢を育てるランドセル　みつ江
ケアハウスに行ってストレス溜めている　世紀子
ストレスを一緒に吐いて深呼吸　舞夢
愚痴ばかり聞かされ犬も憂鬱に　雅美
ストレスの発散シャドーボクシング　ゆみ子
ストレスを爆発させる一気飲み　(向)清
わがままに育てた犬に牛耳られ　素頓馬
今日も行く絆育てる居酒屋へ　洋一
共通項見つけ友情育ててる　五月
生きてれば何とかなるというミミズ　みつこ
ありがとう素直に言える子に育つ　ひろ子
恥かいた一つ一つに育てられ　さくら
まだ育つやっと古希なり未知の道　輝子
皆が待ちやっと決まったこの令和　光雄
未来信じやり抜く覚悟是にあり　八千代
見た目には優しそうだが恐い妻　憲
ミモザの黄やさしく揺れる恋はじめ　佳子
皆からやっかみ浴びて孤立する　としお
民意無視役所仕事に抗議する　敏治
水際で止めてよかった好奇心　時雄
未練まだやんわり残る恋の傷　俶子

きゃらぼく川柳会（鳥取）**後藤　宏之報**

悩ましい老後の沙汰も金次第　紀の治
位牌拭く背なを流した後の様　令位子
おおまかに予定を立てる朝の靴　千代
アレソレと名前が出ない合言葉　治代
今朝の軽率右左違う靴　雨奇
人間の道をマンガでお勉強　宏之
孫の熱ケータイ忘れ通じない　美智子
鏡には影は映さぬ過去の顔　章
喜劇観て泣いて笑って若返る　久直
絡まった糸に良く似た人模様　汪
やらぬより失敗してもやる気力　ゆたか
お隣りの鳶次々と鷹を生む　美穂
道べりの椿の花に春を知り　美草
いも植える慈愛の雨を見届けて　美佐子
我に似て辛味の抜けた春大根　瑞枝
梅の花寒さに負けず咲き誇り　菜々
元気なら花も咲くんだ実も結ぶ　恵子

川柳大阪　山崎　珠生報

大物をしかと支える雑魚の群れ　堅坊

魚には骨あることを知らぬ子等　比呂志
魚くん乙姫さんからオファー来た　和
白魚の指に魔物が住んでいる　朝子
賑やかに鮨屋の湯飲み魚偏　満知子
割り勘の乾杯最後まで酔えぬ　紀雄
乾杯を献杯に替え三回忌　(鈴)いさお
長すぎる祝辞グラスの泡と融け　俊雄
ダルマに眼を入れて乾杯無駄にせず　弥生
乾杯に秘めた闘志をたぎらせる　志津子
乾杯は何度やってもいいもんだ　勝弘
乾杯の酒は銘柄選ばない　かよこ
乾杯は春夏秋冬恙ない　まつお
場の空気冗談ひとつ丸くする　美世子
冗談を言い合う風のあったかさ　昌代
骨までも愛しているという冗談　芳香
冗談を真に受け怒るくそ真面目　福貴子
冗談では済まぬ一本のマッチ　(田)ゆみ子
冗談やない僕はコンビニ妻ディナー　賢子
軍事費が五兆冗談ではない　一歩
悪かった冗談やがな堪忍や　珠生
テレビから拾う世相の予備知識　美籠
白黒テレビ父も見ていた母も居た　万紗子

倉吉川柳会（島根）　竹信　照彦報

としよりの金盗る奴は縛り首　完司
悪い奴ハート盗んで行ったきり　由紀子
悪人の面を作ったのは親だ　石花菜
忖度の神輿に乗っているタヌキ　麦青
悪い事したら視線が定まらぬ　風露
悪者がのさばり返り生きている　智恵子
料理する見映え悪いが味はいい　恭子
雪解けて川は記憶を取り戻す　宣子
穏やかな川も時には夜叉の顔　日出子
菜を洗う川へゆるりと蛇の来る　萩江
さらさらの小川も海へ出て怒涛　酔芙蓉
どれも母父なる川は聞きません　次男
捨てられた空き缶川で砂とじゃれ　祐子
測つくり魔物を飼っている流れ　大鯰
ギャンブルも酒も小言も楽しもう　節子
同級会傘寿の顔の皺くらべ　隆昌
天国は楽しいですか亡妻に問う　重忠
知事選挙現職知事は楽しそう　茂夫
昭和演歌テレビで聞いて毛糸編み　けいこ
おしゃべりが一番楽し女達　玲子
ひ孫たち見ると笑いがとまらない　康子
鮎釣りは引きつ引かれつ格闘技　明友
ふんわりと着心地がいい洗い立て　龍枝
お出掛けはふんわりふわりネオン街　雄大
悲しみをふんわり包むオブラート　紀美恵
ふんわりと弥生の空にはぐれ雲　鬼一
地下深くふんわり隠す核兵器　野蒜
残り火にふんわり心揺れている　美知江
羽根布団ふんわり絡み付き転ける　照彦

あかつき川柳会（大阪）　山本　昌代報

皮膚の色ちがうが同じ血が流れ　たもつ
人間も一皮むけば鬼仏　清
２９で獄死無念の鶴彬　壽峰
若いころもがき苦しむペシミズム　一文
新キャベツ愛を包んだ甘い皮　かこ
改憲で徴兵名簿召し上げる　九条男
昭和しか知らずに逝った若者よ　(櫻)秀夫
若さという時間を無駄にした自責　ひろ介
服装の乱れきっと悩み抱いている　敏子
夜桜に乱れてみたい風のあり　みつ江
部屋乱れ片付け下手は遺伝かも　郁子
あの世への門出も祝えにぎやかに　万作
リストラに堪えて残った首の皮　高鷲
スニーカー大口たたき巣立つ朝　しげ子
民主主義捨てた自民の辺野古土砂　のぶ久
終戦後の混乱生きて来た自信　堅坊
油がかかり一皮むけばピンクなり　紀子
甘え癖脱皮出来ないこの私　(田)廣子
乱舞するさくらを浴びる浄土かも　朝子
湯を弾く肌にウフフとまだ若い　ひろ子
葬儀屋のパンフ届くがまだ達者　里子
面の皮張り替えに行こ三味線屋　惠美子
渋皮が剥けたか入社三年目　信子
鮮烈なデビュー晶子の「乱れ髪」　喜代志
風呂上り乱れ髪に惚れ直す　善之
乱れ飛ぶ野次と居眠り議員席　福貴子
苦労した年月語る顔の皺　浩子
もうチョイでいつも脱皮し損なう　穏夫
夢千代の紅い湯文字か乱れ龍　克己
乱れ咲く桜嬉しい通り抜け　シマ子
また冤罪生み出す仕組みそのままに　太郎
迷いなさいこれが若さだ青い鳥　ばっは

定年後革靴よりもスニーカー　直子
私の皺の一筋ごとに愛　恵
パソコンで乱筆詫びてくれた友　保州

翠洋会（大阪）　大久保眞澄報

運命と諦めてから幸せよ　舞夢
開運ダルマ片目のままで棚の隅　恭昌
運命の出会いへ咲かす花あまた　富子
良い事は努力嫌なこと運命　すみ子
椅子取りゲーム厚かましさとすばしこさ　蕉子
椅子取りに負けて人生観を変え　浩二
リビングの椅子が連休待っている　千枝子
燃え尽きていません八十路姥ざかり　希久子
吹きかける桃色吐色火の匂い　弘子
飴と鞭孫のやる気を燃やすママ　げんえい
改元に詐欺師の知恵のいよよ燃え　敬子
燃えかすの右脳さらえて五七五　志華子
オリンピックトーチ燃やして駆ける町　善之
不注意かパリの心を燃え尽くす　行久
焼けぼっくいよく燃えるけどすぐ消える　理恵
映像にも優しさ滲む両陛下　桃花
褒め上手妻の手玉に乗せられる　満作
器用だと決めつけられる左ききき　弘美
十連休だんだん機嫌悪くなり　義
ポジティブにリセットしなきゃ進めない　ふりこ
ＩＴの波に乗れずに昭和恋う　大子
退院日家の空気に癒やされる　宣子
花の下飲んで歌って花を見ず　眞澄
トラキチの情緒またもや不安定　和夫
靴ちびるだけでノルマは果たせない　楓楽

川柳さんだ（兵庫）　村田　博報

春雨が相合傘に嫉妬する　哲男
険悪なムードにさせた遺言書　修平
ほろ酔いでこの世あの世を往き来する　健二
ここに居る多くの言葉要らぬ君　美智子
お祭のムードで令和担がれる　久美子
老いらくの恋カルピスをもう一度　万彩
人間に比べりゃクマも怖くない　恭子
原子力世界の恐怖だと思う　順子
怖かった父に学んだ深い愛　廣光
何時の世も一番怖い思い込み　義徳
京都駅耳に残った忍び泣き　寅男
こちらから逢いに行かねば逢えぬ人　加代子
同窓会遠い秘密を連れてくる　厚子
母忍ぶ思えば一字謝であろう　優子
百生きるとしを重ねた笑皺　一子
待合室がリハビリになる回復期　千代美
それだけでうれしい朝の青い空　利尚
回復を信じて海馬磨いてる　ヨシエ
回復は日にち薬というお医者　ひろ介
回復度試してみるかバイキング　宣子
あの世から追い帰されて持ち直す　ゆかり
険悪な空気を変えたのはジョーク　博
入社式ライバルらしき眼に出逢う　武彦
沖縄で二千円札生き延びる　正和
桜観て生き抜く力沸き起こる　喜久子
経験に黄昏のない米作り　迪
十連休一日ぐらい墓参り　耕治
そこどけと歩きスマホが大手振る　雅尚
被災もなく無事すこやかに老いている　堅坊
満開の桜をイジる春の雪　千賀子
説教もバカ息子には糠に釘　祐康
注意聞く間は愛がある証　美籠
うちの妻だんだんチコに似た口調　徹
黄信号五才の孫が渡らせぬ　好文
お静かにただ今開花いたします　ひとみ

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

こっそりと貯めたへそくり詐欺に遭う　草文
災害がすっかり地図を塗り替える　実満
こっそりとためた三途の渡し賃　綾子
蹴っとばす紅とおしろい塗った茸　重忠
どこまでが景気後退財務相　弘六
策なしに仮大使館ふさわしい　よしあき
こっそりと尿もれパンツ穿いてみる　宏章
童心に返り塗り絵はボケ防止　孝子
韋駄天に恋文託す若旦那　文道
ばあさんは同窓会に厚化粧　好幸
塗ったのは挙式以来の死出の旅　孔美子
見せられぬ物はサッサと黒く塗り　すみれ
何処ででも居眠りできる頓珍漢　大鯰
こっそりでないから恐いアポ電話　弘子
命綱着けて外壁母が塗る　茶子

イカしゃぶりながら不景気かみしめる　盛　桜
パソコンで遊ぶ振り込められた午後　和　子
こっそりと妻と探偵ごっこする　照　彦
韋駄天は風をつかんで走り出す　小　鹿
惑わされあれこれ塗って消えぬシミ　鈴
化粧して気合いも内へ塗り込める　英　子
景気よく梅もラッキョウ漬けておく　みさ子
韋駄天は持って生まれた天才だ　京
トタン屋根ペンキ塗っては補強する　かおる
人を縫いハイヨッ韋駄天渡月橋　一　平
ピンク本こっそり開ける袋綴じ　裕
逢いたくて韋駄天走りしてしまう　美ッ千
臨休が続きそのうち店を閉じ　恒
こそりとへそくりと言う資産持ち　満
「大吉」が結ばれ榊垂れさがる　蟹　郎
韋駄天の月日スピード違反です　拓　庵

西宮北口川柳会（兵庫）　藤井　宏造報

出合いの芽五十路で開き姪嫁ぐ　り　こ
ウソのない笑顔に心つかまれる　敦　子
伸びる芽を摘むこともある母性愛　一　徳
私にもあったはじける玉の肌　恭　子
来年は出来るだろうか釘煮炊く　新　録
遅いけど芽を出す子供誉め上手　みよし
小さな芽摘んでは駄目よ好奇心　盛　夫
風と木の対話に春の詩がある　千　代
雪解けの川面に跳ねる稚魚の群れ　正　彦
威勢いい声がはねてる魚市場　千賀子
淋しさをつかまれ詐偽にあう独り　洋次郎
道の駅ひとの買う物まねて買う　佐紀子
見栄はった孫がペラペラ全部ばれ　孝　子
寛容な態度で生きる丸い石　野　鶴
アスファルト割って芽吹いた街の春　宣　子
ぴちぴちの令和繋いでいく平和　順　子
すてきな娘素肌ぴちぴち髪濡れ羽　健　彦
歳に負けぬピチピチの好奇心　美津子
才能の芽かな大事に育てよう　光　久
メールなどもう届かない遠い人　いわゑ
令和の代月からメール届くかも　哲　子
腹立ちをやんわり言葉で包み込む　浩　司
一歩引く末席だから見えるもの　光　子
起死回生今は我慢の虹信じ　弘　子
煩悩がいろんな芽を育てたがる　邦　男
メール来て消したら妻が誰方から　靖　夫
遠慮せずこの幸せを噛みしめる　迪
春の野は新芽踏まずに忍び足　忠　夫
とろばかりつまみ財布軽くなり　野　薫
ぴちぴちのギャルとのハグに静電気　良　種
令和へのバトンしっかり握りしめ　氷　筆

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

呟きの中で本心小出しする　豊　仙
飲む人に呟いているビール味　輝　山
有り金は呟かないとチャックする　久　絵
光る星呟いてみる貴方でしょ　米　估
伝統を継ぐ人もなし泡立草　草　庵
伝統の祭りに踊る異邦人　徳　利
トレンドを壊し創ったビートルズ　瑞　人
猫が飛ぶ隣に何かあったらしい　寿　代
飛び出した金魚が二匹夢を見た　みちを
足下から飛び立つキジが度肝ぬく　あきら
天も地も緊急ニュース鳴らぬよう　哲　子
噛み締めて目標めがけ火花飛ぶ　左　余
花冷えに花粉が飛んでハークション　ゆ　き
飛ぶ程に夢中になれることさがす　邦　代
氷上ジャンプ背中に翼見えました　モナカ
複雑なコトバ飛び交い忖度し　柳　歩
狂乱のサロメ冷たいシャワー浴びている　美智子
さくら見て狂う私は日本人　芳　山
マドンナに狂った頃が華だった　弘　充
君の手に預けておこうこの狂気　孝　子
手を洗ういつかは狂う日のために　桂　子
禁断の糸が夕陽を釣り上げた　熊四郎
糸車ネズミが回す観覧車　七　七
赤い糸本当にある会ってみたい　朋　子
三つ編みの糸引っ張ってみるダンプ　とも子

長　柳　会（大阪）　辻村　ヒロ報

やいやいと思うが体動かない　ヒ　ロ
さあどうぞぐっと抱きしめルンバ舞う　洋　二
桜散る新入生の笑顔咲く　規　之
似合ってた服ぴちぴちでメルカリへ　隆　明
母さんが試着室から出てこない　正　博
長はいや二番手ならば引き受ける　登美子

頑固一徹通した父の頬かむり　和子
開く目が媚びる魚の売れ残り　福子
守り抜く覚悟問われている憲法　純風
まるで主婦具材を刻む園児たち　たけし
刻みネギ涙と嫉妬焼いて食べ　弘美
過去形は刻んで捨てるカレンダー　一男
為せば成る心に刻み深呼吸　ふみ
町角で見た紙芝居昭和の灯　靖博
平成を心に刻み令和へと　幸子
ビックベン離脱横目に時刻む　孝
育つ子の心に刻む子守歌　由夏
母の一生刻んだ家がいま空き家　正美
刻まれた足跡にある汗の玉　旅人
人生の大方感と目分量　わこ
適当な言い訳続け墓穴掘る　秀子
充分生きた残る人生適当に　ゆき
てきとうに生きてこの齢よしとしよ　千代
ほどほどに猫をかぶってした見合い　光弘
適当にの返事一番困ります　隆彦
妻の留守死なん程度に生きてます　淳司
適当に生きほどほどにピンコロリ　直樹
適当を許さなかった母の愛　英美
適当な相槌話弾ませる　孝代

岩美川柳会（鳥取）　山下　節子報

父の傘はボロボロに雨が漏りはじめ　一瑤
みえみえのお世辞は止めて生き延びる　一粋
ボランティアの笑顔が結ぶ町おこし　一平
身ぎれいにせよと僕だけにわか雨　完司
ボランティアのボランティアする炊き出し所　重忠
消費癖止まらぬ彼をボイコット　弘六
武士道の証日本のボランティア　茶子
嫁ばなし迷わず君の傘になる　美恵子
拉致問題止まったままで何時動く　たぬ
ボランティア出来る幸せまだ元気　菖子
浴衣着て男を上げる傘踊り　敏子
心臓が止まる勝負の緊張感　公子
三猿になっておこうか身の為だ　真理子
原発を止めても核のゴミは出る　彰夫
身の程を知らぬ輩が多すぎる　雅女
向い風笑顔で止める古女房　千代
立ち止りふと人生を振り返る　凱柳
骨と皮身の無いひとのダイエット　幸安
ボランティア弁当もらいグッドバイ　蟹郎
きっかけは傘さしかけただけのこと　節子

八尾市民川柳会（大阪）　中薗　清報

忖度を受けぬイチローの人生　紀雄
妻子居る我が家は温い指定席　高鷲
頼られて頼ることなく老いたくて　卓郎
夕焼けに映えて際立つ茜雲　壽峰
褒められて脳は誤作動熱くなる　涼子
まほろばの天を焦がして修二会の火　寿之
わだかまり脱いでほどけた花衣　あかり
一切を天に頼んで緩和ケア　欣之
傷口にふんわり積もる桜花　かこ
頑張った汗がぴかぴか光りだす　惠
遠からずまた近からず老い二人　耀一
てにをはの一字晴れたり曇ったり　華
令和とや新天皇にふさわしく　はな
送りオオカミだったらそれらしくなさい　草風
雑草という名で強く生きている　常男

六甲川柳会（兵庫）　奥澤洋次郎報

花ふぶき浴びて白寿に羽生える　利子
プライドが二ミリの誤差も許せない　和子
春の人事紙一枚が天と地に　浩司
ぺらぺらの蒲団にあったでかい夢　廣光
花の下一列に行くランドセル　恭三
ステルス機瞬時に消える百億円　博
入園日ママのお手手が離せない　狸月
すてきれぬプライド胸に老ゆる坂　弘華
朝ドラと渋茶で今日が始動する　盛夫
姿見に我が身疑う病み上がり　憲三
転倒もプライドかけて滑りきる　保雄
時時はふっと消えてゆく自分　洋次郎
ぺらぺらと喋る裕福なんだろう　迪
みもざふる庭にすわって恋かたる　邦子
始めると終わらないのがダイエット　博史
ぺらぺらの紙一枚で未来決め　芳江
三元号背負う背骨が愛しい　和郎
自分ならそう思うならやってみよ　京月
初初しい顔が並んだ入社式　美恵子
捨てたはずのプライドそっと戻って来　美穂

気が塞ぐ立ってよいしょと言ってみる　和宏
衣替え薄い上衣に出たくしゃみ　敏夫
一本道を真っ直ぐ行く愚直　武彦
初うぐいす鳴いて還付の通知あり　じろう
スタートライン並ぶどんぐり光ってる　千賀子
写経して自分をすてて軽くなる　日呂志
令和には世界平和の句する　正彦
花つぼみ令和に祈りこめて吹く　弘
ランドセル七つの夜明け背なに負い　英太
一円玉一円なりの自尊心　道子

川柳ねやがわ（大阪）　籠島　恵子報

ハードルを下げて子供の背中押す　信子
六根清浄蟻が運んでいる祈り　鈍甲
海は青令和につなぐ拉致家族　麗
一本の力になっていく被災　壽峰
契約の裏で動いた父の腕　博泉
皮肉には優しい笑みをのぞかせる　弘委智
早いとこ契約せんと気が変わる　修
皮肉ではなくてあなたは美しい　弘一
行きたい所自分の足で運ぶ幸　賢子
無駄足を運び真実見つけ出す　祥昭
葉桜へ少し自分をとり戻す　星雨
新元号わたしはなにも変わらない　朝子
セコハンで昭和一桁入学日　かすみ
絵手紙に寂しさ溜めているさくら　茜
この俺は嫌な奴だと知る介護　和織
初孫が家族に運ぶ夢無限　ルイ子

太陽と契約があるこぼれ種　郁夫
八二円で私の恋が運ばれる　玲子
詫び状にそっとひと葉の青もみじ　寿子
うなるほど金はあるのに寝たきりに　仁
志望校目指し猛勉叶う幸　尚世
思い出の五つ六つは花の下　恵子
たっぷりと込めた皮肉が判ってず　亜成

川柳藤井寺（大阪）　太田扶美代報

イチローが静かにバット置きました　紀雄
探さないでと妻走り書きのメモ　俶子
期待した泡も出ないし茶も出ない　まつお
花終り流れを変える花筏　喜代子
おだてられ挙句の果てはシャボン玉　一文
人生は光と闇の浮き沈み　キーキー
蝶の世界も少子化らしい花畑　シルク
ひと言の小言で妻は出て行った　いさお
浮き雲が惚れてる千色の緑　フジ子
浮き沈みある人生がおもしろい　一歩
理髪師が春剃り落とし泡をふく　しげ子
月の雫浴びて泡のまま生きる　弥生
水の泡だろうと目一杯の汗　久仁雄
令和へ命泡立てている八十路　みつこ
泡銭弾ける前に募金箱　光男
静寂の中で抹茶の小さい泡　瑠美子
一日の疲れビールの泡に溶け　俊雄
現実を見詰めず踵浮いたまま　雅美
夢でした泡沫でした嘘でした　扶美代

川柳塔わかやま吟社　小谷　小雪報

男ってついでに無駄な物も買う　大輪
負けいくさ補欠も共に叱られる　保州
偏西風ついでに乗せて来た黄砂　徑子
売り出しについで買いして大出費　よしこ
急停車おっと危ないアクセルだ　京子
急速に終わりを告げる砂時計　小雪
急を告げ必要な物まとめてる　ほのか
緊急へ自問自答の頼りなさ　冨美子
思惑があって返事は急がない　准一
友達についで私も誘われる　紀久子
髪染めるついでに眉も染めておく　ちづこ
阿修羅越え苔生す明日へ老夫婦　紀子
苔寺で縁を拾ってまだ夫婦　まさみ
縄文杉に勲章のような苔　日出男
エラーひとつ白いページを抜けだせぬ　寿子
見くびっていませんか一ミリの誤差　知香
見つめるとはにかむ苔にはにかんで　道夫

大山滝句座（鳥取）　新家　完司報

川柳で今日一日の憂さばらし　規雅
頭剃り自転車泥棒お遍路さん　コスモス
エンストをしたら廃車にされそうだ　紀の治
ペテン師はペテン師の顔していない　芳光
来て去ってじらしてふふ春のバカ　くにこ
エンジンを全開してもドン臭い　照彦
インチキだ薄くてハムが剥がせない　楓花

アポ電も話し相手とお年寄り　雄大
まだ首がぐるっと回る大丈夫　石花菜
エンジンを吹かして厳狩りに行く　麦青
桜サクラ欝の日干しをするベンチ　幸子
うちのエンジンオンザロックがエネルギー　裕
年々と地球回転速くなる　富隆
インチキと思えば病なおらない　けいこ
鬱陶しい噂話は耳かさぬ　風露
おくやみは一斉メールの回覧板　野蒜
斬られ役さっきあそこで死んでいた　熊四郎
ナイスキャッチ狸の尻尾見えている　七七
エンジン全開すっぴんで飛び出す　モナカ
国会は子どもの目にはインチキだ　正男
手の平をエンジンにして竹トンボ　道唱
悪智恵が回ると多弁なってくる　重忠
僕の脳たまに回路がショートする　清明
猪が筍荒らす鬱の籔　久子
あげた物回りまわって帰って来た　希楽良
焼酎も回してほしい回る寿司　完司

城北川柳会（大阪）　近藤　正報

復興を目指し汗した終戦後　堅坊
夢無限新元号へ期待かけ　野鶴
いかなごが消えてくぎ煮の春淋し　杞香
マドンナが来るなら行くよ這ってでも　洋志
後輩にすべて委ねて潔い　克己
令和の世理想は高く果てしなく　義昭
県民の意志踏みにじる頬被り　肇

散り急ぐ花を留める温い酒　捷二
苦労人出番は採めに採めた後　北舟
四度目も断るでしょう栄誉賞　榮子
思い出はいつもはかなくピンク色　峰子
ダブル選何をするやら雀二羽　たもつ
和解して心遣さず弥陀の下　千恵子
子と論じひしひし思う世代の差　志華子
論戦の火照りが冷める屋台酒　宏造
芽が出ないそれならサプリ足してみる　(恒)博
和解せず悔んでいます通夜の席　和夫
酒で揉め酒で取りもつ仲直り　俊雄
自画像に母のエクボと父のシワ　郁夫
新元号九条だけはゆるぎない　朝子
金力ないけど深い愛がある　賢子
後ろ髪ひかれるほどの髪がない　修
妻ダウン養生せよと厨房へ　正彦
令和への新たな夜明け期待する　弘委智
感情も涙も閉じる和解金　寛昭
論客がいるから会議長くなる　榮子
十連休金と疲れがどっと出る　満作
料亭でしか議論出来ない永田町　(村)博
イチローの背中に匂うダンディズム　星雨
花吹雪浴びて財布は盗まれる　実
葱刻む令和よ花よ子よ孫よ　直樹
退路断ち男真価の見せどころ　和
論ずるのは苦手聞く方に回る　勝弘
的外れ次善の策打っている　正

豊中もくせい川柳会（大阪）初代　正彦報

やさしいコトバ聞くと詐欺とは思えない　公子
コンパスの範囲に入れたいひとが是非　求芽
8Kのはっと息のむ鮮やかさ　英旺
今もなぞ石積み技術ピラミッド　英三
反対走るはっと気がつく新幹線　多美子
放たれたキューピットの矢不公平　時子
肥後の守今は欠伸の余生です　武彦
情報を風の便りで聞く孤独　健二
私を語る十七音を光らせて　(永)玲子
失敗へ修正液が足りません　野鶴
傘さして夜桜仰ぐ今日の幸　ヨシエ
イートイン主婦のひととき解放区　里子
趣味という森で小鳥になっている　堅坊
積立金余生ぐらつく低金利　志津子
ハマナスや五月一日晴れとくれ　美津子
引越しのプロの積荷の知恵を借る　久子
善行の数数他人は見ています　見清
放し飼いにされたにわとり空を飛ぶ　千鶴子
令和よりわたし西暦尊重派　蕉子
人生は盛りだくさんの絵巻物　(岩)玲子
一筆箋に好きとだけあるラブレター　則彦
生きようと力んで春を待つ新芽　美智代
白髪がはっとする程品が良い　葉子
クレヨン画パパはメガネの二頭身　黒兎
平成の重荷を積んだまま令和　正彦
胸で飼う蛍そろそろ解き放つ　きらり

句会名	日時と題	会場と投句先
あかつき川柳会	14日(金) 14時締切 天敵・じりじり・歩・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第１ビル２Ｆ） メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2－312　前田紀雄
岸和田川柳会	15日(土) 14時締切 疑問・担ぐ・恥ずかしい (読み込み不可)・ペアー	岸和田市立総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ５分 〒596-0076 岸和田市野田町2－33－19　中岡香代
川柳塔みちのく	15日(土) 17時締切 昼・スパイス・母	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」℡0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　℡0172-36-8605
川柳ねやがわ	16日(日) 13時締切 難しい・浅ましい・止る 自由吟	寝屋川市立産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
川柳藤井寺	16日(日) 14時締切 麻・リクエスト・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303 鈴木いさお
豊中もくせい川柳会	17日(月) 13時50分締切 迷子・崩れる・やがて 自由吟	豊中市立中央公民館　3Ｆ 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩５分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　初代正彦
川柳さんだ	18日(火) 13時締切 くっきり・結末・サポート・許す 自由吟	キッピーモール（JR三田駅前） 〒669-1545 三田市狭間が丘5－10－19　谷　祐康
川柳たちばな	19日(水) 13時45分締切 席題・意外・降る・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) 阪急塚口駅北へ10分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
川柳塔すみよし	22日(土) 14時15分締切 種・揺れる・憎い	住吉区民センター２階　集会室４ 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお
和歌山三幸川柳会	22日(土) 13時15分締切 大きい・雨・もし	和歌山商工会議所　４階　第３会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの市民川柳会	23日(日) 14時締切 詰・呼吸・ルージュ	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車　北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
川柳ふうもん吟社	23日(日) 13時締切 自由吟・美人・掘る・コピー 席題	開発ビル　２Ｆ　砂場事務所　鳥取市片原１－107 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
南大阪川柳会	24日(月) 18時30分締切 入院・荒れる・厳しい・ふわり	大阪市立住まい情報センター　５Ｆ　研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋６丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都塔の会	24日(日) 14時締切 ボトル・拝・ちゃっかり	ハートピア京都　京都市中京区烏丸丸太町 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勧修寺堂田70－16　桝本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

6月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	1日(土) 14時締切 スキップ・佳境・吠える 自由吟	旭区老人福祉センター　3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
川柳とんだばやし富柳会	1日(土) 14時締切 光・あんた・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0064　富田林市不動ヶ丘8－31　山野寿之
倉吉川柳会	1日(土) 14時締切 どんちゃん・いそいそ・軽い 席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔まつえ吟社	1日(土) 13時30分締切 シミ・凄い・お金・自慢	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222－1　相見柳歩
川柳塔なら	6日(木) 14時締切 鼻・後悔・研ぐ	奈良市立中部公民館　4F 奈良市上三条23-4　近鉄「奈良」駅④番出口　徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787　安土理恵
六甲川柳会	8日(土) 14時締切 花・決意・誘う・自由吟	六甲道勤労市民センター　5階 E室 JR「六甲道」駅南隣　メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4－11－11　上田和宏
川柳塔打吹	8日(土) 13時30分締切 手帳・負ける・ゆったり 席題	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
川柳大阪	8日(土) 14時締切 サミット・寝言・情報	メトロ・長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
八尾市民川柳会	9日(日) 14時締切 梅雨・ずるずる・逃げる・雑詠	八尾市安中町３－５－１　渋川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
川柳塔わかやま吟社	9日(日) 14時10分締切 兼　題＝ゴロゴロ・通知・なるほど 課題吟＝百	和歌山商工会議所　4階　和歌山市西汀丁３６ 兼　題　〒649-6253 岩出市紀泉台366　藤原ほのか 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
西宮北口川柳会	10日(月) 14時締切 コンビニ・危うい・ムード 自由吟	西宮市立中央公民館　6階　講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほたる川柳同好会	11日(火) 13時30分締切 天気・困る・まさか	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
川柳塔さかい	11日(火) 14時締切 切ない・錆びる・折句：なごや	東洋ビルディング　4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5－171　矢倉五月
川柳あまがさき	11日(火) 14時締切 洗う・橋・ゆらゆら・自由吟	尼崎市女性センター・トレピエ　2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造

柳界展望

▽出　版△

○（故）両川洋々句集『自叙伝のつづきは柩の中で書く』。新葉館「川柳作家ベストコレクション」B6判P95。定価1200円＋税。

○吉村久仁雄（常任理事）川柳句集『命のめぐみ』美研アート発行、A6判P146。頒価1000円。

▽動　向△

○南大阪川柳会4月1日役員交代。

会　長　井丸　昌紀
副会長　平賀　国和
　　松岡　篤
　　寺本　実

▽訂正とお詫び△

○5月号P128上段10行目。雑音から芯の叫びを聞き分ける→雑音から真の叫びを聞き分ける

○5月号P128上段25行目。下山して感謝の手を合わす→下山して山へ感謝の手を合わす　澤井敏治

○5月号P72・17行目。繁縷の花は母さんの微笑み→繁縷の花は母さんの微笑み

▽新誌友紹介△

横浜市　加藤　佳子

大阪市　蔵田　光子
池田市　蔵元　一弥
　紹介者　水野　黒兎

常任理事会＝5月7日出席21名①業務分担の変更②同人拡大③句集『麻生路郎』発刊提案について④定例確認事項。次回常任理事会6月7日㈮AM10時～

新同人紹介

（訂正再録）

中堀　優
―理恵・富子・恭昌・眞澄推薦

田賀八千代
―無限・金祥・楓花・一瑤推薦

門村幸子
―完司・芳光・照彦推薦

第66回　八尾市民川柳大会

とき　8月18日（日）正午開場
（昼食は済ませてお越しください）
ところ　八尾文化会館　プリズムホール5F　レセプションホール
（近鉄八尾駅下車　徒歩5分　西武デパート東隣）
かいひ　2000円（作品集・鉢植え花）
お話　みぎわ　はな（四井　汀花）氏
席題と選者　各題2句　提出・席題なし
「里」　槐山　常男　選
「雨」　従野　健一　選
「息」　西澤　知子　選
「黒」　平井美智子　選
「鳥」　長島　敏子　選
「坂」　森中　惠美子　選
「音」　土田　欣之　選
出句締切　午後1時
懇親宴　4000円（希望者のみ当日受付）
お問合せ　土田　欣之（電話072-992-4934）
主催　八尾市民川柳会

川柳えんぴつ社
第三回　川柳誌上大会

課題　「雑詠」「ギャップ」（各題2句・各題5名共選）
「雑詠」　岡崎　守・津田　暹
島田　駱舟・赤松ますみ
八甲田さゆり
「ギャップ」　高瀬　霜石・新家　完司
美馬りゅうこ・平田　朝子
玉井たけし
投句用紙に作品・住所・雅号・郵便番号・電話番号明記のこと
投句料　1000円（郵便小為替・切手不可）
締切　7月31日（水）必着
投句先　〒939-2729　富山市婦中町雪の杜297-28
川柳えんぴつ社誌上大会係
山下　功　宛
問合せ先　川柳えんぴつ社　会長　坂下　清
℡　090-2833-4361
発表　川柳えんぴつ誌　2020年4月号（予定）
主催　川柳えんぴつ社

第34回 国民文化祭・にいがた2019 川柳作品募集要項（概要）

「開港150周年―みなとまちロマン新潟で川柳の祭典」

1. **応募受付期間**　2019年4月20日（土）～7月10日（水）（当日消印有効）
2. **応募規定**
   （1）**作　品**　一人各題二句詠（未発表作品に限る）
   （2）**応 募 料**　事前投句1、000円、当日投句1、000円（ただし、海外投稿者、身体障害者手帳等の写しを添付された方は無料）
   振替口座　00960-2-276220　加入者名　川柳の祭典国民文化祭新潟大会
   （3）**応募方法**　所定の応募用紙に必要事項を記入し、郵便振替請求書兼受領証又はその写しを添えて応募してください。
   （4）**応 募 先**　一般社団法人全日本川柳協会　〒530-0041　大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905
3. **題・選者**
   〈事前投句〉
   「すらすら」＝菅原孝之助（新潟）　「　港　」＝土橋旗一（徳島）
   「踊　る」＝髙瀬霜石（青森）　「開　く」＝荒川八洲雄（愛知）
   「　島　」＝荻原鹿声（栃木）　「越　す」＝阪本高士（奈良）
   「出会い」＝今田久帆（静岡）
   〈当日投句〉
   第二次選者　小島蘭幸（広島）　岡崎　守（北海道）　赤井花城（兵庫）
   平田朝子（熊本）　竹田光柳（東京）
4. **賞**
   文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・新潟県知事賞
   第34回国民文化祭、第19回全国障害者芸術・文化祭新潟県実行委員会会長賞
   新潟県教育委員会教育長賞・新潟市長賞
   第34回国民文化祭、第19回全国障害者芸術・文化祭新潟市実行委員会会長賞
   新潟市教育委員会教育長賞・全日本川柳協会理事長賞・新潟県川柳連盟会長賞
5. **発表会場**
   川柳大会（当日投句、入選・入賞発表、披講、選評、表彰式）
   2019年10月6日（日）9時30分～16時30分　新潟県民会館　大ホール
   後日、入選作品集として刊行し、応募者全員に無料配布します。
6. **問い合わせ先と募集要項の依頼先**
   〒530-0041　大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905　一般社団法人全日本川柳協会
   TEL（06）6352-2210　FAX（06）6352-2433
7. **主　催　者**
   文化庁・厚生労働省・新潟県・新潟県教育委員会・新潟市・新潟市教育委員会
   第34回国民文化祭、第19回全国障害者芸術・文化祭新潟県実行委員会
   第34回国民文化祭、第19回全国障害者芸術・文化祭新潟市実行委員会
   一般社団法人全日本川柳協会・新潟県川柳連盟

編集後記

★湖の孤独は　雲を映すのみ　　薫風

★平成最後の4月30日から令和元年にかけて各地で、カウントダウンや花火など華やかにお祝いをしているテレビを観た。郡上八幡では時代を跨いで踊り明かしたようだ。カレンダー一枚剥ぐだけで、元号が変わるだけで、世の中が劇的に変化するとは思えない。しかし渋谷の街を奇抜な仮装でゴミを集めている人たちを観たとき、もしかしたら若者たちも令和に夢を抱いているのかも知れないと思った。私たち高齢者も時代に期待してもいいのだろうか。令和に「きぼう」とルビをふりたい。

★大化から平成までの時代の出来事を当てるクイズ番組を観た。ヒントとして黒いピーナッツや飛行機、時の首相の映像が流れるが、20代から50代までとおぼしき出演者は答えられない。ロッキード事件は1976年、昭和51年に起きた。若者にとっては遥か彼方の歴史上の出来事として風化しているのだろう。しみじみと昭和は遠くなりにけり。

★川柳界の高齢化が叫ばれる中、第7回卑弥呼の里誌上川柳大会では30代40代の特選者がでた。川柳初心者らしき作品を読みながら、川柳塔web句会から川柳の楽しさを知り、本格的に川柳と取り組もうとする若者が出てきてほしい。次代の川柳界を担ってくれることを期待したい。

★くつしたさんかたっぽへんじしてください

　3歳　ちか

　ほっぺたがつめたくなるよソフトクリーム

　4歳　拓

　雪がふるふわっとじゅうたんあらわれた

　小2　陽

　思わず頬が緩む竹原川柳会の可愛い会員さんの作品である。ちかちゃん、拓くん、陽くんに川柳界の未来を期待してもいいだろうか。　**（朱夏）**

□『川柳塔』平成4年5月号　西尾栞先生の「巻頭言」より抜粋。

ひとこと

「紅手毬」

今朝のニュースで、大阪造幣局今年の桜は「紅手毬」と聞き思い出したことがあります。

平成一三年ごろ、何も解らないまま、私は義姉と友人を誘って川柳教室に入りました。高杉鬼遊先生でした。それから堺川柳会にも参加。玄也さん、今は亡き朋月さんたちもご一緒でした。

川柳を始めた頃、通り抜けを飾る入選短冊は俳句だけでした。翠洋会の田中正坊さんたちが運動されて、川柳も俳句同様応募できることになりました。河内天笑先生に連れられて参加、三句ほど応募箱に入れました。何とそのうちの一句が天位とは！

ご懐妊祝うが如く紅手毬

造幣局に行く朝、雅子様のご懐妊のニュースを聞き、また美しい紅手毬とも出合い、句に纏めたものでした。川柳の世界に入り色々な方々とお知り合いになり、楽しい老後を元気に送れる幸せを感謝しております。　**（榎本　舞夢）**

「スランプというのがある。……作句を始めて五年に一度か、十年二度、周期的にスランプになる。いわゆる壁に突き当るのである。突き当った壁を破って向うへ進まねばならない。はね返されたらそれまでである。どうしてもつき破らなければならない。つき破るのはどうするか、手を拱いては破れない。句会へ足しげく通って他人の句にもまれなければならない。また好きな先輩の句集を徹夜して読了しなければならない。……ただただ、まっしぐらに行くんだ。体当りで、苦しいところへ飛び込む。するとその気魄だけで、壁は破れるんである。スランプから脱却できるものである。これは八十三歳になった私自身に言い聞かせている言葉である。」と述べられていた。**（勝弘）**

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにお願いいたします。

川柳塔誌**新規**購読申込書

年　月　日

きりとりせん

氏名		
住所	〒　－	
電話	－　－	
紹介者		

（　）年　月から半年　５０００円
（　）年　月から一年　９８００円
　　該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201
川柳塔社（電話　０６－６７７９－３４９０）
振替　００９８０－４－２９８４７９

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

本社６月句会

とき　６月７日㈮　13時開場・13時40分締切
ところ　アウィーナ大阪　４階　金剛の間
天王寺区石ケ辻町19―12　電０６・６７７２・１４４１
おはなし「なにわ柳壇入選句で平成回顧」柿花和夫氏
席題「　　」平井美智子選
兼題「計　算」細川花門選
「　手　」山田葉子選
「うきうき」村上直樹選
「噛　む」松原寿子選
「我　慢」小島蘭幸選
（各題２句以内）
会費　１０００円　**投句料**　５００円（切手可）

本社７月句会

５日(金)　午後１時から
兼題「無　い」「おいしい」「休　む」
「　今　」「想　定」

作品募集

８月号発表（６月15日締切）
川柳塔（８句）小島蘭幸選
水煙抄（８句）西出楓楽選
愛染帖（２句）新家完司選
檸檬抄「普　通」（２句）川端一歩共選
山岡冨美子
インスピレーション・ナビ（２句）大西泰世選
一路集（２句）「荒れる」堀　正和選
「　湯　」宮野みつ江選
初歩教室「つなぐ」（３句）高瀬霜石担当
初歩教室「つなぐ」は９月号発表

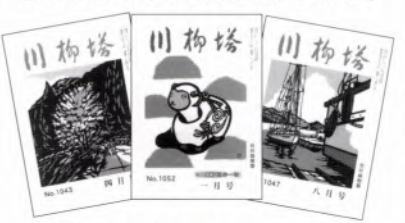
９月号
檸檬抄「歩　む」
一路集「便　利」「ガラガラ」
初歩教室「知　恵」

川柳塔WEB句会のご案内

課　題「何　か」なかはられいこ　川上　大輪　共選
締　切　６月20日　**発　表**　６月25日頃
投句料　無　料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

定価　八百円（送料97円）
半年分　五　千　円（送料共）
一年分　九千八百円（　同　）
二〇一九年（令和元年）六月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル２０１号室
発行所　**川柳塔社**
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

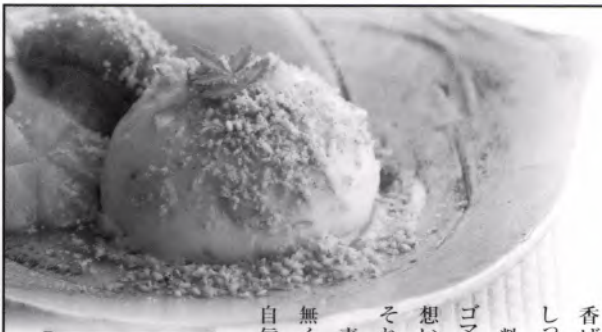
川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート
〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL（06）4800―3018
FAX（06）4800―3028
Eメール　bikenart@ea.mbn.or.jp
ホームページ　https://www.bikenart.com
※事務所移転につき住所・電話番号が変わりました。

令和元年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一一〇五号　川柳塔　六月号
定価　八百円（送料　九十七円）

オニザキの プレミアムロースト
つきごま
杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、香ばしい薫り。舌と記憶にしっかりと残る、深いコク。料理をより美味しくするゴマを作りたい、真っすぐな想いから生まれた逸品。それが「プレミアムロースト」。素材本来の良さを余すこと無く引き出した、オニザキの自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL（フリーダイヤル）0120-30-5050

「誹風柳多留」など、江戸川柳の原典
そして現代盛んに行われている川柳のルーツ

『川柳評前句付万句合』全13巻

本件は、川柳評前句付興業に於ける、高点句付句を翻刻活字化、書籍にして頒布しその多くを残すことによって、今後の研究に資することを目的とする事業です。諸賢のご支援賜れましたら幸いです。

各巻 6,000 円＋税＋送料 510 円
A 5 判・平均 320 頁　ハードカバー
分売不可、13 巻セットでのご購入をお願い致します。

本書は、書店での店頭販売は致しません。
下記に予約して御購入願います。
予約〆切７月末。

〒419-0313　静岡県富士宮市西山１４１７-２
川柳俳研究会・清　博美
TEL･FAX：０５４４-６５-０２６４
http://www.edosenryu.com

雑誌 05703－6